1999

大正十三年一月二十九日（第三種郵便物認可）
昭和五年　四月一日發行（毎月一回一日發行）

京城雜筆

永樂町人　編輯

四月號

〔第百三十四號〕

春のレデイメード
宣傳大賣出し

廉價時代に順應して丁子屋獨特の高級レディメード特價大提供!!

三月二十日より
四月三十日まで

合オーバー（高級カルゼ、タレバ、セル、サキソニー）二十圓より

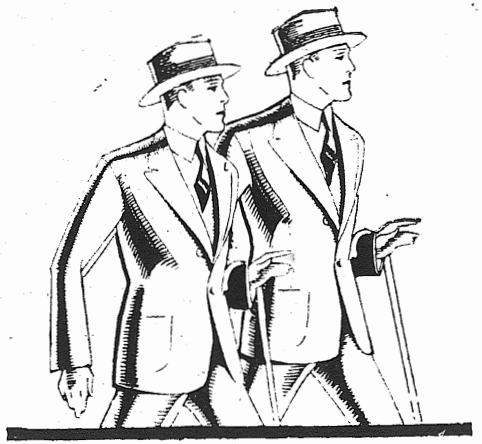
特價合オーバー（表實用カルセ、裏絹サテン）十五圓

セビロ三揃（セルサキソニー）二十八圓より

黑紺絹セル三揃（セルジ、ザー）二十三圓より

詰襟上ド十五圓より

合トンビ二十圓より



期間中既成合服合オーバ御買上の方へ一齎毎に景品抽籤券差上げます
（抽籤は終了直後警官立會にて行ひます）

景品 洋服ダンス（抽籤）十本全部
特製カラ、カフス釦（洩れなく進呈）

丁子屋

櫻正宗

瓶詰
樽詰

純良清酒の代表

温かき酒は
温かき家庭を作る

宮内省御用達
山邑酒造株式會社

E—1—2—B

酒の名は三巴自慢でも
自慢する譯ではありません
京城府第五回新清酒唎酒會に於て
最優等の首位を占め三度優勝旗を受けても
自慢する譯ではありません
唯常に良き酒を愛飲家諸君に提供して
鮮産奬勵の實を揚げたいと
研究努力したる結晶なりと思ひます
どうぞ鮮産奬勵又は衛生上良き新しき
酒を御愛用あらんことを願います

京城蓬萊町四丁目
三巴酒造合資會社
電話本局一〇六七番
代表者　浦田多喜人

ルービロポッサ

ンロトシンボリ

金剛山　金剛煎餅
金剛羊羹　金剛饅頭

金剛山産松實松花應用菓

金剛飴

金剛柏子（松の實　塩炒り）
金剛柏子菓（朝鮮式　松の實菓子）

金剛おこし
金剛しるこ

京城本町二丁目
龜屋商店
電話二十七番
本局四七五番

キリンビール

最古の歴史
最新の設備
最上の品質

麒麟麥酒株式會

内地への御土産
お手近の御贈答品
日常の御使用品には
鮮内産品使用御奬勵の
御思召を以て
三和高麗燒
漢陽高麗編
三和燒
製造元
富田商會へ
御下命願上げます
京城南大門通三丁目
電本三三〇九
同本町二丁目
電本五五四

サクラビール

清涼飲料

ミヨシノサイダー

慰安の糧

この香味！
この色澤！
この泡立ち！

グット一杯　うまい
もうまい　陶然として
憂さも苦勞も忘れ
明日は又潑溂として
活動の舞臺へ

誰でも直ぐ使へる

大谷和文タイプライター

が參りました

○和英兩用　○鞄に入れて携行自由　○字數二千四百外換換自由

朝鮮中央總代理店

京城明治町一

櫻井秀專商店

電本園三〇〇二番

看板裝飾專門

特	ア	宣	セ	パ	模
設	ー	傳	ツ	ノラ	
舘	チ	塔	ト	マ	型

早川裝飾工務所

早川天望

京城府黃金遊園內

電話本局二四七六番

男子酒を好まざる方ありや、酒を好む方にして『福迎』を賞美せざる方ありや。春は都門に訪づれましたちまた〳〵の柳は、青きかつぎを裝ひました。いざ春の夜を『福迎』にほろりとなりませう。

『リットル』は新釀酒です。下戸にも、上戸にも、一杯『ウム、これア……』といはれます人生最上の慰籍物です。『リットル』を用ひて家庭圓滿ならざる家ありや。

京城本町電車終點

難波酒造場

電話 本局一四六一 光化門一一四五番

四月號目次

醫者？藥屋……瀨戸病院　瀨戸潔氏（二）
品川雜記……中央朝鮮協會　中島司氏（三）
林響さんのこと……城大法文學部　秋葉隆氏（四）
佛蘭西の人情……洋畫家　山田新一氏（五）
南佛の風景（洋畫）……山田新一氏（六）
偶感？偶感……本町四丁目　岩本武治氏（七）
秋波……倭城臺科學館　重村義一氏（八）
塵を行く（短歌）……南米倉町　角田不案氏（九）
南山の狐……城大醫學部　杉原憲行氏（一〇）
お花見……京城測候所　窪田次郎治氏（一一）
明盲亂談……載寧三菱鐵山　高橋昇氏（一三）
八と九……城大附屬病院　松井權平氏（一五）
一撞の梵音五千圓……總督府社會課　上內彥策氏（一六）
新らしき婚姻制度……高等法院　野村調太郎氏（一八）
寂寥（短歌）……城大附屬病院　廣田康氏（一九）
淺春（短歌）……櫻井町一丁目　德野鶴子氏（二〇）
國境とところ〳〵……朝鮮新聞社　野崎眞三氏（二一）
將棋漫談……將棋六段　辻繁之助氏（二二）
財界漫筆……京城日日新聞社　別府八百吉氏（二三）
九龍淵と山菊……朝鮮銀行　長谷井市松氏（二五）
二つの災難……高等法院　伊藤憲郎氏（二六）
吾子を送る（短歌）……倭城臺官舍　松村もゝよ氏（二七）
春光雜詠（短歌）……城大豫科　名越那珂次郎氏（二九）
竹崎順子……京城婦人病院　工藤武城氏（三〇）
展墓（短歌）……野田醬油支店　市山盛雄氏（三一）
高架索の囚人……朝鮮史編修會　瀨野馬熊氏（三七）
或日の新聞から……京城日報社　笠神志都延氏（三八）
京取十年……櫻井町　岡部駿策氏（三九）
風俗研究と川柳……南米倉町　今村鞆氏（四〇）
名案……難波酒造場　難波留三郎氏（四一）
易の新境地……小唄坂　岡村介石氏（四二）
近詠（漢詩）……朝鮮銀行　木本房太郎氏（四三）
やまと歌……國風會京城支部（四五）
交詢社雜記……東京にて　鐵假面氏（四六）
失業と機械文明觀……朝鮮銀行　澁谷禮治氏（四七）
對話十分間……京城日報社　久松前平氏（四九）
贈を冷した話……本町警察署　大和田臨之助氏（五一）
書道漫談……京城齒科醫專　森哲郎氏（五二）
孝子洞安居の歌……總督府學務課　神尾弐春氏（五三）
蛇の思出……光化門官舍　西岡照枝氏（五四）
畫壇雜記……洋畫家　多田毅三氏（五七）
街頭小景（短歌）……朝鮮鑛業會　德野眞士氏（五九）
黎明……南大門小學校　山本吉久氏（六〇）
ひとり言……永樂町人（六一）

醫者？藥屋？

瀬戸潔（瀬戸醫院）

先づ健康！これはこの頃の流行語だ。衞生記事が新聞雜誌に於いて最も嫌はれて居つたといふ明治初期とはまるで反對だ。

× × ×

現在我國に於ける一年間の賣藥總賣上高は一億圓。醫者の總數は四萬幾千人で一人平均二千圓足らずの收入しかないとの事だから、賣藥賣上高の方が一寸醫者の總收入の約二倍にもなる譯だ。

× × ×

先づ健康！と叫ぶ諸君は醫者を度外視し藥屋と直接取引をして自分の健康を保持しやうとする。御芽出度事だ。

× × ×

支那の人は親に仕ふるため醫者でなくとも衞生書を一通りは讀んで置くとの話だ。而して醫者に診察して貰ふ時には醫者と議論をして醫者が當方のいふ通りになれば御褒美に藥を買つてやるさうだ。

× × ×

利に敏い支那の醫者はソコを狙ふ。病氣そのものゝ原因豫後經過を考ふる前に、相手の弱點につけ込んでその財布を窺ふ事が本職ださうな。

× × ×

兎角オベッカを使ふと人は悦ぶものだ。支那の醫者と日本の藥屋サンとの雜種が、ソンジョ其處らにゴロ〳〵してゐやアしないだらうか？。

× × ×

官公立の醫療機關でさへ治療方面だけに沒頭してゐたら立つて行けないといふのが現今の世相だ。飯が食へない時に雜種になつたつて何んの不思議もないかも知れぬ。

× × ×

吾々は誠心誠意治病の事だけを考へて飯の食へるところまで往きたい。

都鳥
鳥割水
烹焚
旭町一丁目
電本三三六六

◈名物帳漫記

三木一彦

○朝鐵の技師長松永工氏が、京城を去るのは、聊か惜しい。

○アノ巨體、アノ鎌髭……それだけで、京城の一ツの名物だつた

○何んでも月給も、千餘圓をとり、京城での給料のとり頭だつたさうな。

○讀書家で、話術に長じ、趣味も廣汎……書畫、骨董、陶瓷器、何んでもヒネつてゐた。

○最もお得意は、東西古今の猥書を、シコタマ蒐集してゐることで、この點では、日本的の人物といはれる。

○曾て平壤の松井廟南翁——この人も、斯道の泰斗である——が松永氏の雷名を聞き。一夕往訪して、大に相互の蘊蓄を角し、且つ秘書の見せくらをしたさうだが、翁は遂にカブトを脱ぎ。『ウーンえらい！。當代に貴公のやうなエラ物があらうとは。……ワシも、もう安心した。ウン、二代目が出來た』、スッカリたんのうした。

○松永工氏……さういふ面白い人間だつた。

大多數の地方はこつちのものだ、

京城雜筆

品川雜記

中島司（中央朝鮮協會）

清票を投ず

第二回普選の投票日たる二月二十日は、小雨あるべしとの豫報も外れて、朝から理想的な日本晴れであつた。丸の内への出勤前に尊い一票を投ずべく、品川東海小學校へ行く途中、御殿山の臺地から雪の衣神々しい富士の靈容が見晴らされたのも、嚴肅な選擧氣分へ一脈の清快味を添へた。投票場の受付で入場券を提示して投票用紙を渡され、私は自らの正義觀念と良心の命ずる通りに候補者の氏名を墨書し、傍目もふらず投票し去つた。選擧といふものは、何となく精神の緊張するものだ。

此節では、小學校に通ふ我が家の子供でも、私の屬する選擧區たる東京第五區の候補者の氏名を承知して、相當に選擧といふ事を意識して居るやうだが、私の少年時代などは、さつぱり選擧などとは沒交渉であつたと見え、少しも記憶をもつて居ない。昔と較べて今日は確かに憲政思想が國民の間に普及して來たことがわかる。何と言つても普選時代だ。

勝敗の數

二月二十日が投票日で翌二十一日から開票が始まつた。第一日には全國の都市の形勢が判るので東京は到る所新聞社の速報所が設けられ、隨所に民衆の黑山をなした放送局からは晝夜頻々と放送された。丸ビルでも一階東側入口の森永キヤンデーストアと內部中央富山房のショウインドウに夫々朝日新聞、白木屋賣店の横に時事新報此の三ヶ所に綱報設備が出來た外ラヂオ屋で大聲放送がされたのでさしもに廣きビルヂングの大步廊は人だかりで交通杜絕の有樣となり、俄に綱索を張り警官や守衞で交通整理に苦心して居た。刻々に當落が判る。觀衆は手に汗を握り片唾をのむ。無殘やな安部磯雄さんの落選、『氣の毒だ』『惜しい事だ』の嘆聲が一齊に起る。大山郁雄當選と報ぜらるゝ刹那群集の中からワッと歡呼の聲が揚つた。

何と言つても今度の總選擧は政友會と民政黨との爭覇戰で、野黨政友會が民政黨を政權から叩き落して犬養總裁を宰相に奉るか但しは又與黨民政黨が政友會を壓縮して政局の安定を把持するかの大事の瀬戸際で、國民の總意が犬養の政友と濱口の民政と其の何れに傾むくか、頗る興味ある政戰である無產黨から何名當選するかは問題でなく、政民どちらかの問題である。併しどう考へても、政友會が絕對多數の榮譽を擔ふべしとは想はれなかつた。

二十一日の開票に於て民政黨は七十一對四十、即ち三十一の差を以て政友をリードした。然かも政友側では初日の都市では負けても大多數の地方はこつちのものだ、第二日以下の成績を見よと强がつて居た。さう問屋が卸すかどうかと私は二十二日の晩は深更までラヂオにかぢりついて居た。午後八時の放送に曰く、民政一五一、政友八一。九時に曰く、民政一六八政友八七。十時に曰く、民政一九六政友一〇四。最後の十一時に曰く民政二三二政友一三三と。これでは政友會も萬事休す。必ず民政黨は絕對多數を占めるに相違ないと思つて其夜私は寢に就いた。さていよいよ總決算となつて民政二百七十三名政友百七十四名即ち九十九名といふ壓倒的の開きを以て民政黨は自らも豫期せざる大勝利を收めたのであつた。政友か民政か犬養か濱口か、朝野兩大政黨の勝敗は鮮やか過ぎるほど明確であつた。勝つものが勝ち、負けるものが負けたと云ふより外はないほどに國民の審判は率直で公平だつたと私は思ふ。（三月四日夜記）

◈出版物の話

北漢山人

○殖銀の守屋氏の洋行土產『倫敦から紐育まで』が、近々出版される筈である。

○紙數六百餘頁、それを定價二圓以下にしたいといふのが守屋の希望。今一つ、それで少々儲けて親意な連中に、一杯飲ませたいといふ附帶條件もある。

○横尾信一郎氏に頼んで、編纂してもらつてゐるが、その横尾氏『安うせい。飲み料も考へろ。……これアなか〳〵やかましい書物ですよ』

○發售の上は、皆樣よろしく。

○松永工氏……さういふ面白い人間だつた。

林響さんのこと

秋葉隆
（城大法文學部）

春寒の雨の日曜に、朝寢の床を離れ兼ねて居る枕許へ、一通の黑枠が淋しく運ばれた。二三日前の新聞で林響畫伯病むと驚かされて居た矢先とて、私は封を開く迄も無く、その死を直覺させられてしまつた。

一昨年の夏、一度危篤を傳へられ、新聞に依つてはその死を誤報さへもされたが、殆んど奇蹟的に全快し、香翼の始末に困つたといふ當時の林響さんを、久し振りに上總の田舍に訪ねて來た親友のTから、林響さんは今人間の幸福の絶頂を歩いて居ると云つて喜んで居ると云ふ話を聞いたが、やつぱり林響さんは死んでしまつた。まだ四十八といふ年で。

東京に居る頃は、よく南品川の畫室に遊びに行つて、あの大雅堂の懸つてる日本間で、いつも濃い茶の結城を着流した、眞黑な總髮の髻を結んだ一種の異貌の持主から、所謂卓勵風發の畫論を聞き、廣い趣味と多面的な人格から流れ出る四方山の話を聞くことは、私の學生時代の樂の一つであつた。

林響さんは動物が好きで、家にもいつも名も知らぬ小鳥の歌が絶えなかつた。草木を可愛がる心持なども、全く淡々と愛さずには居られぬといふ風があつた。それに子煩惱も人一倍で、一面火の樣な强い性格を持つて居ると共に、草の芽を踏むにも堪えないといふ樣な優しさがあつた。畫室は隨分凝つたものであつたが、庭には竹垣をめぐらして、道行く人にも庭の樹立を樂しませたいと云ふやうな氣持で、成金の高い煉瓦塀をげぢ〳〵の樣に嫌ひ、竹を結んだ塀の外に、『こゝへ小便すると中から見えます』などと立札をしてあつた。

上總の田舍へ引込んでからは、

【四】

とう〳〵逢ふ機會が無かつたが、鎭守の森を控へた高燥な畫室は、枝折戸を入り、小川に沿うて玄關に晉なふ人を、流に浮ぶ水鳥がここここと案内するといつた風情の家であるとTが話して居た。今は主を失うた可憐な水鳥の聲も淋しいことであらう。

長女の初の節句に祝つてくれた自筆の鍋蓋雛も、今年は心なしか頽の色が褪せて見える。

（昭和五、三、二）

易
小唄
阪
岡村石介

◈無駄はなし

北漢山人

○近頃のことは判らんが、以前兒玉さん（政務總監）が、總督府にゐた頃は、澤子夫人は、どんな寒い季節でも、主人を役所へ送り出すと、女中と一緒に、さつさと洗濯物をして居られた。

○訪問客などが行くと、まッ赤になつた手を拭き〳〵、『まア……ようこそ』と迎えられるので、皆感心したものだつた。

○曾つて使はれた女中の話に、どんな失策をしても、夫人は決して叱られないさうな。啻に言葉の上で、叱られないのみならず。顏色に出ず。『オヤ〳〵、また縮尻ましたネ』、クスリと笑はれるので、當人ホッとして、救はれたやうな氣持になつたさうな。

○『流石は、寺内さんの……』と悉く感服した事實譚。

× ×

○今村螺炎氏が濟州島時代、部下に使つてゐた或る男、……どうも面白からぬことをするので、トウ〳〵論旨退官にした。

○スルトその男、京城へ戻つて貯め込んだ金で、高利貸のやうなことを始め、最近では、資産十萬といはれるやうになつた。

○現に××町に住んで、地所やら、家作やら、ウント持つてるのである。

○で、昔の同僚が訪ねて行くと『オイ、近頃大將に會ふか』、『ウン』、『どうしとる』、『景氣はよくないサ』……スルトその先生、『ウフッ、さうぢやらう。』元來大將……若い時から、心懸がよくない。のう君、人間といふものは、このワシのやうに……』

○當年の濟州島司……嶋の王樣も、この男にかゝると全く散々。」

……。

私は、ジャックリンを抱いて、

強い性格を持つて居ると共に、草の芽を踏むにも堪えないといふ樣うな氣持になつたさうな。

○『流石は、寺内さんの……』

○當年の濟州島司……嶋の王樣も、この男にかゝると全く散々。」

京城雜筆

私は佛蘭西の人情に泣いた

山田新一（洋畫家）

1、可愛い許嫁 ジヤツクリン

一九二八年の夏、八、九二ケ月を、巴里から一時間半、ポントワズ在ヴオーレアル村で過した。

畫筆にも疲れて、セイヌ河沿ひの丘邊に、夕燒雲を眺めては、淡い旅愁を覺える日もあるにはあつたが、大かたは純朴な村の農民達と樂んだ。

丘べりの田舍道に畫架を据えてゐると、畑へ下りて行く若者が、鍬を背負つた片手を高く擧げて、『やあ今日は!!』を叫ぶのだつた。

晩餐後を輕い散歩に、そぞろシューベルの小夜曲など唄へば、二階の鎧扉をそつと開けて、鋭い口笛で呼びかける、村のカルメンもゐた。

子供の無いホテルの老夫婦は、いつの間にか私の食事の好き嫌ひを詳細に研究し盡してゐた。

日本人の始めて入つた村ヴオーレアルは、何と私の樂園であつたか。

扨てそのヴオーレアルで私の一番愛しい友が即ちジヤツクリンであつたのだ。

ジヤツクリンは、彼女の祖母さんと二人で巴里から避暑に來てゐた。

祖母さんのマダム、ラヴエルは六十四歳で、我が花のやうなジヤツクリンは芳紀まさに六歳であつた。

花のやうな……さうだ眞に紅色の小さな薔薇のつぼみとしか思へないジヤツクリンだつた。

八月十五日の村祭の夜は、さんざメーリゴーラウンドの木馬に打興じた擧句、天幕張りの踊場の中で年に一度の開放を踊り狂ふ、何百人もの村のヴアレンチノやメリー達の間に混じつて、私はジツヤクリンと踊つた。

踊場の床を照すカンテラの影があくまで淡く、臨時雇の樂手達が吹き鳴らす、トロンボンの妙音が唾液に打濕る迄頃、踊り疲れた。

九月になつて巴里からの質素な避暑客達は一人づゝ減つて行つた

その二十六日は私も此なつかしい村に別れを告げなければならなかつた。

朝一番の乘合自働車に、旅行鞄を積んでゐると、村の誰彼が、別れに集つて來た。何人かの老婆や百姓のお内儀達とも、別れの接吻を交さなければならなかつた。

そして最後にはジヤツクリンと……。

私は、ジヤツクリンを抱いて、その紅苺に、ミルクをかけたやうな、にほやかな美しい頬を吸ふた

突然、ジヤツクリンは私の肩に頬をうづめて泣き出した。

あまり泣きやみさうもないので私が少々困つてゐると、一人の老婦人がヒヤかした。

『ヤジツクリン、ヤマダの許嫁だね……』人々はどつと笑ひ興じた。

ヤジツクリンは涙に濡れた眼でにらみつけ、可愛い手を擧げて打つてかゝつた。

みんなが又どつと笑つた。だが私の心の底に笑へないものがあつた……。

2、十年内に

カーニユ、ニースと南佛蘭西の風景に憧憬れて旅行した擧句、昨年の春私はニースのギヤラリー、バンチユル、モデルンで個展を催した。そこで醫者で美術評論家のドクトル、ガムース氏と知己になつた。

其夏

支那と露西亞の戰爭で、日本からの送金が遲れて、私は實に閉口してゐた。

七月も末になると流石に巴里の畫室は少々暑くなるし、友人の誰彼は田舍へ行くし、一番世話になつてゐたアマンジヤン老先生も一家打連れて、シヤトウチエリーの別莊へ行つて了ふし、懐の空になつての畫室生活はしみじみ味氣なかつた。

處へ七月の二十四日の朝だつた表の扉を勇ましく叩いて、『ヤマダ……』と呼ぶものがあつた。

ドクトルだつた、飛びついて握

【 五 】

京城雜筆

手した。

晝食をビュフアロで招ばれた。

毎日〳〵貧しい自炊のパンを食べてゐた私に、どんなに美味であつたか。

そして晝食のあと私は思切つて借金を申込んだ、毛唐に金を借りるのは生れて始めてだつた。

ドグトルは氣持よく、持合せの四百法を貸してくれた。

翌日ドグトルから手紙が來た。

手紙の終りに書かれてあつた。

『親しきヤマダよ、私がお前にした、小さな心づくしに對して、無用の心配をしてはいけない、それは十年以内に……と考へて居ればよろしい……』と。

私は胸を打たれた。

『Dans Dix ans』『Dans Dix ans』

十年内〳〵

何度も其文字を讀んだ。

讀んでゐるうちに、ドグトルのやさしい慰藉が增々胸に迫つて來て眼頭の熱くなるのを覺えた。

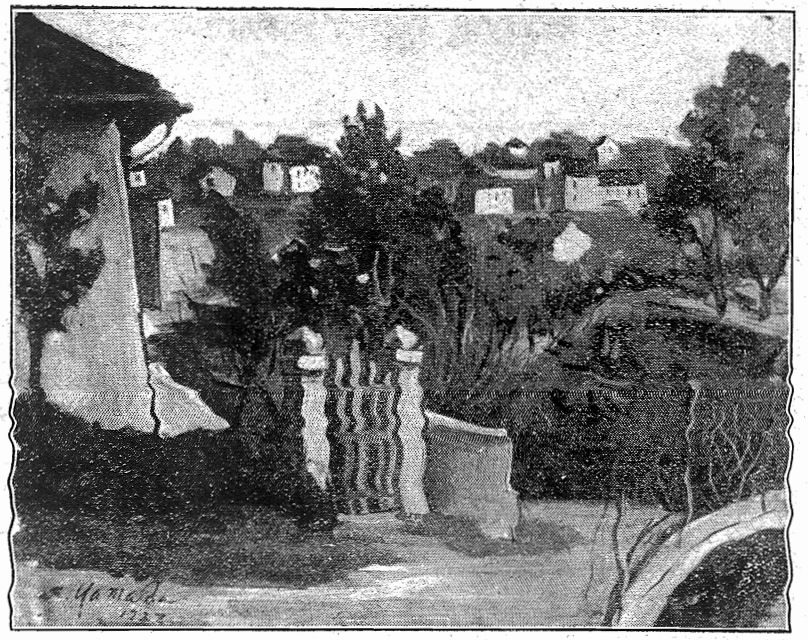
（一九二九・三・二〇）

鰻丼 五拾錢

お壽司 定評あり 先づ御試食願上候

本町五丁目 阿波文

（電本一八三七）



カーニュ風景　山田新一氏作

【六】◇江湖聞見集

漢江漁郎

○大阪府知事の柴田善三郎氏はもとユ、の總督府の學務局長をした人だが、昨年の暮、三人の令息から、早く知事を罷めてもらいたいといふ勸告を受けた。

○令息達に依ると、

一、老ひて知事をして、何の意味がありますか

二、國家のためといふなら、早く後進に路を開くがよろしい

三、食へないといふなら、我々三人で、お父うさんを養ひます

四、この返事は、五日以内に聞かして下さい

○しかし、今も知事をやつとるところを見ると、何か妥協の途がついたのであらう。

○柴田氏は、當世には、稀に見る人格者で、その家庭も、普通の家とは、大分變つてゐる。たとへば、親子の關係は、恰も友達の關係の如く、令息達は、自由にお父うさんの、公務上の行爲まで批評してゐる。今度の辭職勸告でも、氏は、『セガレ達は、私よりズツと賢い場合が多いです』といつてゐる。

× ×

○この間朝鮮から榮轉したばかりの金谷新參謀總長は、老人々々といはれるのが何よりも大嫌ひ。

○その辯に曰く、『我輩は、これでまだ〳〵若いんだ。殊に體格からいふと、我輩と宇垣陸相、それに鈴木前參謀總長は、日本人としては優秀な部だ。今から老人々々は、實に情ケないネ』

○さうです閣下……第一アナタの酒量から申しましても……。

『そうかなあ』

『名刺を預かつてゐますが、先

偶感？患感

偶感？愚感

岩本武治

（本町五阿波文）

髯哲

小供の時或る人から此麼話しを聞かされた。凡そ成功せんと思ふ者は自分の髯を剃る心懸けさえあればどんな事でも成し遂げらるゝ物であると。其理由を聽けば先づ石鹸を塗つて自分の髯を剃り初めたとする。痛くてサッパリ切れアしない。然し切れんからとて剃り初めた髯面らを半分殘して中止する者も無ければ又今更中途で髯床に走り込んで救ひを求める馬鹿者も無い。血が吹き出そうが眼れようが一切更におかまいなく、小心翼々、會体の知れぬ顔をして一生懸命に邁進する。

若し夫れ辷り誤つて頬を二三度切つたとて目暴を起して鼻を切つたり目を突いたり耳をし落たりする者は無い。必ず成し終らねば濟まさんであらうと言ふ。

會得はしても何んだか感心した樣なせぬ樣な御話し……。

金と屁

つら〳〵惟みるに金はほんとに屁の樣な奴と熟々思はれる。

著めようと氣張つて居てもなか〳〵に溜まる譯のものでは無いが又溜めまいと思つて居ても何時の間にやら溜つて御座る……。

更に之れを一夜にヒッピリ出す痛快味と來ては、イヤハヤ五臟六腑のスーッとして夢のお國の心持ち、昔の紀文もかくやとばかりで迚ても〳〵堪まつたものでは無いが、濟んでの後の臭ささと來てはまた腸九廻の感じあり。噫、同類にして奇怪極まる屁よ金よ、世は今擧げて緊縮の折柄、我々人士をして漫りに玩具視せしむる勿れ。

養漁

全南に小さな鰻の養漁場を持つ關係で、時々出張する。冬はどんなに過ごす事やら分らんが、此の頃ろから初秋迄で餌についてメキ〳〵太る。一日二回蛹を切つて蒔いてやるが、馴れると云ふは恐しいものでコト〳〵餌切る音がすれば、何處からともなく俄然波を立てゝ襲來する。池畔に立つて見てゐると、嬉々として細い目を張り口を擂へて早く呉れと云ふ容子、迚も可愛くなつて來て、こんなに育てた鰻を何んで叩き殺されようかと思ふ。活花と一般で、『浮世の水に誘はれて死ぬに死なれず生くに活かれず』

茫然として『俺ア何んで此麼罪深い事を始めたのだろう』と考え込んで居ると、番人がやつて來て『大將今年の丑には二百貫餘り市場に積めますなア……』と云ふ『そうかなあ』と氣のない返事をする。

『筋が善いし、肥りはいゝし、それに擂つて居ますから今年は値賣りも利きますぜ』と又ぬかす。

『そうかなあ』

『名刺を預かつてゐますが、先日水産會社のヤンバンが見に來て大變褒めて行きましたよ。京城で何んでも御目に掛るとか……』

『フフー……』

『大將、ワッシの話聞いてゐますか』

『……』

『大將……ッ』

『そうかなア』

『……』

『……』

彼れも話さず我れも語らず、ぢつと水面を見てゐると其所に鰻の見殘したか未だ二切れの蛹が浮んでゐる。蠶も溫室などで育てらるゝ内は花だが、大きくなつては堪まるまい。五右工門ぢアあるまいし、釜で煮られて剝き取られた揚句叩き切られて鰻の餌さか……。

一体人間と言ふ奴は碌な事をしやしない動物だと思ふ。

◈筆のしづく

三木一彦

○本町の醫家佐藤小五郎氏は、近くの街角に、『醫學博士……』云々といふ標抗を建てゝゐる。

○散歩博士の棉引さん、ソコまで來ると、いつでもワキを向いて生唾を三度吐いて通る。

○事の次第を聞いて見ると、元來棉引さんと、佐藤さんとは、極々の近親だが、棉引さん醫博などと自稱したり、殊に棒抗を打つたりすることは大嫌ひ。三度生唾を吐くのは、『ハテサテ、困つたことで御座る』といふ觀念の目然發作ださうな。

秋波

重村義一
（恩賜紀念科學館）

【八】

佳人未肯回秋波とか、新婦磯頭眉黛愁、女兒浦口眼波秋、とか美人の媚を寄する眼容を秋波とは誰が言ひ始めたか、用ひ來つて居る例ひよし斜視するにせよ、視線は正しく直線たる可き筈である。斷じて漣波の夫れの如く、彎曲せる生優しいものではない。眼と眼との尖端、目來盼然、小にしては一瞬間の秋波の爲に人生に大波瀾を卷き起す事もある。其の昔の絶美クレオパトラの秋波は克く一代の雄アントニウスをしてローマ王國を喪はしむるに至つたのである。

誠に電光一閃、結果よりせば媚射とも云ふべく、嬌射とも言ふ方が正しい樣にもある。然し又一考してみると支那文學者の靈筆より生れたる秋波なる文句が、現代の科學と一致することを、愚問愚答したい。以て雜筆記者の幾度か海拔數百尺の倭城台への御足勞に對へたいと思ふ。

蓋し世の中には、絶對直線と言ふものはユークリットの理想に過ぎない。大自然の唯一の直線たる水平線も蓬窓を排して水天髣髴青一髮、と醉眠模糊として見る範圍內では、直線に違ひはないが、半里も引伸せば、我が地殼の曲りに隨順して盛り上つて居る、一つの曲線である。更に分秒間も月の引力は差す潮引く汐の運動を止めない。風が吹けば漣も出來、怒濤天を打つ光景をも呈する。太陽より來る光線は、エネルギーの波動の連鎖である。而かも二十世紀のニュートンたるアインスタインの說に隨へば、歪曲してゐるとのことで、光線にも重力の影響があると云ふてゐる。電柱と電柱との間に張り緊めたる一直線に見ゆる電針線も、例ひ春來秋去の蜘子が脚を休めずとも、針金自体の重量でカテナリー曲線をなしてゐる。所詮直線と云ふものは見當らない。

秋波を送る佳人も、其の刹那は小さな胞に脈々たる血汐の鼓動は免れまい。況んや、幸福なる相手方が無用意であれば、瞬貧血を起すかも知れない。觀じ來れば、媚射も、嬌射も、秋波と云ふ方が詩的であり、科學的である。

我には秋波の波長が長波長なるか、短波長なるか、紫外線に屬するか、赤外線に屬するか、それは判らない、しかし愚說はある。

話が一寸德川時代に遡ることを許して頂きたい。時は西曆一六六六年と言へば、四代將軍家綱の治下、漸く硝子壜が英船に載せられて、平戶に來た頃合ひだ。同時にニュートン先生は、三角稜の硝子を通して太陽の光線は白色ではない。赤、橙、黃、綠、靑、藍、紫の七色である事を發表したのである。時が、十八、十九、二十世紀と、時代の移ると共に、光線の研究が、非常な進み方で、二十人の科學者が、三百年間に、性能や、波長や、可視光線と其外のものを區別して發表した。就中赤外線と紫外線とX光線とは相當我々の生活に文化の向上を促進した。最後の發見は、ラヂユムで名高くなつた、キユーリー夫人が、今より八年前にガンマ光線がある事を發見したのだが、目下の處一寸打止めの姿である。

秋波より濺る光線は、可視光線ではない。夫れよりは波長が、長いか、短いかである。人助けとなる紫外光線やX光線の樣な波長の短い光線ではあるまい。多分人命をも取る事の出來る波長長き、赤外線に屬するものであらう。波長の長き光線の特長は光波が大氣中を進行する際、短いものより直進し易いのである。赤外線寫眞が、天体を明瞭に撮取するのは、之れが爲めである。舞台上に表れたる俳優が、數千の見物人の中に、見出されたる情人と秋波の交誓をなし得るのは、恐らくは波長の長き賜ではあるまいか。然しながらまた、秋波が取り持つ緣となつて、幸福なる結果が少くない處を見ると、短波長の人助けの部分に屬するものもあるかも知れない。要するに打ち返し卷き返す磯の汀の波の行衞の判らぬ如く、秋波も光線としては一種の謎である。

夏の海秋波を送る賣れ殘り

旗幟幕
龜屋旗店
京城黃金町五丁目
電話本一五八五番

本つ國の都大路を鉢植の花をさげつつ夜を

塵を行く

角田不案
（東京客舎にて）

總選擧の日

總選擧今日行はる東京のきさらぎの空は靑く晴れわたる
風にあがる塵を縫ひつつ往き來るさこの日
大路を自働車は馳す
丸ビルの窓より見やる東京は總選擧の日をいと靜かなり
この日どこに總選擧の行はれあるならむ武藏の國の空の和やか

開票の日

大山郁夫當選せりと揭示されうち寄する大衆に强き聲あがれり
民政黨政友會の當選者の揭示を群衆はただもだしつつ
無産黨は落選多し新らしき時代の力ぞ今淋しまれぬる

斌に逢ふ

ようかんを賣りに來れるわが斌に今日丸ビルに逢ひにけるかも
丸ビルに今日を來りてゆくりなくもしたしき斌にしみじみと逢ふ
十年ぶりに相見る斌はやぎひげをはやして居らず斌にはあれど

花を買ふ

二十年あまり住みふりありし東京のはたとせ見ねば東西病ろふ
旅の宿の机さびしみ鉢植の花を買ふべく夜をまちに出づ
本つ國の都大路を鉢植の花をさげつつ夜を歩りきけり
神保町のかどの花屋より買ひてこし旅館の部屋のチュリップの花

車上にて

自動車は路面しづかに動きいづるに東京に來しをしみじみ思ふ
朝鮮に住めるを思ふ心ふと湧き來たるこそ淋しかりけれ
日比谷公園の視野にいりきて自動車に腰をうかして我ゐたりけり（五、二、二二）

見聞録

江湖百話

三木一彦

○岡村介石氏……豫ねて研究してゐた新易學も、いよ〳〵完成の緒に就いたので、これを天下の廣居に宣明すべく、この春から、居を東京に移さうと決心した。

○これは、先生としては、實に一生一代の大バクチなのである。

○しかるに、これを聞いた介石宗の信者達『今更ら我々を捨てるとは、何事ぢや。先生あつての我々ぢや。我々を迷子にするとは、父なし子にするとは。さても〳〵意地惡め……』といふワケで、三方四方に同志を集め。ワーツとばかり小唄阪へ殺到！『さア〳〵、これだけの子供を、どうしてくれます。ワツシ達アどうなつてもいゝんでがすか』、泣くものあり、愚痴るものあり、コボスものあり、俄かにヒスを起してウンと絶氣するものあり。流石の小唄阪も影響の甚大に茫然。

○折衝數次、先づ當分中止と決す。但し春向きにつき、いつ浮氣の虫起るやも知れず。委員等せい〳〵警戒中。

南山の狐

杉原德行
（城大醫學部）

『昔南山に狐が一疋居りました
青島の山には尾の無い狐が居るそうでありますが、南山の狐は尾のある狐で遊野郎をだます樣な事は致しませんでした。然しこの狐も一人前のいや一疋前のだます通力をもつて居りました。

或日京城神社の裏を通りかかつた時フト神官が鍋が壞れて困つたものだとの獨言を聞きました。自分の穴居へ歸つて、どうかして神官の言葉を利用して一儲けしやうかと思想をめぐらして居りました其時飄然として漢江神社の森に棲んで居る狐が訪ねて參りました。

漢江狐『イヨー、南山どん、何をかんがえて居らつしやる』

南山狐『漢江どんか。お前さん近頃出來た鍾路饅頭にあり付いたか』

漢江狐『その事で御座るて、大層うまいそうだが・未だ香りさへ臭がぬ』

南山狐『では仕事を山別けと堅く約束して、茲に一つ、鍾路饅頭にありつくボロ儲があるのだが』

漢江狐『そりや初耳だ、是非一口入れて呉れ』

南山狐『外でもない京城神社の神官が鍋を壞したそうだ』

漢江狐『フン、そこで』

南山狐『そこで、こうさ』

二疋は耳に口よせて密話を致しました。やがての頃に二疋は穴から拔け出で奬忠壇の方へ參りました。漢江狐は山の上からコロ〳〵と轉げる內に立派な鍋に化け、南山狐は池の藻を頭から冠る內に眞實らしい鑄掛師となりました。

春の日のポカリ〳〵とする晝頃鑄掛師が京城神社の前を大きな聲で

『鑄掛!!、新鍋!!』

と申しました。神官はこれ幸ひとそれを呼び止めました。

『神主さん、この古鍋を鑄掛けるよりも新鍋を買はれるのが得であります。二圓四十錢です、これを買ひなさい、掘出物です』

遂に神官は巧言に載せられて安値で新鍋を買ひました。

神官『これ〳〵善助や、この鍋を磨いでくれ』

下男の善助は鍋を磨ぎにかゝりました、處がしばらくして小聲で

鍋『善助や、モウ少し力を拔いて磨げ、俺は尻が痛くて堪らぬ』

善助『ハテ〳〵鍋が物言ふぞ。まさか下女のお鍋どんの化けたのじやあるまいが。氣のせいかな。俺が平常お鍋どんのお尻におぼしめしがあるので、お鍋どんの御尻なら、こうして磨ぐんだが』

獨り言を言ひながらグイと鍋の尻に磨ぎをかけると又もや

鍋『善助や、痛い、痛ーい』

善助『且那さん、大變大變、この鍋は物を言ひますだ』

神官『馬鹿をいふな』

云ひながら台所へやつて參りました、善助はゴシ〳〵鍋を磨きます。鍋に化けた漢江狐は尻の皮が剝げて痛くて堪りません。とうとう痛さに通力を失ひ、元の狐になつて、尻を眞赤にしながら遁げて終いました。神官と善助とは狐にだまされたが判りましたが今更手の下しやうがありませんでした。

【10】

一方南山狐は二圓四十錢で鍾路饅頭を購ひ、それを等分し、右の方のは俺の分、左の方の分は漢江どんのと豫定し、右の方のを食ひながら約束の落合場所奬忠壇の方へ足を運びました。その內にとう〳〵右の方の饅頭を皆食べて終ひました。

南山狐『一つ位は漢江どんのを食べてもよかろう』といつて一つ左の方からとつて食べました。

南山狐『どうやら左の方のは特別にうまい。もう五つ位はよからう』

かくの如き次第でとう〳〵左の方の饅頭も皆平げて終ひ、よい心地になつて陽の光に太鼓腹を照しながら晝寢を貪りました。其處へ尻の皮を剝がれて眞赤にしながら漢江狐がやつて參りました。

漢江狐『イヤ、南山どん、お前い〳〵氣分だネ、尻の痛い事、がマア約束の饅頭で我慢するさ—どれ俺の分は?』

南山狐は目を醒しました、尻を眞赤にして漢江狐が立つて居ります。腰も掛けられぬ次第らしいのであります。

南山狐『相濟まんが皆な食べた狐も人間ばかりだましても居られぬ。たまには同類もだまさぬと甘い汁にありつけぬのでな』

漢江狐は憤慨したが後の祭であります。

漢江狐『南山どん、お蔭で尻を眞赤にしました、御禮を何れ致しますよ』

捨台詞を云ふて歸路につきました。

逃げる。ジットこらへて明方まで動かず。太陽の昇る前にいよ〳〵

京城雜筆

眞赤にしました、御禮を何れ致しますよ』

拾台詞を云ふて歸路につきました。

青葉の眞夏もすぎ果物の實る秋も去つて冬の始めとなりました。狐どもには餌物が不足勝の日が近づきました。

或朝、未だ太陽の上らぬ頃、京城神社の神官は水汲みに漢江へ參りました。處が大きなボラが一疋水際に死んで居ります。よき拾物と思ひ、小枝にひつかけて持歸らんと致しました。このボラは附近の百姓が野猫の害に困つて、ボラの中に毒を盛り前夜其處へ捨てゝ置いたものであります。煮て食べやうものなら神官はあの世に旅立たねばなりませんのでした。其時傍らの籔に漢江狐が居りまして、神官のボラを見て赤い舌をペロリと出してよろこびました。

漢江狐は神官の跡を付ける內にうまくそのボラを小枝から拔き取りました。丁度其時は南山の麓まで行つた處でありました。よろこんで持歸らんとする時に南山狐が其を見付けました。

南山狐『イヨウ、漢江どん、大漁じやの、どうしたわけです。大きなボラを今頃もつて居るとは』

漢江狐『イヤイヤ、南山どん、燈臺下暗しだネ。實はこれは近頃新案特許の法で釣るのさ』

南山狐『この寒い冬の日にそんなボラ釣りの法があるなら俺にも知らせ給へ友達甲斐に。餌物もないで弱つて居るのさ』

漢江狐『いや內密だ。敎へては上げられぬ』

といつて歸路につきました。南山狐はうらやましくてならず、ソット跡を追ひました。漢江狐は跡を付けられるのに氣が付いたが知らぬ振りして大きな聲で獨言云ひました。

漢江狐『南山どんが知らぬ間は毎朝大漁だわい。寒い日に、奬忠壇の池にソット尻尾を漬けて置く尻尾がジン〳〵する。これは未だゝ、その內に夜明けにはジン〳〵ひどくする。二疋かな。三疋かな……今朝のはジン〳〵が弱かつたから僅の一疋釣れただけだ。……今夜は寒いからよいかな。然し一疋で先づ二日の食料だ、今夜は止めて明晩かな』

南山狐はその獨言を聞いて、よろこびました。

其夜の事であります。南山狐は奬忠壇の池に尻尾を漬けて居ります。やがて、漢江狐が云つた樣にジン〳〵します。後を向けば魚が逃げる。ジットこらへて明方まで動かず。太陽の昇る前にいよ〳〵三疋位のボラが釣れたらうと思つて立上りかけました。

處が池が一面に氷つて尻尾が拔けません。今更らだまされたとさとりましたが獸目。遂に朝になつて附近の農夫に見付けられて棒で叩き殺されました。

漢江の狐もその夜毒入りのボラを喰べて血をはいて死にました。

同類のみならず、他人でもだませば天の報いは恐ろしいものであります。

京城神社の神官は一度目にだまされ、二度目にぬすまれたが御蔭で命をひろひました。それを御本人は御存じなく、只々氏神樣だけが神官の宮仕へに愛で、運命を御開きになつたらしいのです

◆總監繁昌記

漢江漁郎

○朝鮮から東京へ行くものは、餘り惡意でないものまで、丸山警視總監を訪問する。

○總監は、また自ら朝鮮黨を以つて任じ、大抵な場合、それらの連中を引見する。

○これは、或る二人の、若い男の、總監を訪ふた話である。

○警視廳へ行くと、氣輕く總監室へ通される。『敬意を表しに伺ひました』、『ヤー、いつ來た』『二三日前參りました』、『しばらく逗留かナ』、『イエ、明日位歸るつもりで』、『さうか……一緒に飯でも食べたいが……オー×××君（秘書役？）この人達を△△△へ案內してくれ給へ。僕も都合がついたら、島渡でも顏を出す』、ソコで、二人は、秘書のやうな人と、自動車で指定のをところへ……。

○大に御馳走になる。——この間一時間半——そこへ、總監スタ〳〵やつて來て、『ヤア失敬〳〵どうも忙しくてなー。サア杯をもらはう。五時からまた○○へ行く殘念だが、これで失禮する。しかし君達アゆつくりやつてくれ、決して遠慮は入らぬ』、立ち上つて『オー、君等は、いづれ小使が入るんぢやらう。いゝか……ホンの少しだぞ』、無造作に握らせておいて、廊下へ……表では、もうブー、ブー。

○結論……『とう〳〵私達は、初めから、シマイまで、頭ばかり下げてゐました』

【　　】

お花見

窪田次郎治
（京城測候所）

日本人の住む處には必ず櫻がある。春になつて櫻が咲かなかつたならば吾々の心はどんなに淋しいことであらう。勿論年により土地により又花の種類によつて開花期も大分違ふが、そんな細かいことは省いて此れから日本全國の御花見に出掛けよう。

東海道の蹄栗毛は御江戸日本橋から鹿島立つが是れは先づ台灣から初まる。然し手許に其材料がないから飛んで沖繩に行くと、一月中旬からぽつ〳〵咲き初める。次に九州路に入ると三月中下旬となり、關東附近は四月上旬頃ほころび初める。東京で上野、向島、日比谷、荒川、飛島山、小金井等花の名所を見物するには神武天皇祭頃がよい。

千用田城の舊本丸跡にあつた中央氣象台構内で調べた十年間の統計によれば、平均開花期は四月三日で一番早かつた時は三月廿六日、又遲かつたのは四月六日である。一日の平均氣溫が攝氏十度位の日が一週間も續くと、花が咲き出し、それから五六日すると滿開になる。是れは内地も朝鮮も略同樣である。『世の中は三日見ぬ間の櫻哉』はやはり江戸つ子の氣の早さを示してゐる。東京でゆつくり遊んで五月上旬に東北地方に行くと花は見頃となり、北海道は中旬頃、更に樺太に渡れば下旬と云ふ工合に、南の端から北の果迄櫻行脚をするには一寸五ヶ月かゝる。

朝鮮でも到る處櫻はあるが只江原道の一部山嶽地と北部中央山脈の高地帶は酷寒の爲め櫻が育たないそうである。南鮮の木浦、鎭海、釜山等溫暖な地方は四月三日頃咲き初めるから東京邊と大差なく、京城は二十四五日頃が滿開となり、北鮮は五月半ばから咲くので朝鮮でも南から北迄御花見をするには約五十日位いかゝる。

【三】

◇太鼓を叩く

三木一彦

○本町五丁目の阿波文の主人岩本武治氏が、『一寸むほんを起して、斯んなものを書いて見ましたが、アハ、〻』とて、本號所載『偶感？愚感』を寄越された。

○アハ、どころぢやない。うまいもんだ。アノ多忙な體で、一寸ヒネれば、スグこれ位の名文が出來るとは、えらい。

○事のついでに、島渡提燈を持ちますが、同家では、全南木浦附近に立派な養魚場――鰻が專門――を持つてゐます。生きた鰻の卸しをやつてゐるのです。それなら卸しだけかといふと、さうではない。本誌廣告のやうに、鰻丼一個タツタ五十錢でやつてゐる。

○『安いなー。まづからう』などと、阿房をいふては困ります。」餘技の文章さへこの旨味のある主人公、ソコに何のヌカリがあらう一たび上ッ張りをハネて、本職にとり懸ると、皆さんの味覺を宇頂天外へフッ飛ばすこと請合。論より證據……一度食べて御覽なさい

○それには、同家に小ザッパリした客座敷があります。鰻は、冷えては面白くない。なるべく押し懸けるがよろしい。

○以下は、阿波文主人の口上

○鰻の油差上げます

諸熱をとるにエキシカ以上の効果がありますと。又小量飲めば滋養にもなりますとか。

○鰻の生膽差上げます

眼によいさうです。鳥目には最もよいさうです。

○鰻鍵詰お分けします

正二十五匁入一個三十三錢

明盲亂談
高橋 一松 一松 定吉
市塚 平馬 平馬 隆

明盲亂談

高橋昇

（三）菱載寧鐵山）

× ×

實際自分で書いたものが、活字になつたのを讀む時の氣持は、他に味ふ事の出來ない樂しみ――少くとも書く事を本業とせぬものにとつては――と思ひます

ソコを狙つた所に、雜筆の妙趣がある樣に思ひます。

× ×

私も昨年迄は、自分ながら良く續いたと思ひます。御承知の樣に二十ケ月の間一回も休まずに――只昨年の五月號かには、編輯の御都合で漏れましたけれど――今後も出來る丈書きませう。其内に精勤賞（?）を出されるとの事でもありますから、呵々。

讀姓名煩談

いつぞや書いた事のあるのを補遺する。

○姓か名か

露口　德軍　德軍豬之吉
木戸　伴　伴　敏雄
久保　武市　武市　利美
篠崎　奥　奥　榴二
丸野　道明　道明直二郎
白谷　末松　末松　緑二
赤堀　富吉　富吉　芳治
藤田　旭　旭　賢二
齊藤　久松　久松郁三郎
松本　武正　武正　一
軍住　正木　正木　天
糸山　新作　新作　義信
伊藤　吉松　吉松　喬
高橋　一松　一松　定吉
市塚　平馬　平馬　隆
市川　藤吉　藤吉　濯頂
廣瀨　末吉　末吉治郎平
山田　長　長　久
中澤　清水　清水　禮三
大賀　麓　麓　三郎
根田　軍松　軍松　壽
阿部　安積　安積　得也
眞野　松平　松平　恒雄
井上　光行　光行　次郎
中川　湊　湊　俊郎
橋本　日吉　日吉　平吉
林　恒吉　恒吉　利雄
白濱　軍久　軍久　豊暦
辻　寄木　寄木三樹雄
軍住　高木　高木　背水
上田　三好　三好　學
森軍　操　操　垣道

中山友次―友次常吉―常吉克治。
美座流石―流石信夫―信夫淳平。
木村　平―平　巽―巽賢喜智。
齊藤　延―延　二木―二木春松。
吉野　林―林　並木―並木重郎。
丹生谷進―進　辰馬―辰進福藏。
西山千藏―千藏末次―末次逸馬。

○姓名と數字

姓が數字のみであるのには二十二鐵鎧があるのは此前に書いた、尙十五六（イサゴ）といふのがある名は聞き漏した。

名の方ではいろ〳〵ある。

一（ハジメ）は餘りに澤山あるから省くとして

大農　一一　能登谷一三
神崎　一二三　有川一三二
久米　一八　西依　一九
中原　二一　澤田　二三
佐藤　二六　山口二三四
岩井　三二　高橋　三三
原　三六　山田　三八
高木三千一　中山三千三

又書くの辭

松本雅兄より

拜啓御旅行中?、或は御繁用?兎に角今年になつて玉稿に接せぬので寂しく思つて居ます（中略）どうぞ御奮發願ひます。

× ×

拜復『玉稿に接せぬので寂しく思つて居ます』には恐入ります。實は一寸事故があつたのと、兼二浦に華かつらといふ雜誌が出來て其方に書かされて居るので、荒木又右衞門の樣に兩刀を使ひこなせずに、先づ隙きを見て打込まうと一歩退いて身構をした形で

モー泣くな、拭けよ涙を此ハンカチで、僕は見捨てる氣は無いが、妻子の有る故に、添ひ遂げられぬが是非も無い、決してマタ、短氣を出さぬ樣に

チョイ〳〵

といふ所、やがて春、芽も出ませう。（二月十三日）

× ×

山歩きが本業の私に、書く方は餘技（?）とも言ふべきもの、シカシ現代は、他人の書いたものを讀んで樂しむと言ふ時代は過ぎて自分で書いて、自分で讀んで樂しむといふ時代になつて來ました樣に、山の中に居りますものにも思はれます。現代的に言へば、それが流行のトップを切るとでも言ふのではありますまいか。

ゆよいさ完です。
○鰻鑵詰お分けします
正二十五匁入一個三十三錢

林　四十一　晉成　五一
中條　五六　井上　五七
角　七三　長岐七五三
尾上七八二　中原　八十
信廣八十一　山水八十三
浦澤八十七　谷內田八十八

北田　九一　渡邊　九二
石川　九三　片田九十八
鶴丸九十九　谷　十二
田近　十二　藤井十五一
阿部十五六　田中　十九
能美　千一　原田　千三

森　千七

朝鮮にも數字の名がある。
元一三　金千萬
金億萬
億萬の上に出るものは、先づあるまいと思ふ（五、三、一）

京城雜筆

◈川崎病の話

漢江漁郎

○山田新一氏が、巴里からもどる時、ズーッと一緒の旅をしたのは、地質調査所の川崎博士である

○それまで、川崎博士は、二三度も海外に出られたが、いつも學問の關係上、印度とか、亞弗利加とか、乃至は、南米とかいふ方面で、博士は、今度初めて歐羅巴を見たのである。

○それは、それとして……山田氏、相手が地質學者といふので、堅いところを想像し、『どうも、エライ人との道行きは困るナー』と內心に思つたさうだ。

○ところが、いよ〳〵同車して話し合つて見ると、藝術にも理解があり、その他何事につけても、廣い趣味、高い見識を有つてるので、山田氏『これア難有い人と乘り合せた』と前の豫斷を後悔した

○それどころでなく、『畫家は南方の熱帶地――蠻地も、少しは踏査されるがいゝですよ』とて、アノ方面の特異の風光やら、自然現象を、うまい話術で話し込まれ車中早くも蠻地憧憬病に感染した

○歸來山田氏曰く、『どうしても一度、熱帶地方に行きます。行つて見ます。何、蠻地病？イヱ、私のは、川崎病かも知れぬ』

◈倭城臺閑話

北漢山人

○倭城台あたりで、今もチョイ〳〵昔話に出て來るのは、現臺灣總督石塚さんの奧さんのことである。

○二十年前、石塚さんは、コ、の總督府にあつて、農商工部長官――その後東拓の總裁などをやつてゐた。

○その石塚さんの奧さんは、他家を訪ねて、お晝時となると『まことに恐れ入りますが、お茶を一杯……』、主婦か女中が、盆に載せて、茶を運ぶと、袱紗から小さいお辨當を出して、『一寸失禮させて頂きます』、そこでつゝましく御飯を食べるのである。

○相手の家では、大あわてにあわてゝ、『奧樣……鳥渡お待ち遊ばせ。今あちらで、お支度を致してゐます』、それを抑えて、『イヱ〳〵、それがいけないので御座います。どうぞ御馳走なら、前觸れを致してお伺ひした時に、どつさり奢つて頂きます。決してお構ひなく。どちらに伺つても、斯うして自由にさせて頂いてゐます』全く夫人はドコを訪ねるのにも、少し手間どると思ふと、お辨持參で家を出るのである。

○さらば、自宅へ人の來た時は――その時は、先方の恐縮しないほどの、輕やかなお晝を出し、主客ともに寬ろいで閑談するといふ待遇振。『鳥渡あれ位行き屆いた方はあるまい』との衆評。

人蔘劑では
一も二もなく
總督府
專賣局
精製の蔘精
に限ります
發賣元
貴生堂藥品店
京城本町二丁目
（電本一三八番
振替七六一番）

判らない。地名は到底數へきれな

も一度、黴帶地方に行きます。行つて見ます。何、蠻地病？イヒ、私のは、川崎病かも知れぬ』

せて、茶を運ぶと、袱紗から小さいお辨當を出して、『一寸失禮させて頂きます』、そこでつゝましく客ちも寛ろいで閑談するといふ待遇振。『鳥渡あれ位行き届いた方はあるまい』との衆評。

京城雜筆

九と八

松井權平
（城大醫學部）

西洋の不定數詞に相當するものが我國にも支那にもあるが中でも九と八とはどこ迄眞の數を意味しどれ迄が複數を示す數形容詞か境界が甚漠然たるものである。百足は支那の詞か日本でのあて字か知らないが獨逸語で千足と呼ぶ。百と千との違はあるが共に多い事を意味するは云ふ迄も無い。萬歳爺は支那の天子の稱であつて明末の權臣で奸臣で姦人で宦官の魏忠賢でさへ之は僭稱出來ず九千歳と呼ばれたそうだが、兎角支那人は九の字を濫用する。

九州、九山、九原、九泉、九官、九刑、九經、九賢、九天、九章、九竅、九族、九星、九曜、九思、金毛九尾の狐九官鳥等寡聞の筆者でも此位は拾集される。何れ甲州乙州等合せて九州になるので複數を意味するのではあるまい。同樣に五侯九伯、九夷八蠻、九鼎大呂等對のあるもの無いものがある。九州の金で鑄造した鼎で九個あるべき筈で不定數詞ではあるまい。九廻腸とか九死一生、諸侯を九合し天下を一匡するとか、九仞の功を一簣に虧くとか、九牛の一毛等は九の數では說明は出來まい。九と一と對稱した事は云ふ迄もないけれど、古人の遺したものに徒に註釋し復之を註解し新機軸を出すと異端左道とされた支那の事として定めし煩雜な故事來歷がある事であらう。

我邦では一つ少い『八』又『や』と云ふ音を殊に古代に於て使用した所が之に似て居る。畏多い事ではあるが三種神器にも八尺の勾瓊八咫鏡があり、御劍は八岐の蛇の尾から出たものである。建速須之男の尊は八間の假屋八つの瓶に酒を容れ大蛇を醉はし八束の御髯を捫つて蛇を斬り給ひ。稻田姫の爲めに八雲たつ出雲八重垣の御詠があつた。諸冊二尊が大八洲を御經營になつた傳說を後世の學者が大きな本洲に小さな淡路や壹岐の島を對等に數へて八つの數にあてはめたのは愚な事と思ふ。八束穗の稻の瑞穗の國は水田となるべき淺い池沼が多く正に豊葦原であらねばならず、その根には蜻蛉も生ずべき理で日下部四郎太博士も國見をして形が蜻蛉に似たから『アキツシマ』と呼んだとこじつけなくともよいと云つて居る。幾分支那かぶれが見える。八重櫻や八重椿の花瓣が八重に重つて居ると信ずる者はなく八重齒に至つては說明を要せず複數を示す事明である。八百萬の神は現代語で云へば神々の大衆であらせられ八重事代主神八千矛神など一柱な神であらう。八田若郎女は土地から出た名。八束の『ヒゲ』、八尋の矛、八尋の熊鰐、八つ目の荒籠も複數を示し八十嶋、八重の潮路も同じく八鹽折の酒、八咫烏、八十建も似たものであらうと思ふけれど筆者には判らない。地名は到底數へきれないが、八目鰻、八入、八口、八頭、八手、八橋、八幡、八重むぐら、八百屋、八つ裂等あり。かしこき事なれど御紋章は五三の桐、十六の菊は八を分けたのと二倍したものである。八せん八十八夜、四方八方、四通八達、七轉八倒、八百比丘、八大龍王は傳來ものと眞の八數から來たものであらう。

江戸には旗本八萬騎が頑張り八百八町にいろは四十八組の町火消があり、八犬傳や八笑人の讀み本に親しんだ。口も八丁手も八丁の江戸兒は『八』が好きらしい。七ころび八起有爲轉變の世、栃面屋彌二郎兵衞と居候の喜多八の住居八丁堀も復興の東京ではたづぬるによし無いことであらう。人名で八幡太郎から鎭西八郎と源氏の弓の名人爲朝の郎黨には八町つぶてあり八丈ヶ島に渡るし、甥の九郎義經は八艘とびをする。下つて本多平八郎、大鹽平八郎、いきな所で白井權八、維新の功臣には大隈八太郎、村田新八、彌で我慢すれば品川彌二郎、東郷元帥も平八郎である。長者には三井八郎右工門、天下の絲平こと田中平八、川崎八右工門、大倉喜八郎、彌でよければ岩崎彌太郎がある。我國は神代の昔から『や』の音に特別の親しみがあるやうに感じる。勿論茲に數へたものにもこじつけのあるはことはる迄も無い。

社長　高橋章之助
朝鮮　教育新聞
發行所　京城西小門一三六其社

一撞の梵音正に五千圓也

上内彦策
（總督府社會課）

或る日の夕フランス教會の鐘がカン〳〵小うるさく鳴り響く永樂町官舍の一室にてある友人との漫談。

主、國難打開!!、金解禁!!、經濟緊縮節約!!、隨分不景氣な世の中になつたね。

客、總理も藏相も大童になつて國民の覺醒と自疆の總動員を令してゐる。昨今の不景氣や失業群の增加やから見ても確かに手ごたへがあつたのだ。一難去つて又一難。否な難所は之から先なのだ。

主、突破せねばならぬ國難の峠はまだ一息も二息もあるのだ。夫れでなくとも宵息吐息の朝鮮の經濟狀態に對して此の上のお灸をすへることはトテモ情なくて出來ない氣がする。大念願力を發揮して大外科手術を決行するといふことは結局我々小輩の藝當でないと手を拱くの外はない唯近頃痛快な景氣直しの小生取つて置きの妙案が唯一つある。其のお題目こそは『一撞の梵音正に五千圓也』といふ奴だ。計劃は極めて簡單な計りか實行容易で而かも御利益は深大無量なこと請合だ。最も實の所小生は腹ごなしに聊か經文を誦して佛樣に御迷惑をかけてゐる生眞坊主の眞似者の一人で時々チンマイダの佛鐘を叩くことから導かれた案なのだ。

客、ドーセ君の事だ、梯子で天に登らうといふ筋だらう。

主、決して〳〵左にあらず、行ふに易く而も効驗顯たかな取つて置きの名案だ。マー一口に言へば鐘行脚だね。先づ釜山を振り出しに大邱、京城、平壤、新義州の本筋から仁川、鎭南浦、サテハ湖南線、咸境線の沿道の都邑、遠くは露支國境まで我が國が持つ最も偉大な梵鐘——物心兩方面から見て眞に偉大な大梵鐘——を持ち歩いて——イヤ粗忽な言葉は勿体ない——其の梵鐘大菩薩樣の御供をして、アノ何とも云へないボーン……と鳴り渡る妙音幽韻を半島の有產無產大衆に平等無差別に味はそうと云ふのだ。

客、此の不景氣の最中に諸行無常の鐘など撞くなんて氣まぐれもイ、加減にして置けよ。貧乏神との御交際は平にお斷りだ。

主、イヤ〳〵決してソンナ譯でない、何しろ一撞正に五千圓也といふ正眞正銘黃金のウナル響だあの絕妙な梵音が耳朶を通して心の奧底まで浸み渡る其のプロセスを瞑目して想像すると無味の眞味が限りなく湧いて來る。」不景氣に喘ぐ無產大衆にも良い

【一六】

力だ。欲の皮の突張つた有產小衆には猶のこと最大良藥だ。南無大梵鐘菩薩妙音長久功德甚深……。

客、隨分我慢して聽いて居るんだオイお經など眞平だぜ。

主、オット失敬、生眞坊主の癖が出た。御說敎口調禁物〳〵。

客、何だか君の話は例へば遠い山寺の鐘の音を聞く樣で、君の口調に從へば山の彼方の幽玄の大空に消へて終つて後は結局空々寂々といふ處が落ちだね。

主、アヽ緣なき衆生は度し難しとはヨク言つたものだ。と言つて捨てゝ了つては佛樣の誓願丸潰れだし、拙者の權威永く地に墮つる次第。唯物信者の君等には既にチャーンと攻略テーゼが備へてあるのだ。君は僕が擔ぎ步かうとする梵鐘は一休何處の梵鐘だと思ふかね。

客、梵鐘が道に轉がつてゐる譯でもあるまいし、乞食坊主の眞似をして寄付でも貰らつて造る外あるまいな。精々君の智慧が働いたとして俺にでも賴んで鍾路の鐘でも貸して貰ふといふ魂膽かね。

主、オイ〳〵戲談じやないよ。理論〳〵といふ君にも似合はぬことを言ふじやないか。緊縮節約の當世にさ、否拜金毒膠病者や黃金中毒患者の充滿してゐる現代に俺の考へてる樣な梵鐘を造る莫大な金が而かも貧乏神見たいな此の俺に集められると思ふとすると君も存外算盤の採れぬ男だね。

君忘れちやいけないよ『一撞正に五千圓也』の梵鐘だぜ。潰しにしたつて時價驚く勿れ大枚三千萬圓の代物になる。鍾路の鐘に居るとき一度慶州を訪ふてアノ梵鐘大菩薩さんを一ッボーン

を幾千個潰しても粉にしても追つ付く話じやないのだ。何だ馬鹿々々しくて話になりやせんよ

0.000圓
1.600.000圓+385=4.400圓

を幾千個潰しても粉にしても追つ付く話じやないのだ。何だ馬鹿々々しくて話になりやせんよ

客、偉い剣幕だね。馬鹿〳〵しいのは此方の事だがマー我慢するとして一體君の計畫をハッキリさして貰いたいもんだね。

主、仕方がない。ソロ〳〵我輩の梵鐘を開かしてやらう。豫め斷つて置くが君の淺智慧で輕率に笑つたりして後悔せぬ様に腹を据へて我輩の話の醍醐味をお受けせんといかんぞ。我輩の睨らんでゐるのはな。ソレ君も知つて居るだらう慶州にあるアノ新羅時代の大梵鐘を拜借に及ぼうといふのだ……。

客、成程!!

主、アレなら正に天下一品だ、藝術品としての値打は無限大だ。之は俺に判らぬばかりじやない恐らく誰にも判るまい。價のない程無上尊貴の値があるのだ。が然し之は唯物患者の君に言つても猫に小判も喩へにならぬ。

客、失敬なことをいふな。

主、あの梵鐘は君重量が十二萬斤あるのだよ、而かも豪勢なのは三分の一の黄金が這入つてるといふ事だ。ソコで君に納得の行く様に小學校の算術をしてお目にかけやう。イヽカね。金は一匁五圓だつたね。

120,000斤×3=40,000斤

40,000斤×160匁×5圓=32,000,000圓

どうかね驚く勿れ時價三千二百萬圓の潰し値段があるといふことになるのだ。一寸嘘の様に思はれるね。

客、フーム

主、

32,000,000圓×0.05=1,600,000圓

1,600,000圓÷365=4,400圓

此の式の意味が判るかね。年利五分としても三千二百萬圓から生れる利子は百六十萬圓になるのだ。あの梵鐘を年が年中毎日一度づゝ、ボーンと一撞きやつたとすると一回料金正に四千四百圓に當るんだ。『一撞の梵音正に五千圓也』といふ僕のスローガンも敢て駄法螺じやないと信ずるがどうかね。

客、成程理屈はそうなるね。が何だかソンナ氣持が……。

主、マーイイよ。俺は此の程軍縮會議の記事を讀んだが、陸奥などの十六吋砲の巨彈は一發で四千五百圓かゝるといふことだ。之だつてドブンと行つたら後は波の煙だけのもんだ。俺は大邱に居るとき一度慶州を訪ふてアノ梵鐘大菩薩さんを一ッボーンとやつて貰つて心行くまで聞きほれて見た事があるが、君ホントウにいゝね。アノ響きの浪の曲線たら無いね。流石に黄金の響きは無量甚深の味があるね。

客、談正に佳境に入るか。君が餘り眞剣に感じ入るのに引かされる勢か俺も何んだかボーンと來てゐる様に感傷的になるね。

主、有難い〳〵、俺は後で高利貸見た様に柄にもない算盤を入れて見ても高いとはドーしても思へない。起るは唯々一念感謝の心だ。アヽ有難い『一撞の梵音正に五千圓也』だ。

主、客、ナシマイダ。アッハハハ……。

(後はお茶でお開き)

◇浮沈一代話

北漢山人

○昔は官界で時めいてゐたが、今はスッカリ零落して、見る影もない哀れな暮らし……知るほどの人から同情の涙を注がれてゐるのは、前警視渡邊鷹次郎サンであらう。

○警務總監部時代——寺内總督時代——警務官の渡邊さんといふと、ズイ分羽振の利いたものである。夫妻とも派手者で、娘さんが多く、その娘さんがいづれもハイカラで、旭町の官舎では、夜となく、晝となく、ピヤノや琴の音。世界中の喜びを、一つにあつめたやうな暮らし向であつた。

○が、それがどうだ。この頃の渡邊さんは……。高齢七十四といふのに、大道易者もすまじきやうな無慘の風態。一本三十錢のお茶を二つ三つブラ〳〵させて、昔の知邊を訪ふては、『たのみます、一本買つて下さい……』

○慰給も、何も、皆んな債權者にとられてしまつたのである。過ぎたる榮華の報ゐとはいへ、ちと運命はむご過ぎる。

○男の子の、一番末のは、臨本印刷所に通つて、ツイこの頃まで返版小僧をしてゐた。

○丁度昨年の暮、渡邊さんは、本町の街路で、バッタリ轉がり、頭部、面部を傷け、血みどろになつて、しばらくは起き上れない。通りすがりの或人が、それと見て飛び込んで、助け起し、手拭で繃帶をしてやり、さてよく〳〵顔を見ると、それが昔のお出入先渡邊の旦那さんであつたので、『ヤッ……あなたは』、覺えず涙數滴。

新らしき生活關係の基調の上に立てる婚姻制度

露西亞社會主義の婚姻法

野村調太郎
（高等法院）

婦人を家庭的社會的經濟的桎梏から解放せむとする所謂婦人解放運動が、結婚問題從つて離婚問題について、世の反省を促し、新らしき考察を要求するに至つたことは、顯著なる事實である。之が爲輓近世界各國の學者實際家によつて、幾多の問題が提出され、傳統の舊式婚姻法は大々的に改正されんとする機運に到達したのであるこの時に當り、新らしき思潮の尖端を行くものとして、露西亞の婚姻に關する法律が頗る注目される素より婚姻制度の如きは、夫々各國其の社會事情を基礎として制定さるべきもので、濫に一部一派の主唱に雷同すべきでなく、又遽に他國の法制に迎合すべきでない。だが汎く各種の主義法制を參照斟酌するの要あるは、言ふ迄もない所である。

露西亞の現行婚姻法西は曆千九百廿六年十一月二十六日全露中央執行委員長エム・カリーニンの署名を以て頒布されたる『婚姻親族及後見に關する法律』の第一章であつて、千九百廿七年一月一日より施行されたものである。しかし其れは革命の最初、早急に制定した千九百十七年十二月十九日の法律を改正したものであつて、其の規定の多くは十數年の實施を經て居るのであるから、概ね彼等の生活に適合するものと認めていゝのである。さうして其れが社會主義的立法に係るものなることは、法律の前書に『新らしき革命の生活關係の基調の上に婚姻親族及後見に關する法律を規律する爲に』とあるによつて明かである。今其の婚姻に關する規定中主要なる點を紹介しよう。

第一　露西亞法の婚姻は男女共同生活の事實其のものであつて届出を要しないし、又或種の式を擧ぐるの必要もない。登錄の制度はあるけれども、其は婚姻關係存在の證明方法たるに過ぎない。從つて登錄がない場合にでも、共同生活、共同世帶、第三者に對する交通、其の他の書面に於いて婚姻關係を表示したこと、相互扶助、共同育兒等の事實を證據方法として、夫婦關係の存在を認めて貰へるのである。即ち婚姻は事實上共同生活を營むことに因つて成立する。是れ露西亞社會主義が現實に立脚し、現實其のもののみを眞理と認むるに因るのであつて、現實に副はない神意婚や契約婚を排斥したのである。

第二　婚姻を絶對に平等なる

男女二人の對立關係とした。基督教の婚姻觀によれば、男女は婚姻によつて一体と爲る。だから夫婦は家も氏も族稱も同うし、住居を一にし、妻は夫に隨從する義務がある。即ち肉体上信教上財産上並行動上完全なる一體を要求するのであつて、これが西歐諸國に於ける婚姻の指導精神と爲つて居るのである。東洋固有の道德觀では、夫婦一體と謂はんよりは、婦の夫への沒入であつて、婦は全然夫に隷屬して了うのである。露西亞法は全然之を排斥し、夫婦は二人格の完全なる對立であるとした。其の結果として、

（一）夫婦は氏を同うする必要はない。即ち婦は固有の氏を稱し得るのである。

（二）夫婦は國籍を同うするを必要としない。之は露西亞社會主義聯邦が國際主義により、國家的所屬を超越し團體の成立を認むるのにも因るけれど、婦は婚姻によつて夫の國籍に入るの義務なしとしたのである。

（三）妻の能力には何等の制限がない。即ち男女絶對的平等主義であつて、妻が如何なる行爲を爲すにも、夫の許可を必要としないのである。

（四）妻の財産を減少又は夫の財産の減少を來すべき夫婦間の契約は總て無効であつて、其れは第三者にも對抗し得る。

（五）夫婦は互に營業又は職業選擇の完全なる自由を有する。夫婦が共同の營業又は職業に從事する必要はない。家事は共同だが、營業又は職業は別であつて、妻は營業を營むのに夫の許可を必要としない。

（六）夫婦の一方が住所を變更するも、他の一方は之に隨從する義務がない。即ち夫が住所を轉じても、婦は之に隨行するに及ばぬ

するも、他の一方は之に隨從する義務がない。即ち夫が住所を轉じても、婦は之に隨行するに及ばぬだから他所に行つて共同生活をしようとすれば夫婦の協定を必要とするのである。

（七）夫婦の財産關係に就ては所謂共産制を採つて居る。即ち婚姻前夫婦各自に屬した財産は、各自の別産とするが、婚姻中夫婦の取得した財産は、之を共有とする持分の割合について爭あるときは裁判所が之を決する。但し土地の使用權及農民家庭内に於て共同使用に屬する農具等の財産に付いては、農業法に特別に規定がある。

（八）夫婦相互間に扶養義務のあるは、諸國の婚姻法と同じである。尤も此義務は相手方が勞働能力なきか又は失業したことを條件とする。財産がないからとて、直に扶養を求むることは許されないのである。露西亞では勞働能力あつて勞働しない者は、喰はずして餓死するを當然とされてゐるのである。

第三　婚姻障害事項は不適齡重婚、神心耗弱者又は精神病者として宣告された者、及近親相婚である。

（一）婚姻適齡は男女共に十八歳である。舊法は女を十六歳以上としたのであつたが、之を改正して男女平等主義を徹底せしめた。

（二）重婚を禁ずる。他の諸國と同樣一夫一婦主義を遵奉するは當然である。

（三）神心耗弱者又は精神病者として宣告された者は、共同生活を營むに適當しないのみならず、生理上又優生學上よりも、婚姻せしむるは不適當だからである。

（四）近親相婚の禁止　直系親族及兄弟姉妹間に限り婚姻を許さない。宗教道德上から親族婚を禁ずる法制では其の範圍廣く、甚しきは三十親等にも及ぶのであるが宗教と分離して舊道德を一掃した露西亞では、此の禁止を生理上の根據あるもののみに止めた、從つて又再婚、再々婚は素より、相姦者間の婚姻をも禁止しないのである。

第四　離婚は勝手次第である即ち婚姻は夫婦の協議により又は一方的請求によつて解消せしむることが出來る。愛がさめたら夫からでも妻からでも、一片の通告によつてお別れにすることが出來るのである。

西歐の離婚禁止制は基督教の思想に胚胎する。從つて宗教と分離した露西亞が離婚の自由を認むるに至つたのは當然である。わが國法が協議に因る離婚の自由を認めるのも右の如き宗教上の羈絆がなかつたからである。一方意思に固る離婚請求は、法定の事由に基かねばならぬとして居るが、實際上は協議の形式に於て一方意思に因る離婚が行はれてゐる。德川時代

寂寥

廣田康（大學病院）

早や六とせ
この山川に親めど
親めどなほ淡きさびしさ

淋しさは
講義のひまにふと見入る
チョオクの色の香もなき白さ

淋しさは
へりしチョオクを黑板に
投げて去なむと思い立つとき

白蠟の如く
つめたき指のいろ
あはれチョオクにまみれたるかな

淋しさは
まことの言葉ぎくとせず
彼れ呆然とわれを見るとき

京城雜筆

に於ていも『妻の諸道具持參金相返し候上は離別の儀夫の心得たるべし』（公裁秘錄第一卷）といふのが實情であつた。しかし其れは夫の一方意思に因つて妻を去り得る制度であつて、妻一方の意思に因つて離婚し得るといふことは、古來何處にも無かつた所である。然るに露西亞新法は離婚に就いても、男女全く平等であつて、夫が勝手に妻を去り得ると同樣に、妻も勝手に夫を去り得るのである。男女平等、婚姻自由の思想を完全に徹底せしむれば、斯うなるのは當然である。

離婚の自由を認むれば、其の結果著しく離婚數を增加すべきは想像に難くない。現に露西亞では、新法施行の初年千九百二十七年には、レニングラードに於ては六割六分、モスクワに於いては七割四分といふ驚くべき離婚率を表はした。乍併婚姻を男女平等の對立關係と認むる露西亞では、强いて婚姻を維持せしむる必要を認めない共同生活を欲しない男女を無理に結び付くるは、却て不當にして且つ弊害の基であると見のである。唯離婚に伴つて生ずる厄介な問題は、夫婦間に生れた子の養育方法である。露西亞新法は自由離婚制を認むると同時に、子の養育に關しては可なり注意を拂つてゐる。離婚其のものゝ增加は露西亞法の豫想してゐる所で、敢へて嫌ふ所でないらしい。

離婚に付いても登錄は爲し得るけれども、是亦證明方法に過ぎない。登錄はなくとも、離婚の事實があれば、裁判所は離婚を確認し得るのである。

第五　離婚後の處置――露西亞新法は自由離婚制を採ると同時に之れから起る不都合な結果を除かんが爲に、夫婦たりし者の間の扶養義務及子の養育費負擔に付いて規定を設けた。夫婦たりし者は離婚後と雖、一ケ年を限度として互に扶養を爲す義務を負ふ。其の額に付いて協議が調はないときは裁判所が社會保險の扶養料の額以内に於いて之を定める。露西亞新法は自由なる無因離婚を認めたのであるから、過失の有無は初から問題にならない。尤も相手方が自力を以て生活し得ない場合でなければ、扶養を請求し得ないことは勿論である。

離婚登錄を爲すに當つては、子の養育責任者、費用の負擔者並養育費の額を定めて、之を登記官吏に申告しなければ爲らない。此時の事項につき夫婦間に協議が調はない時は、普通の民事訴訟に依つて決定して貰ふ事に爲つてゐる。」

以上が露西亞新法の婚姻制度の要點である。之に對しては聊か論評をも加へて置きたいのであるが此の小文では到底盡し難い。そこで唯一言して置きたいのは右樣な婚姻制度は我國現時の社會實情に適しないのみならず、一般の思想にも適合しない。婦人の解放といふ名目はよいが、其の實質に於いて婦人の爲に甚大な不利を齎すといふことである。（了）

淺春

徳野鶴子
（櫻井町一丁目）

春されどおく霜白きあさあけを靄のふかみに鵲のなく
まさしく春はきにけり木々の枝にひそむ力のほの見えにつゝ
くろ〳〵と鋤きかへされし土の香のほのかにたちて日はうらゝなり
用達して時あるまゝにゆきゝ人しげきがなかにわれも來にけり
雨はれて日はかゞよへり南山のいたゞきあたりもやたちにつゝ
夕あかりたもつ久しき厨べにかそかに匂ふ蕗の薹はも

國境ところ〴〵

と云ふ姥櫻以上で、御座附が浪花節と來ては助からない。全く恐ろしい老妓が數奇な運命を抱きつゝ

得るのである。

第五　離婚後の處置――露西亞新法は自由離婚制を採ると同時に離婚登錄を爲すに當つては、子の養育責任者、費用の負擔者並養育人の能否に就て充分考慮を拂ふことである。（了）

勿論である。

國境ところ〴〵

野崎眞三（朝鮮新聞社）

京城雜筆

○

恒例に依る朝鮮新聞社の國境慰問計畫も今春は第六回となつた。そして第一班として咸北第一線を二十日に亘り親しく慰問し何處でも感激と感謝に溢れた涙ぐましい情景の連續であつた。何と云つても國境第一線の人達はあまりにも寂寥な身邊に溫い感謝と同情に餓へてゐる。國民的な我社の同情と感謝に滿ちた我社の慰問とはどんなに第一線の人達に慰安と激勵とを與へたかは蚊々を要しまい。

○

白頭山の天池から僅に二余里の農事洞まで圖們江を遡つたが遂に白頭山の偉容は觀られなかつた。農事洞は往年仁義軍の襲擊を受けて全滅した思出の駐在所で、大瀨警部補以下の心盡しで一泊したが實に寂びしい無氣味な一夜であつた。匪賊馬賊の脅威、猛獸の被害等々、恐ろしい數々の物語があつた。盛夏匪賊討伐の際なんぞは警察官は人跡未踏の山々を駈け廻るので、食糧の支那鰻頭なぞも口に入らず、甚だしい時は携行のメリケン粉を圖們江の河水で溶いて飲めば一時の空腹は凌げる相である

○

圖們江の上流にはエメンスイ其他の河魚が多い。三長の旅館では粕漬のエンメンスイを燒いて食膳にあつたが、味のしまつた非常に美味であつた。盛夏の江岸は此種の河魚で食膳を賑はせるらしい。土地の人の話に依るとエエンメンスイは鱒の一種で、海から上つて來たものらしいが、此魚には雌雄がなく腹の中には卵の入つてゐた事がないと云ふ話であつた。科學者でないから胎生のものを間違へてゐるのではないかと思ふが、兎も角圖們江の河魚は國境第一線の滋味であろう。

○

國境第一線と酒は緣が深い。匪賊馬賊の物騷な時代には斗酒敢へて辭せぬ豪傑が多かつたが、そんな英雄時代は過ぎ去つて今では第一線の軍隊や警察官に酒豪が少くなつたが、幹部には尙非常に多い第一線の守備隊長や警察署長、さては憲兵分隊長には隨分强い人がある。從つて國境にも想像以上に良い酒があつたが、大部分は羅南附近の地酒で味が悪い。新阿山で飲んだ『澤の鶴』の味は未だに忘れられない。凍つた地酒なぞ水ッぽくて酒の分からないものにさへ不味であつた。支那酒も二三度飲んだが奉天や安東で飲む老酒の味とは較べものにならぬ不味であつた。

○

咸北第一線、主として圖們線方面は鐵道工事の關係で到る處に內鮮の料理屋と藝妓、妓生が居るのに吃驚したが、慶源を除いては全く海千山千の猛者、年は三十四十と云ふ姥櫻以上で、御座附が浪花節と來ては助からない。全く恐ろしい老妓が數奇な運命を抱きつゝ自棄氣味な後半世を送つてゐるのだから堪まらない。珍らしいのは各地に曰系露人の藝妓が散在してゐる。會寧の××××を始め暗に咲く魔性の花としてエキゾティックな氣分を唆つてゐるだけだ。

○

慶源の高地からは遙に露支國境の土門子が雪に被はれてゐるのを眺めた。慶源から圖們江に添ふて下江すると對岸は露支の國境だ。ソヴエットロシヤの正体が種々に傳へられてゐるだけ露支國境は興味深かい存在である。慶興から龍峴、土里と露國支境踏破の豫定が積雪四尺に妨げられて遂に訪問が出來なかつたが、赤露の物資缺亡は事實で雜穀其他を支那地、朝鮮地から秘密裡に求めてゐるらしい赤旗を飜したゲペウの姿を見られなかつたのは殘念であつたが、西水羅では警察署長其他から最近の赤露の國境事情を詳細に聽いた。封鎖されてゐる國境だけに興味深い哀話秘話は數限りなく雪と氷の下に埋つてゐるらしい。

○

國境第一線の火田民の常食は粟稗等の雜穀の粥で、之に馬鈴薯其他を混ぜてゐるが、春窮期には雜穀も缺亡するので草根木皮に餓を凌いでゐる。現に三長茂山方面では松の皮を剝ぎ僅に露命を繋いでゐる。松の皮を剝ぐのは松を枯らすので警察官も之を制止するが、松の皮を剝かねば生きて行けないとなると制止も考へもので此取締には警察官も手古摺つてゐるらしい。松の皮を剝いで生きてゐると云ふたとて都會人には事實と思へ

まい。松の皮を粉にして之を蒸して丸めて餓を凌いでゐるのだから此上もない慘狀だ。酒がうまいのまづいのと味覺の遊戯なぞ火田民の人達には申譯ない義でもある。

（一九三〇、三、一三）

求人
外勤社員内地人三十歳以下
保證人を要す
（雜筆社）

將棋漫談

辻繁之助

（京城、將棋六段）

將棋の流行したのは現今を除いては幕末頃であつた。人皇四十代頃に支那（一說に印度）から傳はつたといふ象棋は現今の將棋に變つて初代名人大橋宗桂出現以來久しく不振に陷つて居たが、嘉永安政の頃時の將軍棋を好む處から代々宗家を繼承する大橋は元より伊藤宗看、大橋宗英、天野宗歩等の群雄は割據して覇を爭ふたのは現今新聞將棋の八段戰にも劣らぬ緊張と眞劍味を持つたものと思はれる。當時幕府の設けた將棋所の指南番は五十石の知行を戴いて棋道の研究に盡瘁し時折將軍の催さるゝ御城將棋こそは當時の棋客にとつて最愉快であり又難事であつた事であらう。其頃有名な天野宗歩の御城御前に於ける試合は、前後十七回連戰連勝最後に時の七段大橋宗眠に敗れた將棋等は、其裏面に於て大橋の妻は水ごりして神佛に祈願を籠めたとか、又秘に幕吏と謀つて天野が徹夜を爲した翌日を選んで急遽之を召し以て勝を得たとの話であるが、又それより少し前の事時の名人伊藤宗看の息看壽は、名人より六段を許された時八段の大橋宗與は之を拒んで看壽若年棋未だ圓熟せず六段免許は時期尚早なりとて親宗看に此旨を傳達して曰く、看壽六段を欲せばよく我と香落にて指分けるべしとの手嚴しき挑戰に親の宗看怒るまい事か一日我子看壽を召して棋士の因果を含め宗與相手に應戰する事となつた。當日宗看は其席に立會はず、子は將棋所にて對局の間、親は自家に居て勝負や如何にと氣遣ふた。形勢の注進櫛の齒を引くが如しとあるから一手毎に宗看に知らせしものと見る。そして指手は進み戰は將に酣なる時、注進は今若先生は六九歩打と報した。宗看之を聞くや莞爾として、駒を納め看壽勝てりとて一竿を携へ遊漁に出たといふ事である。果して其將棋は看壽の勝となり問題の免許も無事に解決して其後九段に進み三代宗看を襲名して鬼宗看といはれしは此人であり、天野宗歩は七段に終つたが技倆は正に名人を凌ぎ古今獨歩と稱された人、共に其棋譜今に傳はつて私等の研究材料となつて居るのであります。

【IIII】

◈新聞及雜誌

北漢山人

○京日の松岡社長は、どういふ嚴寒でも外套を着用しない。

○一日必ず四里歩くことを、モットーとして、『歩行博士』の稱を得てゐる。

○社務には熱心で、毎日階下の事務室で、盛んに働いてゐる。どうかすると、給仕などと、握飯を一緒に嚙りながら、夜晩くまで、活動してゐる。

○今年は、創刊二十五週年といふワケで、資本金を五十萬圓に增額。京日、毎申の外に、セウルプレスを合併經營し、毎日申報は八頁に……京日は十三段制といふのを實行した。『ウチの社長は、やりますぜ』と某氏自慢たら〳〵。

○も一ッ松岡氏は、私人として學生に給費するのが道樂で、現に鮮人青年で、この春九州大學などを出るものが、數名あるとのことである。

× ×

○細井肇氏が、東京で、『人の噂』といふ新雜誌を始めます。

○創刊號は、この四月一日世に出ますが、これは、當代の人物を堂々『誌上審判』に附しやうといふ至極面白い思ひつきです。

○殊に財閥、官憲に少しも屈しない細井氏だけに、屹度氣持のいゝものゝ出來ることを期待してゐます。

○細井氏と相知る人、乃至は、同誌の趣旨に御賛同の方は、同社客員（年額十圓納め）となつて頂きたい。

○發行所東京市芝區今入町一五月旦社、普通購讀一部二十錢。

材料提供

らどうだらう、恐らく中野氏の闘志は猛火の如く燃へ、夫れこそ軍

たとの話であるが、又それより少し前の事時の名人伊藤宗看の息看壽は、名人より六段を許された時棋譜今に傳はつて私等の研究材料となつて居るのであります。

きたい。

○發行所東京市芝區今入町一五月旦社、普通購讀一部二十錢。

京城雜筆

財界漫筆

中野通運と瀧川マッチ王

別府八百吉

（京城日日新聞社）

×

このごろ京城に滯在した運送界の權威通運の社長中野金次郎氏と神戸の本邦マッチ王瀧川儀作氏とに、事を以て何回かあつた、そして色々の事を感じた。

×

中野氏は、數年前から面識あり鮮明果斷な性格を有し、人が馬鹿に見へて仕方なきも、然も夫れを適當にあしらつてゐるといふ風の感じを與ゆる線の太い人物、だが今度運送合同から、通運の脫退を聲明した態度と、遺憾なき達辯とにより『闘志滿幅』とは、斯かる人物をいふのだらうと、沁々思はした。

×

運送合同の利害、正否については、私等は全然門外漢であり、數年の複雜した行きがかりあり、重役病患者の策動あり、採算關係の相違あり、支配權問題の爭奪あり端的に斷じがたく、表面から論じたのでは誤りが多い、私等はその關係の人々の所說を聞いて敎へられてゐる。運送といふ事は、實に複雜多端で、常識判斷や、聞き齧りでは分るものでない、が、その色々の所說の內で、中野氏の熱辯は、一點スキがない、確乎たるコンクリート堅めの地盤に立ち、多年の体驗と、無盡藏の智識、夫れを傾けて、數字上から明快に現在及び將來を論斷し、通運の態度を明らかにしたところ、超群の人たるを知る。

×

超群の人である事はたしかだ、彼の既往が夫れを物語つてゐる、彼は年少から辛苦艱難を嘗めて成人し、陸海兩運の荒浪を乘切つて四十そこ〳〵には早くも日本陸運界に覇を唱へた眼識と精力と、勇往の人でなくては到底出來ぬ立志傳中の一人である。まだ四十台の若さで、財界老人組の一流を以て組織される國際經濟聯盟の年少組の一員となつてゐる。私の友人の二三は中野氏が若し政界に入つてあの闘志と頭腦とで活躍したら、正に大臣だ、恐らくムッソリーニを小さくしたらあんな人だらうともいふてゐた。彼は新聞記者にあふ事を瞻刧がらぬ、議論を遠慮せぬ、むしろ進んであひ、進んで語る。然も彼は無駄な事を云はぬ、談話は問題の中心點を少しも外れない。

×

運送合同は、通運系脫退するも滿洲の國際運輸中心で進められつつある、若し夫れが出來て、鐵道局が種々の特權や援助を新會社にあたへ、新會社合流を退いた通運の立場を不利に陷れる事になつたらどうだらう、恐らく中野氏の闘志は猛火の如く燃へ、夫れこそ渾身の馬力で鐵道局と運合會社を對手に力戰するだらう、恐らく彼は政府筋に手を廻し、政黨に手をまわし、國際運輸の親會社たる滿鐵に手をまわし——滿鐵には、彼の好敵手として朝鮮運合促進派の先達小山理事もゐるが——京城に乘り込んで花々しい一戰をやるに相違ない、運送合同と斯界の改善とか、混亂とかを別とし、此の中野氏の雄々しいであらう男性的の突擊ぶりは運合會社の成立、通運の奮起で見物したい大芝居と思ふ。

×

瀧川氏は、先代の事業と巨富を受けついだ長者らしい人である。內地のマッチ界を統一し、朝鮮にもその余勢を伸ばして擴張するといふてゐた。彼はマッチ王が中心で他の色々の事業に關係し、永らく神戸の會頭もやつた。朝鮮土地經營の末森專務と大阪高商の同期生だといふ事だ。末森君に

『神戸の財豪と云つて、余程ありますか？』と、聞くと

『ナーニ大した事はないでしやう、七八百萬圓？、千萬圓とはありますまい』

夫れが末森君の答へだつた。

×

運送王の中野氏と、マッチ王の瀧川氏を對照するわけではないが瀧川氏は實に余裕のある人らしい悠揚せまらぬところがあつた。秋霜烈日の中野氏と違ひ、春風駘蕩である。中野氏は叩けば强くカーンと鳴るが、瀧川氏は晉の鈍い人らしい、中野氏は喧嘩腰で行く人のやうだが、瀧川氏は笑つて事を片づける主義のやうに見へる。瀧川氏は妥協若くば接近の歩み寄り

京城雜筆

主義のやうに思はれ、中野氏は堅くとつて下らず、捨身になつても奮迅する性格と云へやう。

×

然し、瀧川氏は中々仕事をする財人だ、神戸の株式米穀兩取引所を合同したのも彼だ、横濱が大震災で破りぬいてゐる時、その生命たる唯一の生糸輸出港の誇りを神戸に劃取し、又生糸の清算取引を神戸に初めた主動者も彼である。マツチ會社の合併を策して、豫期の如くやり上げたのも彼である。島徳の如き怪物と京阪電鐵の株式問題で、法廷に爭つたのは去年の事だ、表面溫厚篤實にして長者に見へる瀧川氏の半面にも、凄い所はあるらしい、こゝらに人物の複雜味はあるといふのだらう。

×

此の兩權威が、最も緣の遠いと思はれる森岡警務局長を、期せずして推稱するのを聞いた。要するに『理解のある型に捉はれぬ官吏』といふにある。局長が交際費か何かで、大に兩氏を御馳走したらしい模樣のないところを見ると、又別に私は局長の事を聞きもせぬのに話すところを見ると、何物かを感じた本音だらう。朝鮮の局長や何かは、中央の局長あたりに比すると、官臭濃厚ださうな、森岡氏は、まだ新らしくてその朝鮮臭に犯されてゐないために、或は目に立つたのかも知れない。

◈學界風聞記

北漢山人

○城大醫學部の今村（豊）博士人が水泳の話をすると、『ホー、さうかい〳〵』と、頗る感心して聽く。

○話し手は、先生謹聽してゐると思ふから、益々自己陶醉して、『ネ、先生……水泳ちうやつは、實に面白いでせう』と、滔々と二時間ばかりも、同じ話をする。

○ソコへ外の先生が來て、『面白さうだな。何の講釋か』『へー今、今村先生に、水泳の話をしてゐます』、『何、水泳？、それア君、釋迦に說法ぢやないか』『ナゼです』『ナゼもあるまい。今村先生は、オリムピックに、東大代表として、天晴れ手練のほどを見せた、當年の大選手ぢや……』に話し方『イヤ、おどろいた！。今村先生も、タチは悪いや……』、靑くなつて、退場。

○博士は、人に『獨りよがり』をさせて、おもむろに見物するといふ一つの道樂を持つてゐる。イヤ物騷〳〵。

◈棟梁風聞記

漢江漁郎

○水下町に、五味光一といふ大工の棟梁があります。

○鄭寧實直一本槍で、ズルイ仕事を決してやらないから、出入先では、『當世に珍らしい男だ』とドコでも信用されてゐます。

○ところが、棟梁は、仕事が丹念なばかりぢやない。他人の難儀を、ぢツと眺めてゐることが出來ない。最近も、同じ町内に、主人に死なれて、お葬式も出來ないで『これアどうしたものか……』と近所合壁で、小田原評議をしてゐる……それをチラと耳に入れた五味棟梁。『世の中は、相もちだ。ヨーシ、ワツチが引き受けやう』と、見ず知らずの間ながら飛び込んで、早速坊さんを迎へる。葬儀屋へカケ合ふ。夜伽の仕度をする。明くる日は、まツ先きに立つて、お骨拾ひに行く。とう〳〵廻禮まで、仕事をやすんで、たつた一人で世話を燒いた。

○感心なことは、これだけかといふと、さうぢやない。コンナ事はまア年中で、町内の食へない人で、幾人助けてもらツたか判らん

○『生き佛の棟梁』といつて、アノ邊では、うしろ姿を拜んでゐるものが多い。

然るに何事ぞ！ほんの一日、半時のいたづらな運命であらうとは。

○

本塲銘仙
毛糸各種
ちゝぶや
本町二丁目
（電話五〇五番）

九龍淵と山菊の思出

九龍淵と山菊の思出

長谷井市松
（朝鮮銀行）

コスモスの花に白日の夢を偲ばせるやうな、溫井里の宿を立つて神溪寺前に車を捨て、そこかち徐々に、仰止臺の峠を越して、やがては金剛門の巨巖をくぐり、亂流巖に激する玉流洞の淵碧を俯瞰し、さては巖壁削々たる飛鳳瀑を左手に眺めて、我等は一意加速度に歩みを移したことであつた。

道すがら振り仰ぐ金剛八萬由旬一萬二千の連峰――觀音、世尊、集仙、彩霞の連嶺、さては九井、毘盧の峻峰、其或ものは頭上に雲を戴き、其或ものは腰邊霧を纏ふて、濃淡一抹、瞬間推移する山態雲容の妙に、我等は尠からず心を惹かれたものであつた。

○

行々瞻視すれば、岩巖錯落又磊砢たる碧潭、淙々轟々たる亂流、或は雪の如く泡立ち、或は碧を流したやうに、澄徹な淀みを湛えて居る。至竟金剛の山は水の美、巖の美、雲の美――是等凡てのものゝ美を一所に集め得たものと稱し得るであろうか。

○

時は方に九月の末、山峽到る所に澗草野花の紅白紫黄、眼もあやに繚亂するあり、楓葉火の如く燃えて岩巖の奇勝を彩るあり、細徑には栗鼠躍り、幽林には山禽の叫びを聞く、仙境の幽寂、秋に於て殊に趣深いものがあつた。

丁度我等が九龍淵のあの黑水晶のやうな、神秘そのものゝやうな龍壺の下方へ辿りついた時に、私はソコに一簇雪の如き山菊の、あたり一面巨巖の面を蔽ふて繚亂するのをみた。ソレは宛然天上の贈物でもあるかのやうに、或は又靈山金剛の精でもあるかのやうに――寂然としてもの靜かな、此峰中に微笑み交して居た。花は雪白無色にして、何等異とすべきものではなかつたけれど、其葉は丁度コスモスのやうな、又は南山菫の樣な纖細なもので、全然普通のものとは異つた種類のものであつた。私は此珍物の發見によつて、すつかり愉快にさせられた。私は慌しく而も入念に其數株を採つて、だいぢにハンカチーフに包んで、ソレをポケットに收めた。

○

其翌朝私は溪澗を渉り、天嶮を攀ぢて、新萬物相天仙臺の絶頂を極め、午後には車を馳せて更に海金剛の奇勝を訪問した。併し乍ら其日の午後五時半には、私達は遂に溫井里の宿に別れを告げねばならなかつた。

翌朝早く京城に歸つた私は、直にポケットから、殆ど萎みはてた彼の紀念物を取出して、只管ソレの更生べと力を注いだ。

二三日は無事に過ぎた、山の精は徐々に勢を增すやうに見受けられた。私は無上の愉悅を以つて、折々の水注ぐことを忘れなかつた然るに何事ぞ！ほんの一日、半時のいたづらな運命であらうとは。

○

私は夕陽の佗しくあたる花園に起つて、痛ましくも搦り返されて最早復活の望み絶えはてた、彼の紀念物を哀れに眺めた。同時に此る運命に導いた、私の愛物チヨビ公の大きな頭を默つて撫でた。彼は何事も知らぬ氣に、唯滿足の悅びに醉ふ如く、彼の咽喉を頻りに鳴らして、幾度か私の膝頭に頰ずりした。

秋が去り冬が訪づれ、而して今や春が太陽と共に、私の花園に巡り來つた時、私はソゾロに曾遊の山の旅を思ひ、彼の紀念物の絶滅に向つて、心からの哀寂を味はなければならなかつた。

◈町内風聞記

三木一彦

○門前の小僧經讀むといふ。

○岡村介石氏とこのお孃（十七才）さんは、隣りの部屋で縫物をしながら、年中易斷を聞いてゐるので、スツカリ名人になつてしまつた。

○近處の人が來て、『今明巢を狙はれて』といふと、『その泥棒は、素人です。二三日經つと擧げられます』といふ。『昨夜店員が遁げまして』といふと、『女難でせう。マダ市内にゐますよ』、それが一々的中。

○介石氏膝を叩いて、『殘念々々』、『何がそんなに殘念なのです』、『これが殘念でなうてどうする。お前が男でないとは、ハテサテ……』

二つの災難

―友に與ふる手紙―

伊藤憲郎
（高等法院）

【二六】

その後、君は妻君を貰ふたかどうか――否として、消息はない譯だから、何れとも判らぬことを悲しむ。

君が夫人を離緣したことを聞いて僕はその不思議さに驚いた。君こそ家庭生活に惠まるべき素質ありと信じてゐたから。そのとき僕と君とは學校を卒業してから十年振りで邂逅したのであつた。僕はずうと朝鮮へ來て了つたが、それでも時々は東京を見る機會はあつた。そういふ時君はいつも折惡しく外國へ駐在してゐた。

一昨年君を××省の一室へ訪れると、二人は學生時代の昔に返つた。君は兎も角郊外へ出やうといつた。日比谷の松本樓で晝めしを濟まし、自動車を走らせ兩國驛に行つた。汽車で稻毛の海岸に行つた。さあ、歩かう、房總の山々は春かけて霞んでゐた。波は喜びの聲を擧げて岸に迫つては返る。遠く鹽を吐いて行く蒸汽船、帆を上げて走る船、靜かな海邊を暫くは無言のまゝ歩む二人であつた。

やがて、我れ〳〵の間に色々な話が始まつた。學校時代の時のやうに、これから、東京まで歩かうそうして道々話さう、午後の日ざしは歩きながら話しながらの二人には風を交へるので劇しくなかつた。とう〳〵向ふに無線電信の高い柱が見える。遂に船橋まで來て了つた。

陽はかげつて來た、學生時代の二人であつたら、尙ほ、東京へと急いだか一歩を讓つて汽車か何か乘物を求めて歸つたと思ふが、そのとき我れ〳〵は、ゆつくりめしを食つて行かうといふことになつて了つた。

今は名も忘れたが、海岸近い料亭に這入つた。二人は先づ健康を祝ふ杯を擧げた、妓も交つた。實はその時まで氣付かなかつた――料亭に入ると、二人は一緒に風呂に飛込んだ。それから、膳の出るまで、娯樂室に行つたが、そこにピンポン台があつた。やらう！二人は寮時代の時と同じやうに立ち會つて勝負をした。勝負は三對二で僕の負となつた。迎へに來た女中は、微笑みを以て暫く子供のやうに騷ぐ二人を見てゐた――僕は酒を飲み始めてから、十年互ひに經過してゐる現實を今更らに氣付いたのであつた。

僕は朝鮮へ來てから妻を持ち十供が四人生れた、××官といふてそれは世俗的の華やかさはないものであつたが、家庭として、そのうち一人の子供を喪つた悲痛はあるが、その以外には不足はなかつた。僕は、そのとき杯をうけ乍らその後の君の生活の華やかさ、倫敦や伯林の大使館詰めとして働き夜は輝くシャンデリアの下に外國の人に交り、美しいと聞く君の夫人と君は踊りぬく。君の夫人は君と喜びの生活を續けてゐやう――僕は、それと、君が曾つての寮時代に於けるエピソートを思ひ合はして流石は僕は酒を飲み乍ら追憶するのであつた。

それは、秋の一日、君は僕と例の如く夕飯後寮を出て×願川の散歩に行つた。一廻りして寮に歸り君は君の室に、僕は僕の室に一歩這入るか這入らないに、君は脫兎の如く室を飛出し蹴足のまゝ寮の庭を横切り裏門から外へ出た。あまりの突然なる所作に、僕と附近にゐた外の友人は一時は呆然としたが、やがて、僕等も下駄をはいて君の跡を追ふた。然し君の姿は見えなかつた。

そのときの君は、散歩のときに十圓の金を落したのであつた。遙々××道から君の兄さんは毎月學費として十圓を送つた。純情の君はそれで月の總べての費用に宛てゐたことをそのとき始めて聞いて僕はなんと感めやうもなかつたけれども、幸ひなことに二三日して念のために届けて置いた警察から知らせがあつた。或る商人がそれを川邊で拾つて届けて呉れたのであつた。

又僕は我れ〳〵が大學を出る愈々の頃、それは花の咲く時分であつたと思ふ。門の中のあの芝生の上で轉んで皆んなと次ぎの時間を待つてゐた。花の蕾は赤味を帶びてゐた。樹枝の間から青い空が見える。その空を時々白い雲が走る。門外の本鄕通りを電車が音を立てゝ行く。君はその時皆んなの雜談を斷然押へてから叫けんだ。――

僕はとう〳〵一人の女學生も得なかつた――と。誰も〳〵笑ひこけたが、君は、眞面目にイヤ我れ我れは勉强ばかりして了つて不仕合

吾子を送りて

京城雜筆

僕はとう〳〵一人の女學生も得なかつた――と。誰も〳〵笑ひこけたが、君は、眞面目にイヤ我れ我れは勉強ばかりして了つて不仕合せではなかつたか――と言ひ足したが、今度は誰も笑ふものはなかつた。

船橋の藝者は、盛んに君と應酬し始めた。僕は、そのとき、外交官は違ふと思ひ、學生時代女學生と戀の一つの花も咲かせざりし君を祝福すべく、その後、さる名士のダンスの旨いモダンな令孃を妻とした――その巧さを確むべく、君！妻君が待つてゐるだらう、今にして思へば、實に野暮なことをいつたもんだ。

君は、巧きを掛けた白折の顏から矢庭に眼鏡を外して僕の顏を見た。僕は返事を待つた。□□君！僕は理想が高くてネ、離緣した！そう言つて流石に萎れる君の有樣にすつかり驚いた。

そうすると君今は獨身かと僕は又愚にもつかぬ反問をした。君が今も大學時代の時のやうにお母さんと一緒に暮してゐると聞かされて、現在の自分の兎も角足りてゐる家庭生活と比べてまこと、氣の毒になつて了つた。

さあ飲まう〳〵、それから酒に强くない僕も君と大に飲むことにした。君位の××省のチヤキ〳〵が女房がないとは、坊さんに丁髷があるやうなもんだ。又シヤンが來るよ。萎れる君の前に、朝鮮の××官である僕は一點優越を感するやう、一寸そんな氣持ちになつて了つて、さあ、僕も、朝鮮滿洲などの話を出した。話をしてゐると、君の舞台は世界、僕のは東洋の片鮮、然し、君の話は明る過ぎ僕の話は暗過ぎるが、人生の裏面を見てゐない君の話は、仕合せのやうな仕合せでないやうな氣がした。

君はそのうち藝者とダンスを始めた。泥醉鄕の嬉しく悲しいものになつた。遂に藝者も女中も逃げ出した。完全に、もう二人の間に學生時代の俤はなくなつてゐた。僕は翌日××省で早くから會同がある事になつてゐたので、醉ひつぶれた君を殘したまゝ料亭を出たのであつた。

昨年春、支那出張の歸途にある君を迎へた僕は、旭町の日亭の一室で語り合つた。又の再會を互ひに喜んだが、又君はそのときも醉ひつぶれた。外交官だからいゝとして、未だそのときも君は妻君を貰つてゐないといふ事であつた。京城に美人はゐないかと君はいつしは歩きながら話しながらの二人には風を交へるので劇しくなかつた。とう〳〵向ふに無線電信の高るが、その以外には不足はなかつた。僕は、そのとき杯をうけ乍らその後の君の生活の華やかさ、倫門外の本鄕通りを電車が音を立てゝ行く。君はその時皆んなの雜談を斷然押へてから叫けんだ。――

吾子を送りて

松村もゝよ

（大和町官舍）

十年ぶりわが古里のみちのくへ歸り行く子に慾かあらすな

○

夜をつぎて縫ひし衣ぞ雨につけ風につけつゝいとひと云はなく

○

わが家には唯ひとり子の男ゆゑ命かたむけはぐくみぞ來し

○

可愛子に（よしこに）には旅をさせよの古言も命にしみてかなしかりけり

○

命あらばまた逢はめやもと常ひごろ宣ひし老母（ちゝ）に吾子行（やり）にけり（老母八十才）

○

玄海も今越えぬらむ幾百里ひとり旅なる子をし偲ぶも

○

白河の關もこゆべし勿來をも目に近からむ見つゝを行けよ

○

汽車つかば何を目標（しるべ）に尋ぬらむ幼なおもかけ汝に、ありやいな

たが、それは眞面目の話ではなかつたと思ふ。

この手紙は、そのとき日亭の奥座敷で笑ひ乍ら、君の話した君の第二の災難を書くことに依つて鳧を付けやうと思ふ。

――君はその時の支那出張を先づ上海に於てトップを切つた。華麗な長崎丸は黄浦江の岸壁に横付けになつた。君は一等船室から出て埠頭に立つた。在留邦人の重立つた出迎人に一揖して君は自働車の人となつてホテルに送られた。多年外國の大都會生活に慣れてゐる君であるから、櫛比する租界の高樓の數々に驚かなかつたと聞いた。當然のことと思ふ。

その夜の佛租界カルトン・カフエーに於ける君への歡迎宴は支那側各國側から集つて流石に盛んであつた。醉つた君は自働車に乘せられてホテルに歸された。隨行の者として君を眞直ぐに宿に運んだことは當然過ぎる。もう十時半を過ぎてゐるから。君はそのまゝホテルに眠るべきであつた。然るに君は隨行の人に默つて而も浴衣着でホテルを出た――未だなんといつても三月――酒が醒めれば、上海の夜の冷氣は身にこたへる。コメデーは斯くして始まることになつた。

それでも君は浴衣の下に襯衣を肌にしてゐた。然し、その襯衣の下に千圓ほど、それから右手に財布それに二百圓程が這入つてゐた。

もう話の結末を急がう、君は、俥を呼んで乘つた。支那人の俥はどん〳〵走つた。夜は更けた。上海は華美な都市の裏にあらゆる罪惡を藏してゐた。夜明くると橋梁のトに骸が浮くことがある――それを君は知らぬことはなかつたが酒を飲んだから忘じ果てんとしてゐた。俥はある小路を繋ぐ橋に蒐つた。君は例の財布を麗々しくあけて二百圓の間から小錢を漁ると見る間に、突如物かげから巨大漢數名、折柄の月光を顔に受けて君の俥の前に出た。

俥屋が聲をあげて梶棒を下して了つた。惡漢は君の襟元を摑んだその顔の凄さ、君は醉がさめて上海の恐ろしいことを考へた。君は夢中に馬鹿野郎と大喝した。如何なる人種でも異國語を頓驚にやられるとハッとするといふ君の戰術相手が鳥渡手をゆるめたときに君は振り放つて逃げ出した。一瞬間の出來事であつた。學校時代ランニングの選手は恐らく隨分走つたらう。上海の夜の街は深々と眠つてゐる、もう一時間も走つたが、未だ追跡して來る。流石に選手も息が切れて段々追付かれそう、振返つて見ると街燈の下に隱現する男は唯一人、而も俥をガラ〳〵引いて走つて來る。惡漢の追跡ではなく君が賃錢を拂はなかつた件の車夫が金を貰はねばと何處までも慕つて來たのだ。

君は又俥に乘つた。然し、君は歸るべきホテルも町の名も知らない、上海は人口二百萬住むといふ廣い都、幸ひに君は財布の二百圓も襯衣の千圓も失はなかつたが、君の外交官は、浴衣で寒い上海の夜が明けるまで俥に乘つた、とう〳〵車夫は仕方がないから君を停車場に送り届けた。

――學生時代十圓を落したときの君のあのときの狼狽姿を思出すと、君の災難も隨分出世をしたものである。早く妻君を貰つた知らせが欲しい。

【三八】

◈奇人傳雜記

漢江漁郎

○京城にも、隨分隱くれた奇人異物が居りますね。

○有賀流東といふお爺さんを、御承知ですか。

○たしか舟橋町の家賃五圓の借宅に居ります。老齡七十、女房もなく、子もなく、兄弟もなく、天涯唯だ一人のみよりもない。

○夏は、庭師をして、『旦那一つ、この白檀を、苅りませうか』多は、茶賣りをして、『ワッシの鄕里の茶でさア、旦那などにやいけません。ヘイ、女中さん用で』氣の輕い御隱居。

○和歌と俚謠とがうまく、生花もやれば、茶も立てる。彫刻が好きで、殊に漆細工と來ては、玄人も及ばない。

○皆さん、龜屋のショーウインドを覗いて御覽なさい。堂々と雲去來毘盧峰頭の夕しくれといふ俳句を題して、そして『流東』と署名してあります。また歳々の元旦の、朝鮮新聞を氣をつけて御覽なさい。募集惰歌の懸賞にいつでも、一二位で入賞してゐます。

○この老、過去を語らず、自分を說かず。『御隱居、どうだい』といふと、『へヘッ、面白うゴワスのう』

のトに弼が浮くことがある――そ　車場に送り届けた。　といふと、『へへッ、面白うゴワ
れを君は知らぬことはなかつたが　――學生時代十圓を落したとき　スのう』

春光雜詠

名越湖風
（城大豫科）

よきたよりもたらせるごとかち烏　庭木に
鳴けり春の朝はれ

はしきやし春さりくればかささぎの　枝啄
ひもちて巣をつくるかも

松風のさびしき山路われ來れば　なく鵲も
したしまれけり

殿宮の氷れる池もとけそめて　松の木の間
にかささぎさわぐ

ところところ水田の面日にひかる　ひろ野
のはての淡霄の山

書庫にて

書庫の奥に鼠のごとくうづくまり　よき書
見出でて心ときめく

書を見つゝふとながむれば窓外の　春日あ
びたる松山のいろ

輿地總圖を見つゝ

たよりなき古繪圖見ればいにしへの　旅と
ふものは悲しかりけむ

河太く山のけはしき繪圖を見る　溫突宿の
くらきともし火

觀察使輿のなかにてながめけむ　都邑大き
くかきし古繪圖

書齋にて

壺油棚にかざりてわが書齋　李朝のにほひ
やゝにたゞよふ

いかならむ李朝の儒者の用ひけむ　桃の水
滴手にのせてめづ

壁にかけし李朝の皿の雲鶴をねざめ閑かに
ながめてありけり

大きなる鯉のをどれる皿の繪の　蒼くかす
める韓の島山

新羅の或る土偶を見て

かそけくもゆかしき音の聞ゆるや　鄕琵琶
かゝえし新羅の土偶

金冠をいたゞく王の前にして「琵琶をかな
でしかぐはし人か

南川のほとりをゆけば葉がくれに　裸形の
人の樂器ひきけむ

清凉里の御陵墓に詣でゝ

新しき石人石馬ならびたつ　王子の御墓に
春の日はさす

かゞやきしきさきの御墓しづもれる　松の
梢になく小鳥かな

○

いろ深きサイネリアの花の紫よ　タイムス
を讀む硝子戸の中

柳並木いまだ芽ぐまず雨あかり　光れる道
を自動車はしる

滿洲かはた玄海かわかれ路の　京城驛の春
のどかなり

蔦の根のはひひろごりて黑ずめる　崇禮門
の文字白き額

竹崎順子

工藤武城
（京城婦人病院）

竹崎順子は當世の流行ッ兒となつて、女學雜誌など手當次第に取つて通覽すれば、必らず何處かに其名を發見する。耶馬溪が賴山陽に因つて有名となつた樣に、文豪德富健次郎（蘆花）に因つて傳せられたから、斯くも名高くなつたのであらう。

德富蘇峰、蘆花兩兄弟の爲には竹崎順子は、其生母の妹に當り、自分の爲めには大叔母に當る。

蘆花氏の著は隨分大冊で、傑作の一に數へらるゝそうであるが、緣がなくて今だに讀んだことが無い。然かし蘆花氏兄弟は早くから國を出たし、其嫁入先きの伊倉村には一度も來たことが無いので、そこ邊の事をどんな風に傳してるか知らないが、恐らく又聞き話に相違ない。又た晩年の事は餘り詳しく知つて居らなかつたと思ふ。

偶々昨秋大博覽會に際し、順子の爲には眼に入れても痛くない程に可愛がつた其末孫の竹崎末雄君がやつて來た。一夜、彼の爲めには祖母、自分の爲には大叔母に當る順子の逸懷談に耽つて深更に及んだ。頃日又々同君から其事に就いての來信があつた。此を機會に吾々兩人の間に交された談話の一節を綴り合して書いて見やう。將來又た順子傳を物する人の參考の爲にと、今一つは、順子が基督敎信者となつた爲めに、いろ〳〵想像して、今日のバタ臭い敎徒と誤り傳へられて居るのを訂正せんがために……。

順子の父は矢嶋忠左衞門と云ひ惣庄屋であつた。惣庄屋は今日の郡よりやゝ小なる行政區域の司法行政權も有つた肥後藩の官吏で、代々祿を貪る凡庸な所謂おさむらいとは撰を異にし、實際の手腕家德望家が此れに當るのであつた。

母は三村鶴子は云ひ、此れも所謂おさむらひではなく、鄕士と稱する家系で、才色兼備で有名であつた。今日の言葉を借れば、先づ中產階級の、緊實な、且つ情操味の饒かな家庭に人となつた。

十七歲にして自分の大叔父竹崎律次郎の妻となつて、伊倉村と云ふ所に嫁入つて來た。律次郎は茶堂と號し、江戸昇平黌で敎授たりし大學者、犀潭の弟である。

茶堂時に年二十六歲、所謂士族の商買で、伊倉村に於て大仕掛の酒造業に大失敗を來し、順子は其嫁入仕度の盡くを賣つて此穴埋めをしたが、何のたしにもならない伊倉に於ける緣邊は殘らず其飛沫を蒙つたものである。

順子は晩年に至るまで、繰返して其時のことを氣の毒がつて居たやがて夫茶堂は、阿蘇山中、布田村と云ふ田舍に家塾を開き、貧乏なる村夫子の妻として此所に十七年を經過、時に順子は齡三十六となつた。

今度は伊倉村の隣村、横島村の干拓地に移り住み、失業せる士族に衣食の途を得さす運動に着手した。此横島村には、西南の役に熊本軍の大將となつて居た、池邊吉十郎氏なども、熊本城下から移つて來て居て、此役にも、横島村から出陣したものである。吉十郎氏の長男が即ち有名なる記者、池邊嵩嶺山氏である。

明治三年になつて白川縣（今日の熊本縣）知事、元の藩公細川護久公から召出されて、横島村の百姓たりし茶堂は、一躍して民政局大屬に任ぜられ、其の官にあること約十年、順子は四十六歲となつた。

溫順玉の如き順子の性格を說く前に、勿論其天稟もあつたであらう、さりながら彼女をして茲に至らしめた其零圍氣が大影響あつたことは否めない。茲で少しばかり彼女の敎養方面を調べて見やう。

結婚前未だ里方にあつた時代は父矢嶋忠左衞門、母鶴子、兄源助何れも程朱の造詣深い人達で、其薰陶を蒙つた彼女は、此時已に道義觀念は豊かに養はれたのであつた。

竹崎家に嫁してよりは、其夫茶堂の兄に時習館敎授、藩公の侍讀として儒學を講ぜる犀潭あり、茶堂の師にして妹婿に當る横井小楠小楠の門弟にして順子の妹婿たる德富一敬（號、淇水、又老龍庵と稱す）一敬氏の子が、猪一郎（蘇峰）、健次郎（蘆花）である。一敬の婿が海老名彈正だ。

順子を圍繞せる此等の、木下、横井、德富、河瀨、竹崎、何れも其時肥後國に於ける思想界の頭目であり、同時に其各方面の代表者でもあつた。極端なる國粹論者の神風連を門下より出せるもあり、

時世進運の最前線に立ち、國禁を犯し窃かに花岡山の密林中に耶蘇の洗禮を受けし、所謂七バプテス

京城雜筆

時世進運の最前線に立ち、國禁を犯し窃かに花岡山の密林中に耶蘇の洗禮を受けし、所謂七バプテスマ組も其門下より出た。

例を蘇峰、蘆花の父たる一敬に取つて見ると、大正三年物故されし時にも、其葬式は耶蘇教式であつたが、其心友は鎌倉圓覺禪寺の宗演禪師であつた。嘗て宗演禪師が一敬翁の自適吟の次韻をせられし詩に、

人間福祿壽。三者得尤難。
兒女長愈健。爺媼老益安。
一生持敬字。百世附縱觀。
家室團欒裏。春風吹不寒。

とあるが如き、如何に其心交の蜜なりしやを窺ふに足る。其長逝せらるゝや。

蘭契忘年二十春湘江畑水道相親
老龍昨夜攀雲去猶聽天飈吼綠筠

の禪詩も、二十年の道交がなみなみならぬ間柄であつたことを證する。

又た海老名彈正の耶蘇教の說教を聽いて居ると、皇室中心の國家主義の講義を勤王家から講ぜらるゝか、或は禪宗坊主が碧巖錄を提唱するを聞くの概があるのは、全く先きに說いた樣なことが淵源であることが分るであらう。耶蘇と云ふ看板を取つて見ると、中味は純然たる日本主義である。

話しは少し側道に外れたが、順子の夫たる茶堂は、右の樣な次第で、尋常一樣の凡グラ儒者ではなかつた。布田村にある時も、横島村にある時も、其子弟や門下生に教ゆるところは、全く實踐的の經學であつた。横井小横が京都に於て頑迷の徒の爲めに刺さるゝや、其家塾日新堂に於て、益々其抱負を披瀝して後進の誘導に勤めた。其講義の席には必らず順子も連なつて、仕舞には四書五經の字句は盡く暗誦するに至つた。

夫茶堂に先たゝれしより寡婦生活の十年目に、突如として彼女の心理に大ショックが起つた。外でもない。其の愛孫元彥の早世である。

來を知らず、焉んぞ死を知らざる儒教では、どうしても慰めることが出來なかつた。天禀の絶對愛と、死後の存在を說く耶蘇教とが茲に融然合一して基督教信者となつた。時に彼女六十三歲。

茲で少しく宋雄君をして語らしめよ。

ねえ、武城さん、世間では祖母が六十餘年の儒教を棄てた樣に云ふが、決してそうではありません。孔孟の精神は飽く迄も彼女の肉となり血となつて居たのです。偶々家庭的の不幸に遭遇して、儒教の中に覓め得なかつ

展墓

市山盛雄（野田醬油支店）

新川の土手の松並ほこりかぶり昔のままに蓮田のみゆる
新川土手のすがれし萱をうちしきて寢ころびたくてならざりしかも
はろばろとわれら親子が尋ね來しおくつきどころさびしくありけり
つるばしを擔ぎ來たれる遠緣の直さはひとり墓をほるとて
『こもうても針は呑まれんけい』と眞面目顏にお寺の小僧を褒むる直さは
骨壺をうづむと墓石除きみれば根ふかくも草ののびてゐにけり
やがてしてかくなりはてむかたはらに無緣墓崩えて重ねらたる
ささやかなわが家の墓をまへにして直さに墓の傾ぶみをするも
祖先累代の墓を刻まむ大きくこゝに聳えて立てばとしきりに思ふ
常春寺の朽ちし椽側にねそべりて冬日をあぶるこのおだやかなこころ
寺の門にかぶさりみゆるふるさとの箕山のみどり眼にはうれしき

京城雜筆

たものを、耶蘇教の中に發見したのでした。彼女の天性は、孔孟の仁義よりも基督の愛にしつくり合つたのでしよう。胸中無限の慈愛心は、基督の熾烈なる犧牲的愛に共鳴して、一身、一家、一族、一鄕、盡く超越した萬有愛となつて、晩年順子の一呼吸其まゝ愛の呼吸であり、一脈搏其まゝ愛の脈搏でした。

祖母の愛は、仇も、敵も、泥棒も放蕩兒も引包んで居ました。是非善惡を越へての愛で、全く聖者の生活其ものでした。

誠に其通りで、馬などが夕方野から歸つて來ると、

『オヽ〳〵、きつかつたく、』

（肥後訛りで、疲れたであらうの意）、早よう小屋に行つて休まつしゝやい。敷藁も新しく換へて置いた。今冷水を汲んできてやるばい』

人に物言ふ樣に其背を撫でながら厩に導くのであつた。心なしか馬も嬉しげに其頭を叔母の體にすりつける、小供ながらも誠に美しい圖であると思つた。

佛事などで親類が集まると、時習館に程朱を講ずる木下家、耶蘇教を奉ずる德富家、竹崎家、陽明の流れを汲む横井家、宗般禪師に參する二十年、拍子の大姉號と印可證明を得たる伯母（小生の母の姉）、何れも佛前に額ついて、睦ましげに故人の話などしてる樣子を見て、此れが斯くも多方面の人の集まりかと思ふ程であつた。又其思想上の信仰が斯る色別に屬するものであることを知つたのは、遙か後の事で、其間に何等の撞着も矛盾もない。今から考へても不思議な集りであるが、其本來のぎり〳〵は先にも述べた樣に、傳統的日本魂が種々の色彩を以て現はれたに過ぎない。

やゝともすると世の耶蘇教徒がコスモポリタンの惡夢に醉ふて、爾曹其王を尊べ位の微溫的な態度で邦家の中心に對するのを見受けるが、順子の耶蘇教は全く此れと其撰を異にし、一生涯東方に足を向けて臥したることなく、談皇室に及べば必ず襟を正して話したものである。末雄君なども本來文學を志したのであつたが、日露戰爭に當つて、此國難に際しては、奉公は寧ろ軍人にありとなし、强つて士官學校に送つたものである。

（昭和五、三、一五）

◈うわさ雜記

漢江漁郎

○今年の陸軍紀念日は、その第二十五週年といふので、大邊な盛況であつた。

○ところで、軍司令部では、その最終日——十日の晩——自出度萬事終了したので、幕僚一同南軍司令官にその旨を告げ、『閣下、陸軍大臣に斯ういふ電報を打ちましてはいかゞで御座いませう』報告電報の草案を提出する。

○それには、『記念日無事、大盛況裡に終了、御安心を乞ふ』といふやうな意味を認めてあつた。

○スルト軍司令官は、『これも諸君のお骨折で……』と、いひつゝ眼を通してゐたが、『フム、結構〳〵、但しこの始めに、（京城は）と、三字入れたらどんなものかナ。各地の容子は、實際マダ判らぬからナ』、そこで幕僚は、命のまゝ、劈頭に『京城は』と入れ早速使丁を、郵便局に走らせた。

○と、これと殆んど行き違ひに一通のウナ電。開いて見ると、アノ鎭海の大慘事！。幕僚一同唯だ『ウウトン』と唸るのみ。

○以來軍司令部では、『オイ、いゝ學問をしたのう』、『ウム、京城はの三字を、入れなかつたら……』、『ウウーン』

× ×

○京城二昔會の藤村德一氏……以前台灣にゐて、盛んに商賣をしてゐたことがある。

○その頃或る陸軍士官と衝突しとう〳〵決鬪をするといふことになつた。

○當日藤村氏は、家族や店のものと、永訣の水杯をし、白のうしろ鉢卷、傳家の一刀を腰間に、悲壯の意氣で、現場へ押し出したのである。

○折柄臺灣は晩春……おぼろに霞む春の夜の月を仰ぐと、流石に今宵ばかりの名殘が惜まれます。されど、戰士は、氣をとり直し、『ヤー々々、約束の刻限なり。出合へ〳〵』と呼ばはりました。……途端に『オー合點！今行く』バラ〳〵ッと、前から五六人、うしろから二三人。來たなと思ふ間もなく、忽ちムンヅと左右の手を押える。『ヤー無體なり！、何者ぢや』と大喝すると、『ネー藤村さん何物でもありません。我々は、××警察署員ですよ』……に、流石の勇士『ウウーン……少々約束が違ふ……』

諸君のお骨折で……』と、いひつゝ眼を通してゐたが、『フム、結とう〳〵決闘をするといふことになつた。石の勇士『ウウーン……少々約束が違ふ……』

京城著名商店案内

（いろはは順）

洋服類
濱洋服店
鍾路一丁目

新高麗燒
富田商會
南大門通三丁目

洋服及附屬品
富田屋洋服店
南大門通二丁目

本場銘仙
ちゝぶや
本町二丁目

貴金屬、時計
大澤商會
本町一丁目

金剛飴
龜屋商店
本町二丁目

御料理
川長
旭町一丁目

時計直輸入
田中時計店
本町二丁目

御料理
南山莊
西四軒町

標準時計
村木時計店
本町二丁目

サクラ正宗
山邑支店
明治町二丁目

和洋雜貨
藤木商店
南大門通四丁目

洋服及附屬品
丁子屋洋服店
南大門通二丁目

人參、藥品
貴生堂藥品店
本町二丁目

洋酒、洋菓子
明治屋支店
本町一丁目

百貨店
三越
本町一丁目

呉服類
三中井呉服店
本町一丁目

茶及茶器
青々園茶舗
本町二丁目

京城永樂町二
酒井婦人病院
院長 酒井一郎
（電話本局一八番）

京城本町二丁目
一番瀬醫院
院長 一番瀬慶次郎
（電話本四〇〇五番）

内科
小兒科
木村醫院
院長 木村文三郎
京城府吉野町九一
（電話本局七二五番）

金物類
近藤商店
京城本町三ノ三三
電話本局一五六二番

明治町二ノ七五
利根川齒科
院長 利根川清治郎
（電話本局二八六七番）

茶いろ〜
茶器いろ〜
青々園茶舗
京城本町二丁目
（電話本局一一一番）

お二人で一つの保険に
はいれる然も保険料は
普通の一人分餘ですむ
二人保險
東洋生命京城支店
一萬圓契約で八千五百
圓の現金定期配當の外
不老保險
に普通配當がつきます

外科
皮膚科
瀬戸醫院
院長 瀬戸潔
京城旭町二ノ八
電話本局二四九八番

M式卷上日覆
ホロ形日覆
各種テント
諸車用雨覆
非常袋
フトン袋
其他帆布製品
製作販賣
京城驛前
中西テント商會
電本二八四八

内科
小兒科
中島病院
明治町二ノ七七
（電話本局三七八番）

ふぐ料理
お座敷金婦羅
川長
旭町一丁目

てゐたが、彼女はそれからチーズの二三を取り出すとそれを其の士官の前に投げ出した。

トルストイ原著 高架索の囚人（その一節）

瀬野馬熊譯
（朝鮮史編修會）

囚人等の生活は愈難儀になつて來た。彼等の足枷は最早決して取り除けられないし、散歩する事も無論許されず、只半燒のパンと少量の水が犬の樣に彼等に與へられた。

それに彼等の閉ち込められてゐる穴は薄暗くて且つ濕氣が多く、コステルヌは直ぐ病氣に罹かつた彼の身体は腫れ上つて氣の毒な容体になつた、が彼は終日呻く事と寢る事とで時を費した。ユリアヌも再び元の自由を得やうと云ふ望は殆ど無かつたが、それでも尙ほ彼は其の穴の内に一つのトンネルを拵へようと試みた。併し彼は掘り上げた泥の始末に困つて居ると或る朝アブダルは其れを見付けて『此後こんな事をすると殺すぞ』と云つて威嚇した。

こんな事で日を送つて居る内ある日ユリアヌは、土の上に蹲まつて頻に逃走の夢を見てゐると、不意に二つの菓子が彼の膝元に落ちて來、それに續いて又櫻んぼうが二ツ三ツ落ちて來た。彼は頭を上げて上を見たが、其處には娘のデナが立つて居、彼に對して微笑を送ると、其の儘パタ〳〵走り去つた。と、ユリアヌは考へた。『多分此の娘が俺を逃がしてくれるだろう』

彼は穴の一偶を掘つて其處から粘土を掴み出し、それで玩具を造りに掛つた――數個の人形や馬や犬など。

『彼女が此度來た時にこれを與へやう』と、彼れは獨り言を言ひつゝ、彼の女來るのを待つて居たが、デナは其の次の日竟に來なかつた。其の翌日ユリアヌは突然馬の足音を聞いた。程無く彼は韃靼人等が何か緊急な會議でも開く樣な工合で其の村の近所に集つて來るのを見たが、彼等はロシヤ人の事に付いて話をして居る樣子で、例の老人の聲が一際高く聞へた。

ユリアヌは彼等が何を相談して居るのか、判然とは分らなかつたが、多分ロシヤ人が近所に押し寄せて來て、韃靼人等は如何して此の村を防禦すべきかと言ふ樣な事に就て相談して居るのだらうと思つた。と、今迄聲高く談し合つて居た其の談話が不意に止んで、それから間も無く、シト〳〵歩む足音を聞いた。ユリアヌは彼の頭を擧げたが、其處にはデナが座つて居るのを見た。彼女は其の穴の上にずつと身體を屈め、頸卷が中に垂れる樣にして覗いて居た。

彼女の小さい目は星の樣に輝いてゐたが、彼女はそれからチーズの二三を取り出すとそれを其の土官の前に投げ出した。

ユリアヌは彼女に向つて、『おまへは、何故、昨日此處に來なかつたか、私はお前に上げやうと思つて二、三の玩具を拵えて置いたヨ、そら此れだ。下から投げ上げるから、それお取りヨ』と、いひつゝ、一つづつ投げ上げたが、娘は頭を振つて、夫れに手を觸れやうとしなかつた。

『イエ、私は人形はいらない』娘はさういつて、何か一生懸命に考へて居る樣に見えたが、ふと『あの人達はお前を殺さんとして居るヨ』、叫びながら手眞似で、人の喉を切り裂くやうな形ちをして見せた。で、ユリアヌは問ふた。『誰が私を殺さうとするのかい』

『私のお父さんヨ。あの老人がそうしろと命令したのでネ――私は悲しくて仕樣が無い』

『ア、さうか、もしお前が私を可哀想だと思ふなら長い棒を一本持つて來てくれないか』

娘はそれはとても出來ないと云つた。ユリアヌは彼の手を合せて拜む樣な恰好をして、

『私はお前にお願ひする。どうか長い棒を一本持つて來てくれ』

『それは迚も駄目よ。内の人達が家の中で、ちやんと見張つて居るからネ』と云ひつゝ娘は行つて仕舞つた。

ユリアヌは最後の運命に想到せざるを得なかつた。

『全體俺れはどうすればよいのだらう』と獨言ちつゝ頭を上げて空を見上げたが、空は靜かに且つ澄みきつて、星が既に少しく光を表はし、月は未だ昇つて居なかつた。村の僧侶共は、今敎壇に登つて祈禱を初めたらしい。

或日の新聞から

笠神志都延
（京城日報社）

近來ヨーロッパ人の間に圍碁熱が盛んになつたが、今度ベルリン高等學校の數學教授デューボール博士が大倉喜七郎男の招聘で來朝することとなつた。日本もハラキリ、フジヤマ、キモノ等々の次ぎにゴが名物になる。麻雀黨あはて〻本因坊ツて鞍馬山のアレかい。

×

日米妥協成立說につき若槻全權は十五日左のごとく語つた。

日米兩國間でまだ成立したといふものではない、しかし兩國とも納得のゆく點が見付かるなら兩國が異つた主張を闘はすよりはかうしたらといふことになるかも知れぬ、當初の時よりは數字が近づいたからこれならば妥協するだらうと考へる人が世間にあるかも知れぬが、いまだ成立はしてゐない。まだ定まらぬ部分もあるから今後も交渉するそれについてリード、松平全權の會談で話をすることもあらうしスチムソン氏と私との間で話すこともあらう。

けだし新聞記者に對する名答辯の一だ。

×

トランスネプシュニアン遊星が發見された。地球からは一時間速力百廿哩の飛行機で三千五百年の遠方にある。スピード萬能論者、これを聞いておもはずガタ〳〵ふるへ出す。

×

・三浦環女史は今ニューヨークに居る。同伴者のフランケッチー氏は最近若い女弟子と結婚した。女史はこれで夫君を失つた外に同伴者を失つたわけであるが御方便なことには更に最近伯爵と稱する若いイタリー人が女史の同伴者の位置に居る。コーツと、女史は一たいいくつだつたかナ。

×

都城歩兵第×聯隊歩兵少尉川原喜一郎は×日午後二時すぎ自宅に於て豫て病氣中の妻及び隣家の同期生なる同聯隊の歩兵少尉吉田三郎の兩人をピストルを以て射殺即死せしめ、軈て川原もピストル自殺を遂げた……原因目下取調中。

×

パステル畫家として世界的に有名な矢崎千代二畫伯は家を賣り拂ひ娘の手を引いてブラジル行の三等船客中に變名で納まつて居た。變名でコツソリ出掛けるといつても別に深い意味はありません、といひながら。

×

京都知恩院善導大師大法要のラヂオ放送は大成功を收めた。それは山下老管長が親しくお十念を授ける放送があつたからである。管長は今年九十九歳になられた。

×

變態性慾研究畫家としてまた舞臺裝置や大衆讀み物挿畫畫家として知られてゐる。伊藤晴雨氏の留置は例の趣味から畫を描き『論語通解』と題する廿ページの美しいものを印刷し販賣して居たことが當局に知れたためである。

【三八】

峰岸清之氏主宰
拓務評論
事務所　京城府
南米倉町二〇五

◈將棋風聞記

三木一彦

○橋本豊太郎氏は、いつ會つても、ニコ〳〵してゐるお方だが、將棋となると、一層面白い。

○勝つた時に喜ぶばかりぢやない。負けた時にも大恐悦……。心から、大聲を出して笑ふ。

○橋本氏と同じ型の人は、西本願寺の清谷師だ。この人も、自分の勝に笑ふばかりぢやない。負にシン底から喜び笑ふ。

○『ウワーッ、其所〳〵、いたい！、詰んだ！、王の行きどこがない。ウマクやられましたナー』そして思ひ切つて、嬉しさうに笑ふ。

○時々、この御兩所が、一緒に落合ふことがある。双方ニヤリ……もう盤を中にして、陣どつて御座る。そして一手々々に笑ふ。双方で笑ふ。負けず劣らず喜ぶ。

○子供等は、何事かと覗きに來る。近處の子供まで來る。しまいには、おかみさん達が、『何ンテうれしさうなお聲でせう！、どれ私にも一寸覗かせて下さい』、見世物と間違へてゐる。

まいが夏は釣る多は滑る、なすことすること凡て水に緣ある事ばかりでこゝ二三年は暮れてしまつた

京取十年

京取十年

失業者の手記

岡部駿策

工藤と云ふ男が居た。京城にも取引所らしいものが出來るので入社することにし度い、貴公も是非參加して欲しいと云ふ。俺は本來株式會社の取引所は餘り好かないんだ、それに俺等のなすべきことは設立後當分の間で會社は潰れぬでもその中お拂箱になるだらう地位の安固なんぞは望めないだらうと答へた。貴公がいやなら俺一人ではねえと彼は躊躇して居た。それから創立委員長と云ふ人にも會つた。そして事は僕の使はれて居る所の理事者府の問題となつてやつと取引が成立して僕は工藤の希望通り相棒を勤める事となつた。大正九年四五月の頃である。

開場の頃にはぽつ〳〵人も採用されて十人ばかりも居たらうか、寄合世帶ではあつた、色の生白い優男も居れば虎髯を扱く荒武者も居る頭の禿げた長老も居れば美少年も居た。氣持のよい仲間であつた。

仕事はその頃いくらでもあつたが肝腎の取引は期待を裏切つた、世間の噂もやかましかつた僕等も無能ぶりを非難された。困つた事だと思つた事が一再ならずある。

その翌年のたしか二月も半頃からであつたと思ふ、相場はただならぬ樣子で動き出した。中間景氣の先驅といふ奴だつた。此潮先に乘る積りではなかつたのだが丁度その頃出來合はした姉妹會社でもつてその筋の目を掠めて萬年取引をやらしたものだから堪らない、取引は物凄い勢で燃えさかつた。何か魔術を使つたのだらうと世にも不思議な質問を受けた實話が殘つて居る。が有體に云つて十全の功を收め得なかつた、己を得ざる中にも失敗は失敗であつた。

何時の間にやら人は四五十人に殖えて居た。東京から吉川といふ支配人が來た。危難を救ふべく聘せられたのであらう。會つて見ると豐頰無髯の木强漢でニベも愛想もないが膽度があつて一週間もたゝぬ中に一切を呑み込んで知らぬ顏をして居る所實に偉いと思はれた。さすがに二十年も東洋一の大取引所の飯を食つた男だと首肯せられた。が何故にか村の空氣は彼に對して冷たかつたやうだつた、彼を容れるには餘りに小さかつたのだらうと思ふ。彼も孤々として樂しむ所がなかつた、彼は狂瀾を既倒にかへすべく遙々やつて來たのだが潔く去つた、そして流浪落魄の身となつた。

それから又僕を誘つた工藤も僕を殘して去つた。これも市井に放浪した。その他幾多の人々が去つた、入る者はなくてハミ出される者ばかりであつた。僕も亦命のいたるを豫期して居たが知らぬ顏をして根が水商賣と云ふ諺でもあるまいが夏は釣る冬は滑る、なすことすること凡て水に緣ある事ばかりでこゝ二三年は暮れてしまつたそうして他の四名の僚友と共にハミ出された。十年目である。

サラリーメンのゴールは失業に極つて居るんだから今更ら驚くにも及ばないが覺えた釣では飯が食へず、スケートと來ては腹が減るばかりのものだ。ハテどうする。

好漢吉川は流浪幾年人もその存在どころかその氏名をすら忘れ果てた頃拾ひ上げられて元の古巢に納まつた。工藤は轗軻不遇さすらひ通しで今に至るまで安定を得て居ないが、聞けば近々間島に移住して『胡服を纏ひ荞麥を喰ふ』さうである、『疲れては眠り時に佛を拜する』さうであるが荞麥でも喰ふことになる迄何年かゝつたことだらう、僕も茲に兩先輩の後塵を拜する段となつて世は春ながらうたた秋風の落莫たるものあるを感ずる次第だ。工藤に會つたら彼の失業訓を詳かに拜承し度いと思つて居るがまだ來ない。上野の花でも見てから立つのだらう。

◈畫壇評判記

三木一彦

○洋行すると、碁でも、將棋でも、弱くなつてもどる。

○獨り山田新一氏だけは、斷然强くなつて戻つた。

○『えらいですネー』といふと御本尊一寸首を縮てめ『ウフッ』

○强くなる筈です。いくらアッチの連中でも——エヘン、我山田氏よりは——エヘン々々々——世界中が、お師匠さんですからネ。

【三九】

風俗研究資料としての川柳

今村鞆

古川柳は、德川幕府時代の風俗を研究する上に於て好個の資料である。

茲に其の例示としての數句を出して、解釋して見よふ。

△はきなれぬ足袋を棧敷へ置き忘れ

吉原の花魁が、芝居を見に行つた花魁としては外出は禁じられてあるから、素人の風で行つた。はきなれぬ足袋をじやまにして、棧敷では密かに脱いで置いたのをウツカリと忘れたのである。花魁は始終素足で居て、足の美を誇りにして居た。道中の時などは、其スバラシイ奇麗な足で、幾多の遊子をチヤームしたものである。今のモガとは違ひ、足先丈けで、止どめた所に昔の女の奥床しさがある。

△醫者に手を右から見せる女形

昔しの醫者は、病人の脈を取る時に、女ならば右から、男ならば左から先きにみたものである。今日でも、淺田宗伯氏の如き漢法醫は嚴に此法を守つて居る。此句は、役者の女形が、女の氣分になり切つて居る心持をよんだのである。

田之助の如きは、血の道が起つたと云つて、寐て居た事もあり、其藝道に熱心なるを稱へられて居るが、實は役者の女形には、精神的半陰陽の變生男子が多かつたのである。

△孝行な娘我身を煎じさせ

父親が重病である。醫者は朝鮮人蔘を飲ませたら癒ると云ふが、中々高價で藥價が辨じ切れぬ。娘が私が勤めに出ますと云つて、娼妓となる。斯る悲劇が隨分とあつた不埒なる醫者は、人の弱身に付け込んで、ニセ物の人蔘などを使つて、ボロク儲ふけたのである。今の醫者が一色でよい所を、水藥も粉藥も丸藥も、飲ませるよりは、余ッ程惡ラッであつた。

△借り物で店へ後光が二日さし

日本國民は、『御祭騒ぎ』と云ふ特殊の熱孚がある程に、昔しから御祭好きである。此句は神田明神のお祭りの時に、金屏風を損料で借りて來て花やかに飾り立てたのを云つたのだ。金屏風を立てぬは家の恥の如く思ひ、間口の小さい商人でも、皆立てたものである。此お祭りの爲に、江戸ッ兒は質を置いたり、娘を女郎に賣つたものである。

△すわ鎌倉と股引が五六人

いかにイヤナ亭主でも、いかに虐待を受けよふとも、一旦緣付いた以上は、夫とから三下り半の薄墨で書いた、離緣狀を貰はぬ限り、夫婦の緣を切る事が出來なかつた昔は、先づ麻布の緣切り榎へ、丙々願をかける。夫れでも利益の無い時に、鎌倉は松ケ岡の、緣切寺と云ふへ駈け込んで尼となり、三年行ひを濟ますと、立派に緣が切れると云ふ、便法があつた。此の寺は治外法權の如きもので、誰も干渉が出來なかつた。

股引五六人は追ッ手のことである。

△燈籠が消へて幽靈あらはれる

吉原の秋の行事の燈籠がすんだ後八朔には、おいらんが白無垢を着して道中した。『八朔の雪物さしで積つて居』と、毎年新調したものである。

此句は、右の意味の外に、燈籠大臣と稱せられた、小松内大臣重盛が、薨じて後に、福原御殿へ、源氏の亡靈が現はれて、清盛を惱ました事を言つたのだ。

△むだと言ひ〳〵鐵醬をまたぐなり

女の齒に付けるオハグロは、男に跨いで貰ふと、よく色が出ると云つた。其の跨ぐと云ふ事は、略式で本とふの意味は、男の魂を其の液体面に映らせねばならぬのであるから、ムダを言ひ〳〵と云ふ意味が、よく判るのである。『オハグロの禮に見せろといやがらせ』と云ふ句を見れば、一層に明瞭する。

何故に斯かる事が行はれ、はじまつたと云ふ詮索になると、土俗學上大に趣味のある問題であり、數十頁を要するが茲にはホンの簡單に述ぶれば、元オハグロは、女の元服式につけたもので、女が全くの女となつた潮紅が現はれるのは、胸の火焔地獄に蛇が棲んだ證據で、其蛇を驅逐する爲めとの宮中にオンソヒブシ云ふ元服式があり、又民間の褌のカキ初め、之れは母方から、紅色の木綿を贈

◇明砂濱別莊

くの女となつた潮紅が現はれるのは、胸の火焔地獄に蛇が棲んだ證據で、其蛇を厭勝する爲めだとの言ひ傳へがあるが、昔は男女共、元服と云ふ事は、必ず立派に人間としての通用の出來ると云ふ事の儀式が必用であつた。

宮中にオンソヒブシ云ふ元服式があり、又民間の褌のカキ初め、之れは母方から、紅色の木綿を贈るのが本式であつた。

彼是を參照すれば、此句のムダを言ひ〳〵が、決してムダで無い事が、ハッキリと會得せらるゝ。

名案

難波留三郎

（本町難波醸造場）

名案とは、或る行き詰つた局面に際し、これをウマク切り拔け、しかも禍を轉じて福となす工夫をいふのであらう。

しかも、名案にも種類はある。政治家の名案、國家の安危を擔ふ軍人の名案——巫山戯たところでは、鼻下長氏から、如何にしてウマク武内宿禰を搾取すべきやといふ美人諸君の名案など——。

丁度現在は、萬事節約緊縮の世の中で、主婦の名案、機轉に依つてのみ家々の浪費は救はれる。大きくいへば、今は家々貧しうして良妻（名妻）出づべき時であらう

尤も名案にも種類があつて、或る家では、奥樣の發案に依つて、主人晩酌三本の掟のところ、これを斷然一本に減らした。勇敢なる決斷であつた。ところが主人は、それでは一日の過勞が回復出來ず翌日の働く勇氣さへも頓に銷沈して、仕事上の能率大に減退！。差引すると結局三本の方が『得』といふことが判つた。名案もヘタに間誤づくと『迷案』に陷り易いのである。

これは、聊か我田引水の嫌ひもありますが、先年から我國でもメートル法を施行せられた。だが、多年に渡る何尺何寸思想、何升何合慣習は、トテモ容易に人々の頭に入らない。私は、これをドウしてたやすく人々の頭に入れるか。入れると同時に、私自ら大に商圏を擴張すべきか——空ッポの頭を散々ヒネつて、案出したのが、新釀酒『リットル』であります。これは、瓶入二リットル——一寸見ると一升入に酷似してゐますが、實際は一升一合入——即ち二リットル入であります。しかも內容を極力精選しましたから、お蔭樣でドシ〳〵歡迎され、加ふるに到るところで、『あれは結構だ、アノ罐をヒネつてゐると、ヒトリでにリットルの要領が判る』と申されます——一擧兩得——これが私近來の名案で御座います。

◇明砂濱別莊

北漢山人

○元山の南一里のところに、美しい海濱がある。昔、朝鮮の詩人は、『明沙十里』といふて、その海の美、白沙の美を讃へたのである。

○今では、明砂ケ濱といふてゐる。その地域三十町歩——海汀約二十町——ソレを、會員組織で手に入れ、コヽに總數六十戸の文化村を作らうといふ計畫がある。

○話の筋だけを、ハシ折つて書くと、この倶樂部は、會員六十名を以て組織し、各自が三百五十圓を出資し、それに依つて前記の地所を買取し、コヽに理想的な海水浴場を設備し、且つ會員は、割當テ（抽籤）られた場所に、好みの別莊を作る——といふ事になる。

○詳しいことは、發起人總代の元山仲町愛媛旅館主に、照會して頂くとして、場所がいゝのと、思ひつきが面白いので大變な評判續々申込があるらしい。本誌讀者にも、一應お勸めいたします。

× ×

○平壤の警察署長は、佐藤氏といふて、ズーッと以前、本町署にゐたことがある。

○最近京城から同地へ行つた人同署長を訪ふて、『御當地も、大分多事のやうですネ』いふと『左樣、困つたものです。だが、これア皆京城の眞似ぢやないでせうか或る種の事件屋といふ風のものがゐて、突ッついては事を起し、事が始まると、白らッパクれて、仲裁をする。年中これを繰り返す。元祖は、どうも京城らしい』

○で相顧みて、フフッと苦笑。

易の新境地

『母の會』に招かれて

岡村介石
（明治町小唄阪）

唯今御紹介に預りました、小唄阪の岡村介石で御座います。賢明なる御夫人方に依つて、組織されてゐる本會名は、豫て高久樣の奥さまから伺ひまして、此時弊の多い現代に於て飽食暖衣に甘んぜず進んで各方面の善智識を求めて、其家のために、其兒等の將來の爲めに、善處する智料を得やうと遊ばす、本會の御主意は、洵に意義あることじやと、かね〳〵窃に感心致して居りました。その有意義な御集りの席に、本日私が召出されましたことは至極光榮に存じます。

併し私が賢明なる皆樣の御期待になるサムシングに對して、果して克く當テ篏ることを申上げ得ますか如何？、之は頗る疑問で御座いますが、兎に角茲に掲げました標題に就きまして、所信を述べることに致しました。

尙私が本會の會員たる皆樣に對する所感は、皆樣は充分素養のお在りになる方ばかり、從來の歴史や宗教や儒教や東西立志傳的修養談は、御自分でもお讀みになり博く見聞してお出でゝ御座います、尋常の話では喰ひたらんお方、言はばゼイタクな方であるから、一番古今東西に前例の無い、世界の新哲學の概要をお話して、人智以上に神智と云ふものゝあることを知つて頂き、以つて自然と人間の關係と人間行動の正邪得失に關する、新しい批判的定規を一本進呈致したいと存じます。就きましては少し難解の節々も御座いましやうと存じます、その點は少し辛抱して御傾聽を願ひます。

× ×

私の易學研究に携はりました動機と、その理由に就きまして、お話申上げます。

只今御集いの奥樣方の内には、私の經歴に就て御存じのお方が御出でゝ御座いますが、私は元平壤の平安農工銀行時代の職員で御座いまして、大正の初年頃寧邊の支店を預つて居りました。その名の如く全行本來の使命が、地方の産業開發に資することが目的で、主として農家に資金の融通をして居りました。その關係から、天候不良の年は、凶作其他イロ〳〵の事故發生の爲めに、貸金の回收が豫定の如く參りませんので、勢ひ手許資金の運用に狂ひを來しまして不便な地では御座いますし、人知れず苦惱致しました。その苦し紛れに、空を仰いで天候の無情を恨んだり、或は人智の不甲斐なさを託つたり、イロ〳〵愚痴なことを繰返して考へます裡に、何時か考への方向が變化して、天候と農作物の關係が、直接間接人間生活に及ぼす影響を、博く社會國家の上から、研究的の考察する氣になりまして、先きの愚痴が變じて興味となり。夫れからそれと段々古今の事例に徴して考へますと、『人間生活と天候』ほど、密接にして廣大な關係あるものは稀で、古來人間の生存苦の中で、人事問題は別として、暴風雨、洪水、旱魃がその最大位を占め、これ等不良の天候が、古今人間の生活に及ぼした被害は、到底人間の算盤では計算仕切れぬものがあります。

現今のやうに自然力に耐抗する科學的智識の發達した時代でさえ日本だけで毎年、約二億圓の損害を蒙ると云はれてゐます。現に二月廿日の新聞の昨年度に於ける海難事故に就て、日本の船舶保險業者が蒙つた船舶の保險金が一千萬圓で、積荷に對する保險會社の損害を合計すると、約五千萬圓に達する見込で、それでも其前年則ち昭和三年の支拂金に比較すれば、百六十三萬圓を減じると悦んでゐる位であります。

若し以上の數を以つて、世界中が蒙る總損害を計算したら、毎年何十億圓の被害になりますか、實に莫大な金額に上るでありましやう。加ふるに貴重なる人命の喪失は計算外に措かれてゐます。

而してこの被害は、今後幾年すれば止むと云ふ果てしが無く、年々歳々被害した年を送つては、又新たに被害する新年を、しかも紋付袴の正裝で、お芽出度歡迎すると云ふのは、何んたる矛盾した人生でありましやう？

由來人間は人間の未生時代に溯つて考へますと、人間は人間同士の陰陽交際に依つて、人間が人間を生産したのではなくて、地球自

體が自然に存在する副作用上、人間が生れ出る當然の理を自生したものであつて、未だ曾つて吾々人類が、地球の母體に向つて、吾々の產出を要求した何等の證蹟は無いのに、自然は吾々の生產を余儀なくして、そうして吾々の本能に對してその與へられた生命を後生大事に惜むべく、深刻な執着心を持たせて、生命安全を人生第一のモットーとするに到らしめ、偖て吾々がその本能慾を持つて、實際生活に臨んで見ると、この年々歲々人力不可抗力の天災を發して、原始人類このかた、六十萬年の間不斷にこの生存苦を嘗めさすと云ふのは、公平にして博愛なるべき天地自然の所業としては、天とう樣も聞えませんと、大井川の渡場で、朝顏が恨んだのも道理で餘りに大なる矛盾と云はねばなりません。ケレドモ之を告訴する高等法院が、地球上に無いので、如何とも仕方が御座いません。

併し飛行船が愈々發達して十方空中を飛行して居ります內には、或る宇宙の何處に、宇宙最高法院と云つた、看板を發見するかも知れません。そして地球から居ながらラヂオで、訴訟するやうになるかも知れません。が、それは何萬年後のことか迚も吾々の生存中には間に合いますまい。

空想談は後日に讓りまして、若し茲にこの必然的被害性をもつ不良の天候則ち暴風雨又は旱魃が襲來することを、避難し得らるゝ日數の餘裕を措いて、確實に豫知することの出來る學術があつて、毎年世界が蒙る損害の百分の一でも免かるゝことが出來たら、この位人間の生活に寄與する、貴重にして高價な學術はあるまい、と斯う私は考へまして、夫れからその不良の天候を豫知する方法の發見方に就て、何を基礎とするが可いかイロ〳〵考へました時、既に測候所は存在したのでありますが、當時測候所の成績に就きましては世間既に定評がありまして、仮へ一日二日先きの天候が判るとしても夫れでは、到底大量の物の避難を完了する餘裕が、無く利用の節圍が極めて狹い嫌いがあります。

然るに易學は、本來未發の將來事を豫知することを本領とする哲學であるから、この易學が持つ、眞理の實際作用を確めて見たら、或は新しい應用眞理を、發見するかも知れんと思ひ付いたのであります。

併し銀行家でありました私が、苟も世界の哲學中最も難解な易學から、新しく天候豫知法を發見しやう、など〻思ひ付くことは、突飛の甚しいもの〻やうでありますが、當時私は易學に深い趣味を持ちまして、研究かた〴〵人の身の上を占つたり、時には國家社會の問題も筮してゐたのであります。

茲に、二三の實例を申しますと彼の孫逸仙一派が、清朝を倒して第一革命を成功しまして、民國第一次大總統を選擧することになりました當時、或日曜に宅で同僚の謠ひ會を催した揚句、時事談に移りまして、偶々支那の大總統には

近詠

木本滴翠

（朝鮮銀行）

次若槻克堂公詩韻

胸中夙識機略藏。也拜皇恩萬里航。
欲使五洲無戰伐。好應中外仗文章。
壯心笑見空濤濶。意氣何論客路長。
公出國時吾槿域。離筵獨恨不移觴。

寄懷克堂全權在英京

東風三月艶陽天。萬朶櫻雲眞欲燃。
花信遙傳龍動夕。詩魂應到墨堤邊。

翠雲畫伯邸雅筵席上分韻得侵

的皪梅花月影臨。雅筵今夜値千金。
漸吾六十又加二。何日優游翰墨林。

次全畫伯越後客中詩

千里江山一望賒。瓊樓玉樹暮雲加。
故人携去入神筆。描出玲瓏北越花。

京城雜筆

誰が當選するかと云ふ豫想談から遂に友人の勸めで、當時噂に上つた所りました、五人の名を擧げて一筮して見ますと、袁世凱に一番宜しい易が出ましたので、袁世凱が當選するであらうと豫言しましたが、素人の易でも馬鹿にならぬもので、結局袁世凱が當選致しました。

その後寧邊へ轉任致しまして、大正三年の一月二日の早朝、事始めに、當年の國運を筮して見ますと、天水訟と申して國運に取つては甚だ不穩の易が出ましたので、當時の公衆新年宴會席上で『本年は日本の國運に取つて、極めて不穩の年である、就中下年期に入り帝國より西、即ち支那方面に事件發生して、出兵することゝなる。但し生克の理から考へると日本の勝利には疑ひ無い、と豫言致しましたが、その年の八月歐州戰爭が突發致しまして、日本は八月廿三日日獨國交斷絶したので、靑島を攻略する爲めに出兵して、十一月七日靑島を占領致しました、これで一月二日の易は的中した譯であります。

その後私は『歐州戰爭の勝敗と休戰期を筮しまして、結局連合軍の勝利で、滿四年かゝると云ふ判斷を得まして、京日の社長阿部充家さんに其趣を豫言して置きましたが、矢張滿四年と三ヶ月間の大正七年十一月聯合軍の勝利で休戰になりました。當時の京城日報に私の豫言が的中した記事が出まして褒められたことが御座います。阿部さんの御話に依ると歐州大戰に就ては世界から百數十の豫言が出たが、英國のキッチナー元帥が二年かゝると豫言されたのが一番長いので、他は皆數ヶ月で濟むと云ふので一つも的中したものは無いから、君のが世界一の豫言だと云ふ事でありました。この歐州戰爭の結末を見た頃は、既に私は京城に出て易者として多少存在を認められて居たのでありまして易學研究の最初の動機には關係ありません。

私が易學の眞理を應用して天候の豫知法を發見しやうと、着想しましたのは、以上の袁世凱の易と支那に出兵すると判じた、この二つの易斷が的中したことから、易といふものは小さな人事的問題を占ふことよりも、國家社會的の大事件を占ふ方が、易學自體の含蓄してゐる眞理の作用を、ヨリ充分に發揮さすものであることを認めましたので、然らば研究資料の乏しい素人研究をするよりも、寧ろ進んで易者になり、人事と共に國家社會の問題を筮して、博く易理の活作用を確めた方が、目的達成の捷徑であると考へまして、大正三年の秋十月京城に引越し、氣恥かしい易者といふ、權威の無い看板を揭げて、謠曲も俳句も苟くも時間を徒費する一切の娯樂を廢してアノ小唄阪の茅屋に立籠り、易の皮をムシッテ嚙むやうに、仔細に研究しました結果、易の母體から、大氣作用則ち自然現象を豫知する眞理を分娩させまして、大氣學と名づけ、滿八年と五ヶ月目に世界空前の豫知法を、確實に發見したのであります。但し私が世界空前の豫知法など、申すのは、私一人よがりの誇張では御座いません。未だ世界の學術界に向つて、正式の論文は發表して居りませんが、この學術の能力に就きましては凡そ八年間に數十度、新聞その他に豫言を發表し、充分の成績を事實が證明して居りますから、臆面もなく申上るので御座います。

（以下次號）

◈江湖風聞記

三木一彥

○京城師範の河野教諭は、マダ例の孫一峰君が、同校の二年生位で、自分にも繪畫の天分を悟らない時分、『どうも君は、その天分があるらしい。一つ氣張つて見給へ』といふワケで、誰よりも先きに、孫君の才分を發見したといはれてゐる。

○さういふワケで、繪畫の鑑識は、殆ど直覺的、獨創的で、他人の贋物扱ひにするものゝ中から、立派なホン物を見つけるのが得意現に無數の藏幅があるが、いづれも一粒選りの逸品ださうな。

○この人劍道三段である。

× ×

○本町に三好野といふ喫茶店が三軒ある。これは、五丁目の三好野のあるじのことである。

○主人公基督教の信者で、救世軍に入り、毎晩同僚と街の辻々に立つて、主イエスの道を宣傳する

○『あゝ神よ、かの酒を飲むものは、地獄に墮ちるもので御座います。どうぞ〳〵主の御力を持ちまして……』、スルト群衆中に、ウフッと笑ふものあり。『あれア三好野のおやぢぢやないか。三好野でも、酒を賣つてゐぞ』……主人公悲痛な聲、『あゝ神樣……ウーン』

暮迫る路を急けとはかとらぬうし

二年かゝると豫言されたのが一番長いので、他は皆數ケ月で濟むと立派なホン物を見つけるのが得意現に無數の藏幅があるが、いづれ人公悲痛な聲、『あゝ神樣……ウーン』

やまと歌

國風會京城支部

草漸青

○　安東貞一郎
雪消えていくほとも經ぬ春の野の一夜の雨に靑む若草

○　今村　雲嶺
春風に野邊の白雪あと絶えてもゆる芝くさあさみとりなる

○　安東都天子
萠え出てし庭の小草の淺みとりはる雨ことに色まさりゆく

○　佐々木杏造
里の子かやきたる岡も春の來てみとりのむしろしきそめにけり

○　中島　貞信
花のころ宴しつへきむしろにとみ園みとりに草のもゆらん

○　清水　正德
春くれはまたらにのこる雪間より見えそめにけり野邊の若草

○　田中秀一郎
いつしかも東風ふきそめて春の野はあさみどりにもなりにけるかな

○　西田　明松
谷間には雪の殘れと日あたりの庭の小くさはやゝあをみけり

○　工藤　武城
昨日こそ雪はとけしか野邊見れはくさのみとりの色まさりゆく

○　野田　新吾
春風の長閑にわたる丘の上にみとりのをくさ萠えそめにけり

○　淺井佐一郎
見渡せばいつくもおなし春めきて野邊の小草はみとりそめけり

○　松寺　竹雄
はるの色は池の面にもうかみけり汀のくさの淺みとりして

○　足立丈次郎
いつしかも雪は消えつゝ庭さきのしは生に春の色そ見えける

牛

○　丈次郎
後れてはまた走りつゝ親牛にそひて犢の野みちゆくなり

○　竹雄
童へか吹く笛の音につれられてしつかに牛の野路かへりゆく

○　佐一郎
鼻の緒をまたさゝぬ間は世の中を牛もうしとはおもはさるらん

○　新吾
手綱とるをさな童にひかれつゝ重荷をはこふ牛のおたしさ

○　武城
おろかなるさかに生れしわれなれはとき駒よりも牛をまなはん

○　明松
心せよつまつくことのある世なりうしの歩みのよし遲くとも

○　鐘太郎
暮迫る路を急けとはかとらぬうしの歩みのもとかしきかな

○　秀一郎
うましちを人にのませていさゝかもほこり顔せぬ牛そたふとき

○　正德
死にあとに皮をとゝむる虎よりも牛こそ世には功あるなれ

○　貞信
かなし子に日こと與ふる乳をしもおもへは牛のうとまれぬかな

○　雲嶺
を車の矢よりもはやく馳する世に似けなきものはうしのおそあし

○　貞一郎
童等か吹く草笛を聞き分けて牛は家路に歸る夕暮

餘寒

○　貞一郎
多のまゝ厚き氷に鎖されて彌生も寒き鴨綠の川

○　雲嶺
春來ぬと聞きしに多やのこるらんあき風さむくいとゝ身にしむ

○　都天子
春なれとなほ白雪のとけやらて寒さは多にかはらさりけり

○　杏造
昨日まて野山の霞なかめにし窓も寒さにとさしけるかな

○　貞信
鶯は谷の古巣や戀ひなましかせまた冴ゆる如月のそら

○　正德
梅も散り鶯さへも鳴つるを又冴え返るけふの寒さよ

○　秀一郎
梅か香にこゝろうこけと風寒み火桶かもとをはなれかねつゝ

○　鐘太郎
うめか枝に花はさけとも鶯はのこる寒さに聲澁ふるらん

○　明　松

梅を見に杖を曳かんとおもへとも
風また寒しきさらきの空

○　武　城

伊勢暦春とつくれと空にまた寒さ
殘りて火桶戀しも

○　佐一郎

高麗の野は風なほ寒しきさらきの
はるの月夜もかすみかねつゝ

○　竹　雄

【四六】

萌え出てし草のひあへす春の野は
ゆきけの風のまた寒くして

○　丈次郎

田の面吹く風さえわたり賤の男も
かへり路いそ〳〵春の夕くれ

棋界特信

交詢社雜記

鐵假面

○交詢社の將棋番附を逆さにすると、誰が見ても大關の地位が動かぬのは高木得三氏と池田五六氏である。

○兩氏は極めて將棋が好きだ。如何なる日でも、五六番宛必ず指す。そして、日曜でも休まない。會社は休みでも、交詢社へは年中休みなしに出勤して、對局する。偉い熱度である。

○それだけ熱心に指せば、將棋の上達するのが、當然の順序ではあるが、どう云ふものか、此御兩所には其形跡が見えない。何時見ても面白い形の將棋を指して居る尤も、嚴格に試驗したならば、御兩所とて幾分將棋が上達して居るのかも知れない。だが、それを試驗する方法がないから、わからない。御兩所は、他の人とは指さない。長嶋鷲太郎、日向利兵衞の兩氏とは指すが、それ以外の人とは絶對に指さない。此の四氏が、年中、ぐる〳〵廻りで指して居るだけだから、上つたのか、下つたのか、傍から見ては、見當が付かないのである。

○無論、將棋はそれでいゝ。慰みに指すのだから、厭な人と指すに及ばない。高木氏は

『上手の者と指すと、馬鹿にされて居るようでね……』

と云つて居るが、それは同感だ。こつちは飛車角で攻めて居るのに先方は歩であしらひ、それでもこつちが負けるのだから、遣り切れない。本當に馬鹿にされて居るような氣がする。私なども上手と指すのは大嫌ひだが、未だ御兩所ほど徹底して居ないので、時々强い奴と指して、馬鹿を見る。斷然高木池田宗に改むべきだ。

○高山長幸、藤野正年、酒井靜雄の三氏も、池田、高木兩氏に似た所がある。然し、私同樣未だ兩氏ほど徹底して居ない。時々他の者と指して、ギュー〳〵云はされて居る。修榮と云へばそれまでだが、娯樂と云ふ方から見れば、詰らぬ事だ。將棋は矢張り似た者同志で樂んだ方がいゝ。所謂合ひ將棋と云ふ奴が面白いのである。

○序に交詢社の合ひ將棋を擧げて見よう。

三井　高精—對—高久　馨
藤原銀次郎—對—加藤　定吉
津田　興二—對—田中　遜
石川　正平—對—菅原　傳
相澤　周介—對—安田興四郎
植村　傳助—對—石渡泰三郎
藤野　正年—對—酒井　靜雄
植村　金吾—對—太田亥十二
高木　得三—對—池田　五六
日向利兵衞—對—長島鷲太郎

外に一人山本昌一氏が居るが、是れは誰と合ひ將棋なのか、わからない。山本氏は將棋は弱いが、敵を怖れない。好んで强い者と指す藤原銀次郎、加藤定吉、高久馨、相澤周介氏など皆な氏の好敵手である。是等の連中に角一枚引かせて、氏は勇敢に戰ふ。そして、伸々負けない。形は悪いが、力は强い。時々相手をビックリさせるような妙手を指す。將棋の天分のある人である。

◈柳壇風聞記

三木一彦

○横山巷頭子といふと、御存知の川柳の大家。

○一面『川柳三昧』を編輯し、鮮かな編輯技術を見せてゐます。

○初對面の人は、頭に頭巾を想像し、アゴの下に、白いものを豫想しますが、どうして〳〵……御本尊は、まだやつと三十五六の、白面の好紳士です。

○大分長い間京取につるめ、內外共に評判がよかつたが、今度榮進して、會計課長といふやうな地位に就いた。

○おとなしい人……。しかし酒は强い。『オットもう澤山……この通り……イエこぼれます〳〵』などといへど、それは口の先……横山さんのホロッとしたところを一度でも見たいものだとは、誌友間の一致の願望……。

現代失業問題

保守的の國民性に由來するが、又ラスキンの『人と自然と共にあれば人も幸福であり自然も麗はしい

現代失業問題と機械文明觀

澁谷禮治
（朝鮮銀行）

我國では今や失業洪水に見舞はれ、朝野を擧げて之が對應處置に腐心しある狀態である。而して金解禁後產業合理化が頻りに唱へられ、各方面に於て之を實行すれば失業者は倍々增加することにもなり一種のジレンマに陷つてゐることも事實である。失業者は工業界方面ばかりでなく若し我國の農業が資本化され營利化され此處にも徹底的に合理化が行はれるとしたならば現在營農者の三分の二は失業者となり國家はどうにもならなくなると稱せられてゐる。一方智識階級の失業者が近年累增し、殊に最近學校卒業者の就職難と來たら洵に慘目なものである。而も之が緩和救濟といふ事については應急の手當も永遠の對策も未だに見出されぬ狀態であるから實以て寒心に耐へざる次第である。

元來失業問題の起因は其の國性にもよるが、機械の發明にあることはいふ迄もない。されば機械の發達は勞働者の側から見れば寧ろ厭ふべきもので英國のギルドソシアリズムの論者が此の意味から機械の進步を呪ひ、中世の組合的の生產方法を憧憬したのも無理ではないのである。此際歐米の先進國はこの機械の發達に對して如何に考へてゐるかといふ事に就て昨年十月東京で開催された萬國工業會議に出席した各國斯界の權威者の機械文明觀を紹介して見る。

先づ同會議出席英國代表中の首領株リチャード、ダブリユー、アレン氏の機械文明觀は

『……我々は驚くべき偉力を有する機械文化の恩惠に浴して原始人の夢想だにしなかつた今日の如き內容豐富な文化生活を享樂してゐる、將來生活上に於ける機械の働きが如何に複雜多岐に亘り、從て人類生活の內容が如何に豐富となるか、殆んど想像がつかぬ。然し三更へなき場合に獨り思を廻らす時斯うした機械づくめの慌しい能率本位の生活が果して眞の幸福を人生に齎らすかどうか。私は大に疑はざるを得ない。身に簡粗な衣を纏ひ鋤鍬を手にして終日自然を友として其の懷に抱かれてゐる田園人の原始的な生活こそ本當に人間に取つて最も價値のある生活であり、又理想の目標ではあるまいか、私の友人劍橋大學教授エヂングトン博士の話によると星の熱は攝氏四萬度の高度だといふ、人間の科學の力で生ずる熱の如きは到底比較も出來ない貧弱さである、考へて見ると人間は此の大宇宙に介在する一微生物に過ぎない。

と說いてゐる。如斯は英國傳來の保守的の國民性に由來するが、又ラスキンの『人と自然と共にあれば人も幸福であり自然も麗はしい人が自然を離れゝば離れるほど人の幸福は失はれ、自然美も湮滅する。人は自然に歸ることに因つてその幸福を回復する』といふ思想に胚胎するかは知らぬが、唯もう盲滅法に現代の機械文化をのみ趨はず、靜かに退いて其の歸趨を瞑想するが如きは强ちアングロメニアならずとも一種の奧ゆかしさを感ずる。

米國は何でも世界第一を目標に側目も振らずに猛進してゐる國であるが、同會議米國代表の一員たるマグナス、ダウリヴ、アレキサンダー氏は次の如くいふてゐる。

『機械文明國……米國の明日がどうなるかは誰も豫言出來ないが、兎に角米國は新しい歷史の尖端を行くものである。機械文化が生活程度を高めた結果米國はマテリアリズムと奢侈と贅澤に墮落するであらうと說く者がある。事實米國人一般は自働車ラヂオ、電話其他の生活品を享樂してゐる。併し一方に旅行によつて一般知識も擴大し、更に教育、藝術　文學と昔は生活に遂はれて親しむことの出來なかつた高度の文化に米國人を導きつゝある。かくて米國の機械文明は將來一部富裕階級ばかりでなく一般大衆をより完全なる文化的精神的生活に誘導するであらう。呪ふどころか吾人は之に感謝せねばならぬ』

以上は英米兩權威者の說くところである。然らば歐洲大陸にあつて世界大戰誘發者であつた獨逸は如何——事物の統制に卓越の頭腦を有し、大戰後に處して產業合理化

○無論、將棋はそれでいゝ。慰　外に一人山本宣一氏が居るが、是　間の一致の願望……。

京城雜筆

を徹底的に實行しつゝありといふ獨逸は如何——又其の憲法に『經濟生活の秩序は各人をして人間たるに價する生活を得せしむることを目的とし、正義の原則に適合することを要する。各人の經濟上の自由はこの限界内に於て保障せらる』と定規し、生存競爭の敗北者の最後の者と雖も『人間たるに價する生活』だけは保障されねばならぬとする獨逸國民の機械文明觀は如何？、之を同國代表にして獨逸工業聯合會長たるマッチョウス博士にきけば、

『ゲーテは謂つた、『機械は例へば雷のやうな自然現象に等しく人間の反抗出來ないものである、從て機械に對する人類の態度は之に順應して進化を迅速ならしめて行くか、それとも機械が嫌ならば歐洲を去つて遠方の地に千年前の太古の夢を趁ふより外にない』つまり機械には益生産を高める事と其結果生産品を益安くするといふ特徴があつて之は不可避的に機械の使用を强制するのである。この機械の性質は善でもなく、惡でもなく善惡を超越してゐるのである。乍然機械は多量生産といふ自己法則によつて生産消費の關係を轉倒せしめる。昔は消費するために生産したのが現在では生産する爲めに消費するやうになつた。その結果各國にけ其の生産量を受入るべき消費がないので競爭が激成される。ではこの機械文明の前途如何？、これこそ近き將來に於ける大問題であるが明答は出來ない。唯吾人は思ふ今後は機械の發達のみに重心を置くよりも寧ろ國民の文化的進歩の前途如何に力を入れなければならないと。即ち社會的緊張の調節を計る必要がある。英國の技術協會百年祭に當つて英國の技術家は斯う謂つた。『過去五十年間に英國の技術は素晴しく進歩したが、將來に於てはこれ程の進歩はしまい。併し一方文化的倫理的進歩は著しく促進されて機械の進歩と歩調を合するやうになるであらう』この言葉は世異各國の同感を得た。恐らく日本も之に對して異論はないであらう』と。

心頭語

愚仙學人（寄）

カフエーに行つて、美しい女給に一圓のチップを投げるを、何と思はぬ紳士、停車場で急ぎの荷物運びに、五十錢與ふるを、さも恩惠げに振舞ふ。

坊さんを招んで、三部經を十五錢で讀んで貰ふ御大家樣、妾宅に藝妓を集めて、一夜の賭博に三千圓を費して平氣である。

今代、人間界の價値といふものは、何處までも顚倒してゐる。

○

尊敬する人と對座して、自分の着衣扮裝の、少しでも勝れてゐるのに氣づくと、何とも知れぬ慚羞感に襲はれる、そして自ら生活内容を說明して見たいやうな、焦燥に胸のいら〳〵するのを覺える。

○

案山子に錦を着せたやうな、沐猴にして冠せしめられたやうな、自分の姿を凝視せずにはゐられぬ

○

『トンチンカンの興味』といふことを考へる。人事の百態は、餘り整ひすぎたのは情味薄く、さりとて餘り亂れ過ぎたのは、更に殺風景である。

○

蜜柑箱を踏臺として、高い浴槽に入る、左脚、底に達せずして右脚揚る、風呂の桶椽を摑んで、裸の馬乘り……。

然れども、大理石で固めて、水一滴あふれぬ完備した浴室よりも大に興がある。

○

果報に盡きる、冥加に餘まると子供の時から、こんな警語で戒められた、それが頭の奥底にへばり附いて、意外に惠まれた時は、必ず自省せしめられる。

○

生れて一ッも父や母から、そんな言葉も聞かされないで育つた人は、果して幸福だろうかと考へさゝれる。

汽車で求めた、茶の土瓶を新聞紙に包んで持ち歸る人、それは趣味としても節約としても、物質尊重としても、床かしことだ、驛辨を買つて、最後の一粒までも、美しく拾つて食ふ人を見ると拜みたくなる。

○

權勢に憬れ、利慾に走りて休憩を忘れてゐる、蜜蜂中の職蜂は、花より花に轉勞して蜜を集め、過勞の結果は、腦細胞の破壞となつて、自ら死期を早める。

○

人間も亦、蜂の生活に學ばねば急死するに相違ない。

對話『十分間』

久松前平
（京城日報社）

雜筆記者『三月號には是非とお約束をしたので頁をあけて居ましたら、無通告でその儘、よはりましたよ』

小生『やー、誠に恐縮を通り越して申譯がありません。昨日お出での節は來客ぜめで無禮でした。實際、固くお約束しましたが、その夜十三才の女の子が病氣しまして』

雜筆記者『オヤ〳〵、原稿お斷り病と云ふのが私の方には大流行でしてね』

小生『いや〳〵、御尤も千萬ですが、本當です眞實です。娘が腹を立ち割られまして』

雜筆記者『汽車で、電車で、自働車で?、御遭難ですか。でも新聞にはその頃そんな椿事はありませんでしたよ』

小生『君は原稿のことばかり考へて、一つも同情しないね。病氣でさ』

雜筆記者『へー、原稿排斥病もだん〳〵、進歩して來ますと云ふものですな。そウ二年越しですからね』

小生『二年越の病氣ぢやない。前夜まで平氣の平左工門で居つた奴が、その夜の四時（午前）に急に腹痛がして、それが普通の腹痛ぢやないらしい。夜があけると內科醫に診察して貰つたら、見當がつかぬのよ』

雜筆記者『へー〳〵』

小生『その翌日になつたら外科醫に早く見せて呉れと內科醫の注意だ』

雜筆記者『どうせ薄給取のかゝるお醫者なら、藪さんでせうからね』

小生『それから直ぐ外科醫に電話したら、十五分前に狩獵に出掛けた。今晩の十時過ぎでないと歸らぬとのこと……。內科醫は今日中に外科醫に見せねば駄目と再びの注意……。困りましたなあ……すると外科醫さんから汽車に乘り遲れて歸つたとの知らせ』

雜筆記者『地獄で佛とはこのことですな』

小生『委細を電話すると直ちに病院に連れて來いとのこと。病院で診察を受けると……即刻手術をする。宜しきや……承知、一切を一任します。宜しく……と氣丈に出たのです』

雜筆記者『オヤ〳〵眞劍らしいですな』

小生『特別手術室の準備、看護婦さん達の右往左往の準備、まるで戰時狀態です。『おかあさん、お父さん、側に居らんといかんよと悲しき聲を出す。子供は有無を云はせず手術室に運ばれる。ほの暗き電燈の病室に我々夫婦、弟等が不安の數時間を沈默する』

雜筆記者『手術に立ち會はないのですか』

小生『實は家內が滿月で、逆上されると困ると云ふ心配もあるし、醫者に任せた以上運を天に任せるといふ奴、やけくそも手傳つたのでせう』

雜筆記者『造るともなくつくつた子供でせうから、親なんて云つたつて所謂義務の要求に對しては知らぬ顏と云ふ薄情さなんでせうね』

小生『手術が終つて病室に運ばれた無事な子供の顏を見た時は、本當に泣きました。食鹽注射が始まる。外の注射が二時間おきにある。子供は『イタイ〳〵、注射はイヤ、自分の內に歸らう。おかあさん、おとうさん、歸つたらいかんよ』と叫び續ける。その時許りは骨をけづられる樣でした』

雜筆記者『アラヲ、本當ですね眞實ですね。創作ぢやないんですね。小說でもありませんね。本當ですね。ムウ……』

小生『その騷ぎに、自宅には老人と子供二人でせう。どんなにしてるだらう。手術を受けた子供の經過や如何に、家內のおなかは如何に……。いくら君だつて、文章にあらはし得ますか。原稿になし得ますか』

雜筆記者『御尤も〳〵、お察し申し上げます』

小生『その翌日、留守居中の七才の男兒が發熱、これまた入院』

雜筆記者『……』

小生『ところが、助ける神ありです。手術後の經過極めて良好。留守居も安全、七才も全快。十七日目の昨日退院。昨夜打ち揃つて平常通りの笑ひさゞめく眼かな食卓について、暗黑世界から光明世界へです。お喜び下さい。これも外科醫さんの優秀な賜です。』と同時にあなたは藪醫と批評されました。

人間も亦、蜂の生活に學ばねば急死するに相違ない。

京城雜筆

たが、內科醫の方が外科醫の領分と判明したのを直ちに患家に醫明して下さつた親切が今日あるのです。この內科醫さんが、若し職業的に出て居るならば、時期を失して取り返へしがつかなかつたでせう。物質本位のみに走る所謂現代醫師の中に斯かる仁醫の發見丈けでも愉快ではありませんか』

雜筆記者『へーゝ、お芽出度う御座います。で、病院なんて云ふ所は色々と不完備、不親切、お醫者さんの病人に對する心持と、病院經營と一致しないとか何とか大分聞かされますが、お序に御感想は』

小生『君は直ぐ職業寫識を發揮するから困る。病院生活を書けなんて無理だよ』

雜筆記者『それだから社會が淨化されない。院長さんなんか知らぬ間に、卽ち燈台もと暗しで改善されべきことも改善されぬ。經驗の發表がないから後續者が迷ふ。進步改善すべきことに向つて、經驗を實際を發表する誠意なきものの多き世の中だから進展がないのではありませんか。人々が社會を國家を眞に憂ふる卽ち志士仁人が勘いから益々暗黑世界になるのでせう。あなは暗黑世界から光明世界を見出しつつ尙且つ……』

小生『そんな議論は、またにしやう。僕だつて人間だから神經はある。然し世の中のことは理屈ばかりぢやいかんよ。こんな場合に遭遇すると運命觀が多分を占めるからです』

雜筆記者『分かりました。お蔭で原稿が出來ました。これで毎月〳〵の原稿病がなほるのです。何でもないことですよ』

小生『オヤ〳〵、僅か十分位のお話が原稿病を直すッテ、それなら僕も原稿病院に毎月の入院するかナ』

雜筆記者『有り難う御座いましたではまた……』

小生『……』

◈大盜改心記

北漢山人

○螟災今村先生に、極內々で、この一小話を書きます。

○今村氏がマダ××署長時代、或る時、或る大泥棒を捕へた。が本人なか〳〵見どころがあるので懇々その不心得を諭し、これを刑務所に送つた。

○三四年の刑期が濟むと、本人娑婆に出て來て、早速今村氏を訪ふた。『旦那……御安心下さい。もう二度とアンナ眞似は致しませぬ』

○今村氏大に喜んで、早速座敷に招じ、晩餐を共にし、今夜は、泊つて行けといふワで、兩人枕を並べて寢んだ。

○その時、今村氏首にかけた財布を示し、『どうだい、今夜俺の知らぬ間に、これをソーッと拔けるかネ』といふと、泥君へッヘッ…と冷笑し『さう申しちや何ですがワッシ等の目から見ると、署長さんも、藁人形も、別にタイした變りはねえんでげして……』『ヨーシ、それなら改心土產に、お前の凄いとこを、俺に見せてくれ』、『委細承知いたしました』、兩人そのまゝ寢に就いた。

○曉方になつて、今村氏ツイうと〳〵し、やがて、眼が覺めると隣りに泥君がゐない。『さアしまつた。やられたナ』と、早速財布に手をやると、これは健在……。內味を見ると、毫厘の異狀もないソコで署長さん、『ウフッ、流石の大泥も、署長にかゝつちゃ、手が出まい、ヘヘッ』と快心の笑を湛えつゝ、フト氣がつくと、南枕に寢た自分が、グルッと一回轉、北枕になつて、床の間に脚を向けてゐる。『さては、人形にして、クル〳〵廻はされたか』と、いささか心外……悄氣てゐると、ソコへ夫人が出て來て、いきなり笑ひこける。『オイ〳〵、どうした』と訊くと、『まア……あなたのお召物は』……いはれて丹前を見ると、それは裏返へし、おまけに帶をとつて、お寒からうと、首卷にしてある御親切……。今村氏『ムーン』といつて、アトが出ない。

○四五日經つと、內地から書面『まことに失禮いたしました。それほどの藝術をもつ私です。なか〳〵舊生活の滋味が忘られませんけれど、御安心下さい。御親切にほだされ、斷じて明るい生活に入ります』、以來歲の改まる每に、決して歲首の晉問を、忘れないのであります。

龜屋食堂
金剛山
京城本二町丁目

なつた。心配だから一步〳〵洋杖で氷上を突き試めしながら步を進

膽を冷した話

大和田臨之助
（本町警察署）

話は昨年十一月末の事であるが私は未だ支那の間嶋地方は見た事が無いので年來希望であつた處、全地方の視察を命ぜられたので例年よりも暖いのを幸ひ、何の仕度もなく咸北の國境上三峰から越境あの國際鐵道だと言はれる電車の古箱利用の輕鐵で直路四里しかないといふ處をガタ〳〵搖られ、果しない波狀形の高原地帶的一望の畑地を物資集散の樣に曲りくねりに辿つて約八時間も要して龍井につき、それから局子街を視察し、間嶋氣分の半ばを味ふて上三峰に引返した。其時龍井で偶然一緒になつた府內同僚のK君、S君と同車であつたが、兩君が止めるも肯かず、豫定だから行くと强いて上三峰で別れ、琿春に向ふべく鏡城から動搖の多いガタ自動車約十里慶源を經て對岸に到り、それから渡船したが此時は未だ兩對岸から凸狀に約三分の一位宛結氷し三分の一位の本流の水面を擁して居つたので無論船は彼我の氷盤から氷盤に發着するが左迄危險は感ぜられなかつた。

そして琿春に自動車で龍井地方とは違ふ平原地帶を疾走、右手に遠く露支國境の連山を見て約一時間位で到着し、翌日視察して其翌三日目の朝鮮內地に引返すべく自動車で渡船場に駈けつけた處、前日來少し暖かかつた爲めか、流氷であつたらしいのが其朝未明の寒さで航路に當る部分が橋狀形に兩對岸に連なり流氷の塊まりが結合されて本流を埋め結氷して居るのであつた。

然し薄氷であるので自動車で渡渉は無論出來ない、徒歩でも本流の如きは濃かな一時的結氷だからと慣れた鮮支人が云ふ、でも渡船も駄目だと云ふのであつた。それは同所以外の處は本流が相當廣い幅で流れては居るが、流氷が烈しいので不可ぬと云ふので無理もないのであつた。その中二三の支那人が緩流圈內に屬する氷上を試驗的に幾度も渡つて見たが、孰れも本流近く迄行くか行かぬで駄目だと云ふ樣な形容をして戻つて來る

私は氷上通過には全然經驗が無い、多く其土地と豆滿江の實際に通曉した人の言を信じ進退を決するの外はないと思ふた。併しあんな一度覗たら二度と行かうとは思はぬ琿春に引返すのも不愉快で堪らない。斯く思案に耽けつて居る中に一人の支那人運轉手が根よく踊る樣な恰好で行きつ戻りつして居つたが、遂に鮮地の對岸に着いた。大丈夫今の內に來いと形容身振で安全順路を示して呉れた。併し斯く無事徒渉の範と安全とを示しては呉れたが、私としては安心は出來なかつた。何分慣れた上手と全くの素人の差が不安なのであつたが、でも善は急げと詰らぬ勇を喚起して私が先頭を承ることとなつた。心配だから一歩〳〵洋杖で氷上を突き驗めしながら歩を進めた。ところが未だ本流の危險圈內に入らぬに內水深深き處に到るに連れ、『ミリッ〳〵』と氣味惡い音響が連發する。でも本流でないので結氷の度が厚いと信じて居るから不安が薄かつた。こんなゾッとするやうな音響を征服して漸く本流の危險圈內に足を入れた。見ると流氷中の氷塊が狹流に迫つて無雜作に轉々連結した樣に氷結してゐるので然かも短時間で氷結したので極めて薄い氷り方であるその證據には足下に急流が手に取る樣に見える。そして橋狀形氷結体の上流からは絶へず流氷塊が突端に打付いては下に潜り、ゴトゴトと音を出して足下を流下する。徐々一歩〳〵進む毎に、此處は最も危險な場所だな！云ふことは素人の私にも判つた。それで離れた後續の連中にも『此邊は危險ですぜ』と警戒を傳へて遣つた。それで私も一歩を誤てば二ツとない生命を無駄に捨てねばならぬと充分な用意をして歩を進めたのであつたが、後續の人聲に氣をとられた刹那、氷塊の突起部に躓き、左足を滑りとられんとし轉倒せんとしたのを、やつと右足で躍り踏み止まつた。處がその反動が氷面に異狀を生じ、突然私の足下から『ミリッ〳〵ミリッ』『ケン〳〵〳〵』と凄ましい音響を發して、前方の氷塊の間の薄氷を縫ふて裂線が虹の如く描かれた。私は南無三失敗つたりと感じ啞然として佇立した此處は本流の眞中であり。殊に豆滿江の河底の形狀の如きは三角形をなし居り、水深四五十尺より百尺位に及ぶ處あり、加ふるに急流なる爲め常時に於ても救命困難な

知らぬ間に、これをソーッと拔けるかネ』といふと、泥君へヘッ…

さか心外……悄氣てゐると、ソコへ夫人が出て來て、いきなり笑ひ

りと聞きしが故、暫らくは佇むより外に術を知らざりし狀態であつた。する内に對岸で此滑稽な容姿を見た徒渉先生の運轉手君が『轉げたら危いから靴を脱げ』と怒鳴つて呉れた。私も成程と氣が付いて徐ろに靴を脱ぎ、左手に鞄と靴を提げ右手に洋杖と地下靴下で今は是迄なり進退孰れを選ぶも死線の頂點に置かれたる以上危險量に差なしと悲壯な覺悟を決め、神佛吾れを捨てざればとせめてもの力となし、一心不亂に南無阿彌陀佛を默唱し殆んど無心の境地に入り小キザミの烈音にも、直下の激流は僅々一寸の差にて幽明を異にすべきにも耳をも眼をも籍さず、一歩々々屠所に引かるゝ羊の如く暫し運命の歩を進め、歩速遂に本流の危險圏外に出で、小走りに小踊りして鮮地の對岸に辿り着き、天は未だ吾を捨てずと胸撫で下しホット一息した。後續した三四人も續いて着いた。共にあゝ危險でしたねと語り合ふた。是れで大丈夫と皆笑顔である。そして危險を征服した氷上を眺めて居た。

その中にドシンと大音響がしたそれは大きな氷塊が結氷体の突端に突擊したのであつた。そして見る内に氷面に深い大龜裂を生じた。樣に見へた。それで對岸支那地に後着した自動車に對しては先頭徒渉の運轉手君より危險信號の手振をした。

そして其運轉手君が私共徒渉者に對して重大な責でも果した樣な面持で『全く後二三分遲れるか、又はあの大きな氷塊が徒渉中に來たら大變でしたね。兎に角運がよかつた』と祝して呉れた。

君子たらざるが故に愚かにも危きに近寄り是を征服して甦生の快を感ずる。是れ俗人の常？

（昭和五・三・一七夜）

【五二】

書道漫談

森　哲朗

（京城齒科醫專）

春が訪れて、多の間眞黑に煤けて居た柳やポプラの枝が、いつか青みを帶びて來たのが目につく。また今年の鮮展が近づいた。作家たちは、もうぼつ〳〵出品への準備にとりかゝつてゐるだらう。鮮展は誰が何といつても現在の處我が半島の美術界に於ける年中行事の最も大なるものである。そして年を追ふにつれてだん〳〵と標準が高まつてゐるとの事であるから進歩のあと歴然たるものであらう美術界の向上のためにはよい刺戟劑である。鮮展の特長とも見るべきものは書及び四君子をば第三部として含んでゐることである。繪を見るついでに書を鑑賞する人もあらうしこれと反對に書を見るついでに繪も一寸のぞいて行かうと云ふ人もあらう。見る方の側から云へば實によい機會である。殊に大衆を相手としての會であるから各自の好めるものを自由に鑑賞せしめればよい譯である。そして自分の嫌な部はさつさと素通りして行けばよい。若し其の道の專門家なり、高き批評眼を有する人々に鑑賞せしめんが爲めの目的であれば別に小規模の專門的の會をつくつた方が、見られる作家たちにも見る側の人々にも、滿足されるであらう。鮮展と云ふ大看板の下に大衆をば大部分の觀覽者とする以上は、あらゆる美術、藝術を綜合して、心ゆくまで觀覽せしめるがよい。

書道は東洋に於ては立派なる藝術品である、由來東洋藝術と線とは絶對に不離の關係にあるもので古來よりの繪畫を見ても、單に陰影、色彩等によつてのみ優れた效果を收めてゐるものは甚だ少なく不朽の名品と云はれるもの〻多くは、必らず線を有效に用ひてゐることがわかる。書も又線によつて表はさる〻香り高き一種の藝術で其の形體には古來一定の約束があり、此の法則を越えない範圍内で無限に變化し得るものである。形が單純であるだけに一層上達に困難であると思はれる。繪畫を十年二十年やれば先づ立派な畫家として認められてゐる人が多い樣であるが、書に至つては恐らく十年二十年の稽古では眞の味はひはない大家と認められぬと思ふ。勿論繪畫も書道も其の極致は同じであるが、後者には、黑色以外の色彩を持たぬし、形が單純であり、一見して直ちに欽點がわかり、繪畫よりも素人向きがせぬだけ損な立場と云はねばならぬ。然し其の深さ

[illegible]

惡化し、東洋の美風は地を掃はんかとも思はれるの秋、其の反動と

[illegible]

盛況である。單に藝術品としてでなく、東洋精神の修養に資する點

りも素人向きがせぬだけ損な立場と云はねばならぬ。然し其の深さと匂ひとは無限である。

西歐に於ても文字は線より成立するも、これは實用の範圍を出でぬもので、東洋の如く藝術としての書はない。故に藝術としての情趣は彼に求められぬ。茲に彼我の大なる相違が存在するにもかゝはらず、たま〳〵西歐の文物に陶醉して我が東洋の藝術に充分の理解なく、一概に書は藝術に非ずとか美術の價値なしと論ずるのは當つてゐないと思ふ。

鮮展の催される毎にいつも思ふことであるが、西洋畫及び東洋畫に於ては、入選作品について、特に其の傑出したものなどには、審査員や其の他の專門家によつて丁寧に詳細に批評されてゐるが、書に於て其の批評をば餘り聞かぬ事である。今年からは是非共相當の大家によつて入選作品についていち〳〵批評感想を聞きたい。それと同時に書道を專門として立つてゐる人たちはすべて出品されることをも希つてみたい。場合によれば、書をもつて立つ人々の內に、出品して若し入選しなかつたら、又は特選にならなかつたらといふ一抹の不安あるがために遠慮することも全然ないとも云へまい。立派な作品は流派の如何を問はず、どし〳〵入選せしめて、書道の啓發に努めたいものである。

近來日本に於て書道熱の勃興は驚くばかりである。永らく西歐の思想文物の吸收に努めて夜も日もこれ足らぬ有樣であつたがため充分に消化することが出來ず、遂に食傷したかの觀がある。清濁併せ飲むの概はあつても今日では寧ろ其の毒害に禍されてゐる。思想は惡化し、東洋の美風は地を掃はんかとも思はれるの秋、其の反動とも見るべき一の徵候として書道の勃興は喜ぶべき現象である。各地に於ける書道展の盛んなること、幾多の書道雜誌が發行され、中には二萬以上の購讀者を有するものさへある。支那碑、法帖の發行から、最近に至つては書道講座、書道全集などの全集物迄發行される盛況である。單に藝術品としてでなく、東洋精神の修養に資する點に於ても大いに效果のあることを疑はぬ。私はもとより專門家でもなく只藝術を愛する精神に礪りなく、繪畫を好むと同じ樣に書道をば東洋藝術の立派なものとして認めて趣味を有する素人に過ぎぬことを斷つて置く。（三月十五日）

孝子洞安居の歌

かつはる

朝つ日に霜とけぬれば北岳をおほひて霧は立ちこめにけり

ひるたけて霧ふり止まずのびしつつ北岳を仰ぎまたふみ讀みぬ

夕まけて淡雪降れば社稷壇の丘に來りて街の灯を見る

鶏一羽失せし朝のさびしさや雞木落葉の飛ぶを見て居り

鈍色のきぬに畫きし金泥の闌は見飽かず雨安居（ウアンジ）すれば

景福の秘苑の松をゆる風の音たかき夜は爐に集りぬ

よべの雨に壞え崩れたるかべの間ゆ秘苑の松の春めき見ゆる

早春の山をさぶしみ岩間もる藥水をくみてひとり飲みけり

蛇の思出

西岡照枝
（光化門官舎）

陽の色にも、土の色にも、もう春を感じる此の頃、蛇についての思出ばなしもいゝかも知れないと思ひます。

蛇は誰からも敬遠されるやうに私にとつても大きらひな生き物で春から夏へかけてのよきシーズンに、山路や野路のくさむらに、何か恐怖を覺えさせる陰影を投げかけてゐるやうで、その蛇についてこうもいろいろ、思出話を持ち合してゐるのは、不思議としなければならないけれど、私の子供の頃の生活が、此の生き物の可成り多い山國の中で營まれたせいかも知れません。

然し、その頃の思出は、有りふれた燕の巣を襲つた青大將を、兄や弟と一緒に追ひ廻したとか、小學校の歸途、狹い一本路に、白い腹を見せて横に置いてある、此の生き物の死体に、又はるばると廻り路をして漸く歸つたり、いたづらな男の兒が生きてゐる儘の尾を持つて水車のやうに振り廻してゐる光景に、目をおほつて、一散に逃げ乍ら、沼でそこら一面に咲いてゐた、そら豆の白い花が妙に思出されたり、――それは今になつても、鮮かに浮んで來る田園の初夏小景で、こうした思出なら別にとりたてる程の話ではありまん。

然し、田園の生活を御存じない方々にとつては、多少とも、珍らしいかも知れません、まして、裏の畑へちさの葉でもつみに行こうと背戸を出ると、まるで太い棒を倒した樣に、青大將の、直徑二寸近い、長さ一間あまりの物凄いのが、しんと陽を浴びて身じろぎもしないでゐる姿、又庭の、しめじめした苔の上を、通り魔の樣に過ぎて行く物凄く大きい縞蛇の、美しい茶と黑のしま目、大抵、ねづみを取る、これらの、凄まじく大きいのが物置の天井を、ザーッザーッと動く音を、炭を取りに入つて聞く時、可成り見なれた野の子供等にとつてもたしかに凄まじいものゝ一ッです。とつておきの、素晴しい話はこれからです。

私の、女學校年四生の初夏ですもつとも、その冬から病氣をして休學して、いつの間にか四年生になつてはゐるものゝ、ズッと養生をしてゐる頃、伊勢の雲出川の川沿ひの親類へ暫く行つてゐた時、目擊した、素晴しい光景で、こればかしは一寸簡單に御話するのは惜しい位です。

野茨の花が少しあせた頃です。磧には、青草が生ひ茂つてゐて、何か裏の白い、木の芽に似たも少し大きい葉の濯木が、野茨と一緒に、いゝくさむらを作つてゐるド真中に坐つて、今も覺えてゐる、ハイネの小さい詩集を見てゐたのです。

此の雲出川は、伊勢中部の平野を迂回しつゝ横斷して太平洋に注ぐ可成り大きい川で、川幅は、流れの所だけでさあ三十間位でしょうか、もつとあるかも知れません對岸は、どこの大川にもある洲になつてゐて、蘆荻がはびこり、少しばかり霞んで見える位遠いのです。

入日に近い、美しい陽を受けて河原一面はとても、美しい色をしてゐるので、その時の細い、色々の道具立ては、はつきり記憶に殘つてゐます。冗々しくなりますから、此の位にして、さて私の坐つてゐる堤防は、可成り高いので、水面迄は相當隔りがありますが、フト何か水の亂れるけはいを感じて、フト目をやると、靜かな流れをかきわけて行く、一すじの蛇なのです。鎌首を高く立てゝ身体をうねらせ、水を割つて進んで行くげにも勇ましい姿なのです。

中流に出ると、さすがに流れに押しやられつゝ斜線を描いて、然シグン〳〵進んで行くのです。川面一つぱいに夕陽の美しい金色を流して、その金色の中を、ひたむきに押し渡つて行く、それは正しく、あの生き物とは思はれない、何か尊いものゝ奇蹟を見せられたやうに、知らず、頭はドり合掌してゐました。

狹い野川を渡る蛇は、さじて珍らしくはありません、ヒョイと紐でも投げる樣に向ふの蛇を追ふ姿はよく見かけるものだけれど、こんな大川を悠々と押し渡つて行く姿は、私にとつては、實に素晴しい光景でした。

何か、自分の將來を暗したものかも知れない素晴しい飛躍でもあるのかも知れない――などゝフト考へたものです。無事に對岸に行き着いたら、たしかに惡い兆ではあるまいなどと。

然し蛇の方にとつては、迷惑な

京城雜筆

然し蛇の方にとつては、迷惑な話で、對岸に戀の對照でもあつて此の夕べ、此冒險を思ひ立つたのかも知れない、對岸からは、胸をおどらせて見守つてゐる、同類が居るのぢやなからうか、對岸蘆のそよぎに、フトそん事まで考へて見たものです。

勿論、無事行きつきました。坐つてゐる眞下から、ズッと斜線を描いて、少し下流になつた方の声のくさむらに、姿をかくしました對岸近くなつてからは、姿はもう私の視力ではとてもわからないけれど、金色に亂れる水面でそれと知られたわけです。

知らない間に、手は汗ばんでゐました。

呆然として了つて、夕陽全くおちる迄、知らないで坐つてゐました。

誰に話しても、ホホウと感嘆はするけれど、さして、素晴しがつて呉れない、田舍ではこうした事は、ありがちかも知れない、然しあの廣い川幅を、美事に押し切つた、その素晴しさをたゝない。

日高川の清姫を想ひ起したり、道成寺を思つたりしつゝ、春が來れば、野茨の花を見れば、きまつて此の思出です。

人間を見ると、定つてひつそりと、消えて行く彼等にも、彼等の生活はあらう、廣野の川を挾んて彼等にも戀の花は咲こう、人間の營みに忙しい間に、彼等は、ひつそりとあの廣い川を渡り合つて、お互ひの生活を樂しんでゐるのかも知れない。

もう一つは、忠清北道清州在住當時の話。

アカシアの葉が、漸々濃くなつて行く、これも初夏六月、アカシアの實生で土から枝を何本も手をひろげたやうに出してゐる、その下で、葉の色とよく似た、眞みどりの、實に美しい蛇を見た事です淡々とした、にごりのない、アカシヤの葉を陽にかざして、すかし見た、あのみどり色です。そしてそれにノロ〳〵と彈力のない這ひ方で人の姿を見ても、素早く、かくれる、あの持前の動作もしないで、でもアカシヤの茂みにかくれました。忌はしい感じの、全くない上品な蛇、と云ふとおかしいけれど、白蛇などもこうしたのに近いものだらうと思つたものです。

その頃、此の官舍の庭で、その時は私の外に二三人の人と一緒に見たのであるから、たしかに錯覺ではない——と云つて前のが錯覺だと云ふのではなく、實見者が多いから誰かから錯覺呼ばはりをする心配のないと云ふ意味で——此の時もアカシヤの茂みの下で孔雀の尾に美しく光りかゞやく、青金のいろ、あの、青光りのする、とても美しいコバルトの蛇を見たのです。これは、とても彈力のある肢體をしてゐて、横腹の所に、何か赤い斑點がズーッとあつた樣に思ふ。ヒラリとかくれて了つたので、皆がアッと云ひ合つたきりだつたけれど、それにしても、その美しさは一寸形容の言葉がない位でした。

山田新一氏滯佛作品展覽會

期日　四月五、六、七日

場所　三越支店階上

作品　滯佛製作六十點

一、京城雜筆寄稿家並に讀者の御觀覽を歡迎す。

一、賣約濟にあらざる作品は御希望に依り會後御讓り申します

四月一日

發起人

京城雜筆

清州は、蛇の多い所と聞く。偶々そうした異常な蛇を見たからと云つて、さして驚くには當らないかも知れないけれど、これも不思議にいつ迄も思出の底から消えないものの一ッ。

異常な蛇で、又フッと思ひ出しのは、初秋、初茸をあさりに近くの山へ行つた時、もつともこれは子供の頃、鄕國の、きのこの多いので有名な山へ行つた時の話、可成り奥に入つた所の、山峽に少し開いた水田の、その段々になつた所を上つて行くと、直ぐ下の水田の水の乾いた所に、異常に眞ッ黑い、頭から尾迄只、黑一いろに塗られた、そして小さい一尺位の、實に慓悍そうな、よく見れば、頭は鋭角をして、その尖端から炎のやうな舌を吐いてゐる――ぢッと見下すと、首をもち上げて赤い舌を吐き乍ら、向ふもぢッとにらみ返してゐる、――恐ろしさに一散に連れの居る方へ走つたのを思ひ出します。多分、これは話に聞く烏蛇と云ふのであつたかも知れません。眞ッ黑いさきから、眞ッ赤な炎のやうな舌を吐いてゐた、凄まじさを、それが小さいだけによけい妖怪じみた、恐ろしさを感じたのを、今も尙、覺えてゐます。

少し、長くなりますけれど、秋茸のシーズンに、何と云ふか、直徑、五六寸から、大きくて一尺近くもある、まんまるくふくれた毒茸が、雨後の山に、いくつも、いくつも、小人の群れのやうに、ふくれ上つてゐるのを知つてゐられるだらうか。

ヌラヌラと、底光りのするその大きい圖体が、翌日來ると、全く消え失せてゐる、まるで妖怪のやうな茸であるけれど、何か蛇を結びつけて考へるのは、やつぱし、そうした小人の村のやうな毒茸の間を、一筋の赤い毒々しい班紋のある蛇が這ひ廻つてゐたのを、いつの日か目撃したからであらう。

蛇に出逢つて、折角見つけた松茸の巢も放擲して、何か臭氣に、一目散に逃げた事も、珍らしくない、それ程、この生き物については親しい、私の子供の頃の生活ではあつたけれど、否、書き出せばきりのない程、未だ〳〵たくさんの思出をもつ、生き物ではあるけれど、一向好意を持てさうもない此の年月です。

◈番茶は匂ふ

三木一彦

○三月の中旬に、各學校の入學試驗があつたが、その前後一週間ばかりといふものは、何處へ行つても登落の話ばかり。

○櫻井校では、三十名近く高女（第一）への受驗者があつたが、通つたのは、お須磨ちやんといふ子唯だ一人。それで、落第した子の父うさんやお母あさんが、學校へ押しかけ、受持を廊下へ呼び出し、『さア〳〵先生、どうして下さいます』とつめ寄るものあり、『校長に會はして下さい。篤とお話ししたいことがある』と、血相を變へるもの……。イヤハヤ大變な騷ぎ。

○先生も、つく〳〵樂でないと思つた。

× ×

○セウルプレスの宮舘さんも、いよ〳〵朝鮮を引揚げたが、その發足のチョット前、一通の電報を握つてウン々々唸つてゐる。

○ワケを聞いて見ると、『父ケサ死す』といふ電報が來た。發信人の名前を見ると『武夫』、ところが宮舘さんの知合で、ムスコが武夫といふのが三四人ある。一体どの武夫へ、クヤミの電報を打つていゝか、サッパリ判らぬ。で『二三日前から唸り通してゐます』

○ソコで、或る人案を授けて、全部の武夫氏へ『御尊父御安泰なるや』

× ×

○川崎地質調査所長は、なかなか蠻カラで、この間亞弗利加へ行つた時も、少しも風土病の要心をしない。

○同行の白人などは、色眼鏡、熱帶帽子――いづれも光線を避くるため――その上毎朝キナエンを飲むといふ神經過敏振。ところが川崎さんに至つては、平氣の平左目鏡はもち論、無帽で通さうといふ勇敢振。白人が心配して、『オ―川崎！、蚊は白人よりも、有色人にとつつき易いのだから……たのむ、せめてキナエンだけは、我々とつき合つてくれ』、それでも腕を叩いて、『つまらんことをいひ給へ』

○ところが、或る日グッと高熱を起した。どうしても三十九度以上だ。いよ〳〵やられたナ。蠻地の土？……と思ふと、變に感傷的になる。いさゝか悄氣てゐると、白人等『ウフッ、東洋の豪傑にもホームシックはあり得るんだネ』

畫宣雜記

すが、これは何うしても總督府なり他の美術團体に於て相當な研究

畫壇雜記

多田毅三
（洋畫家）

最近の半島美術界に快報があります。それは先づ第一に池邊貞喜君が國展で楊牛賞を受けた事です池邊君に就いてはお存じの方もありませうが、一昨年鮮展に別れを告げて東上、梅原龍三郎氏に作品を見て貰ひながら精進を續けてゐるもので、昨秋東京で會つた時などその作風に惱みを持ち初めてゐるのではないかと思はれましたのに此の快報が參り、同君も後援者の立場にある岩淵山與水氏に寄せて『何と以外のことでせう……。私は何と幸運なんでせう』と書いて居る如く、今はその作業によい元氣を加え得た事であろうと思はれます。それにしても以外と誤記してゐる?、何んとが面白いではありませんか、同君は靑李として『甕』の會に加はつて短詩にも長じてゐました。朝鮮黨の進出の一つ。

×

今一つあります。それは矢張り洋畫で渡邊浩三君が槐樹社展で槐樹社賞を貰つた事で、同君は昨年巴里から歸つて鮮展にも二點出品して居りました。これも朝鮮黨のほこりの一つです。斯うなると朝鮮黨も仲々油斷がなりません。續いて加藤松林君が聖德太子奉賛展に入選するし秋には又如何なる人が活躍するか見物であろうと思ひます。第一もう鮮展も接近してゐるのですが、巴里から歸つた山田新一君の鮮展出品は鮮展の居住規定があつて全君のお宅が安東だといふので問題視されてゐるやうですが、全君は近く京城で歸鮮展開催の由ですから君の作風は充分その時鑑賞出來る事と樂しまれます又現在では遠田運雄君が巴里に滯在中で歸國の上は又大いに朝鮮黨のために氣を吐いて貰へる事となりませう。

×

又地元では三本弘君も大いに精進を續けてゐる事ですから、鮮展は勿論今秋の二科にも躍進する事だろうと思はれるのです。佐藤九二男君は、三角山の麓で靜かにこれも精進、鮮展には例に依つて洗練された土臭くないのを見せて貰へる事と思はれます。石黑義保君の畫風も益々純化されて來てゐるので一層風味のある處が出る事でせう。それに洋行の準備で驅命な前田金七君があり、水彩に日吉守河野野鄕、といふ人々、日本畫に李英一、堅山坦兩君の創意のある處に期待がかけられます。其他多數の人々に躍進的な出現、擡頭をこそ望まれるのですが、果して如何なる人々が、如何なる變化を見せるかゞ、鮮展の樂しみとなります。

×

此處で躍進と申しましたが、最近鮮展に新人の進出に目立つものが無いのは甚だ心細い事でありますが、これは何うしても總督府なり他の美術團体に於て相當な研究機關を設立して貰つて、もつと皆が基礎的な修練を自由に出來るやうに仕組むで貰ふ事であります。この基礎的な修練が無いと何うしても一生素人藝の境を脫せず、次第にそれのある者と無いものとのへだたりを作つて行くやうに思はれて來ます。殊に最近の鮮展には何だか審査にその素振りが含まれてゐるやうに感ずるのに、京城には一つもものらしい研究機關さへないといふことは一寸受け取り難い結果となると思ふのです。

×

それにもう鮮展でも出品者の優遇法に改良を加えられてもよい時ではないかと思はれるのです、何うも私が思ふのに鮮展を直接總督府の仕事としないで一大美術協會を設立しそれに補助を與へ入場料等の收入を協會のものとして今一段土地のものに食ひ入つて美術家の優遇にも志し、研究機關も設置する、自由な入選の下に度々內地の講師も招く、又洋行でして歸つて來るゝ朝鮮には居着けないといふやうな現狀を打開して、もつと中心ある美術界を形成出來ないかと思ふのであります。此間も京日に書いた事ではありますが、東京の方へ出品をしやうとしても鮮展を持つ土地柄として便宜も與へられては居りません。年々二百圓も三百圓もかけて出品に東京まで出かける事はかなりな努力で、自分の事ですから皆も驚かないでせうが實際大變な苦勞で鮮展の與へ得る名譽が不足すれば自然中央進出が野望となり又それが朝鮮を認めさせる事にもなるのですから何うとか心ある人々の奮起を願ひ度い

京城雜筆

と思ふのであります。

×

鮮展の一部の人々は、書と四君と稱するものとを併置される事を大分氣に病むでゐる人々もあります。これも先頃京日紙上で書いた事ですが、私なども書と四君子を別に盛大に催したらよいだろうと思ひます。それよりは工藝美術を含む事、此の道の者の地位を高からしむる事の方が如何に切迫して必要な事柄であるかを考へるのであります。版畫を加へる事は、既に曾て一點受付けて落選した作品があるさうですから、その慣例に依つて出品すればよいのではないかと思ひます。創作版畫を鮮展に今更ら含むとか含まぬとかいふ事は美術界のお笑ひ草になる事で、當然おいそれとやつてのけて貰ひ度いと思ひます。

×

純粹に美術の健全なる發達をといふ意圖が蓋をされる一場面があるとは信じませんが、直接美術の効果を使嗾しゝ効果を求めるといふやうな意動は決して健全ではないと信じます。美術上の純粹性は確保して靜に鮮展の使命も待たれなければならぬと信じます。そこに官展としての現在の鮮展は甚だ結構な立場に在ります。內地の今日の諸展は大變な黨派競爭で人間の爭奪戰です、逃げ出さないやうに恩惠の鎖がかゝります。自派擡頭のために審査員の爭奪戰が行はれます。それ等に超然として朝鮮の靑空の心善さを讃え得られますやうに――それは出來さうで出來ない事でせうか。

×

鮮展會場が景福宮內の舊共進會の建物に決定したやうです。又會場難で、展覽會場とよきホールは京城多年の欲望の一つです。音樂會を催すホールさへ無いとは悲しい事です。

×

最近朝鮮の畫家も偉くなりましてその名を騙つて作品を賣り歩く者が間々あるといふ事です。それに內地からの潛入畫家は無數で、語るに足り、遇する足るものには皆夫々の關係畫人が主となつて歡迎會も致しますし紹介も新聞などの筆勢が違つて來ます。何のことかわからないやうなおつきあいに忙殺されてゐる方々を見受けますのでこんなことを附記して置きます。

◈記者の手張

漢江漁郎

○富田屋洋服店の創業者――富田松太郎さんは、人も知る通り天理敎に凝り固まつて、家業を現在の店主に讓り、今では、備前屋ワキに、立派な敎會を建て、信者を集めて、朝から『助け給へ……』をやつてゐる。

○天理敎といふものは、實に不思議な魅力を有つものらしい。

× ×

○鐵業家の麻生晉波氏の令弟――昇氏（三阪町）などは、電氣學をやつた工學士で、信仰などとは最も緣の遠い科學者だが、十六七年前一だびこの境域に足を踏み入れて以來といふものは、カン〳〵の天理敎至上主義となり、今では一切を捨てゝ、道の行者になり切つてゐる。

○佛敎でも、耶蘇でも、これほどの麻醉はない。イヤ人をして茲に至らしめたといふ例を聞かない

× ×

○これも、南大門外の或る理髮師だが、三四年前脚を悪くして、もう家業が出來ない。しかし店は自分のものだから、それを人に貸せば、餓えるやうなことはない。それを或る人に勸められて、『天理敎へお參りすると、萬病が癒る』といふので、夫婦で敎會へ行き出した。脚は、癒らない。しかし癒らぬけれど、天理樣麻醉力は、忽ち夫婦をとらえ。二十五年勤勞の、唯一の紀念物であるその店舗まで、他人に叩き賣つて、そのスベテを、甘露台樣に捧げた。今では食うや食はずである。しかし口を開けば、天理樣の功德を――無邊廣大の御慈悲を――涙潸然として隨喜する。

○何たる不思議の、それは、天理樣の魅力であらう。

× ×

○コ、で話は變る――。

○本町五の難波酒造場の主人難波留三郎氏……先代が殘した債權がザツと二萬圓ある。知己の人々が、『少からぬ金だ。ドシ〳〵取立てるがいゝ。何んなら訴訟を起しては……』と勸めるが、何としても、ウンといはぬ。曰く、『人をいぢめるより、それだけワシが餘計働けば、何も文句はあるまい』

○鳥渡眞似が出來ぬ。

年前一たびこの境域に足を踏み入れて以來といふものは、カン〳〵の、唯一の紀念物であるその店舗まで、他人に叩き賣つて、そのスい』

○鳥渡眞似が出來ぬ。

街頭小景

德野眞士
（朝鮮鑛業會）

百貨店の戸口につくり花咲きて街を吹く風はすでに春なり

建築場の高き足場に昨日今日人うごく見へて風は春なり

髪を刈りて町に出づれば大路には埃をたてゝ春の風吹けり

町をゆく若き女の衣のいろ明るくなりて春うらゝなり

是非一度會ひたしと思ひし人にあひぬすなはちともに喫茶店に入る（今村鋼氏にあふ）

明るき店買よき店といふ店の手摺撫でつゝ階段をのぼる

窓ぎわの卓に相よりおちつきてよき話きく外はうららなり

出先きにてふとわが買ひし古き壺を人にほめられてうれしかりけり

この壺のよきわけききてしみ〴〵とひとり眺むるはたぬしかりけり

春まちてとりひろげたる門の内に萩の古木をうつし植えにけり

わが下す鍬はざくりと土に入り蚯蚓は二つにきられて動けり

◈銀行風聞記

南山臥客

○某銀行のTさん、柔道二段の達人で隱し藝も多く、其内『十の魂丹』が最も御目慢の一つ。其外に先生酒醋に興大に至れば、美人を逆吊りにする珍無類の藝當がある。此藝當には鮮滿の紅裙連もブルッと縮み上つて居るとやら。

○先達でも此藝當が將に開演せられんとする際、桃太老人引止め役を努めて突き飛ばされ、したたか胸を痛めたとやらて其罰金に川長の座敷テンプラを奢らせられたさうです。之が先生縮尻の一つ。

○次は東京出張の際、外戚の某大臣にお國の名産『ヒジキ』を献上に及んだ處、大臣閣下の玄關子恭しく之を閣下に呈し、新聞包を開いて見れば、コハソモ如何に中から現はれ出でたは『ヒジキ』ならで、ゴルフ用の泥靴一足！、大臣書生に命じ其泥を奇麗に掃除し磨きをかけて先生の宿元に届けさせたので、さすがの勇士七重の膝を八重に折り大々恐縮。之が縮尻の二つ。

○第三は或日銀行集會所で上着をぬいで球を突き、終つて上衣を着、集會所を出でポケットに刷毛があるのを見て、いつもブラシュは持たぬけれど、今日は細君が氣をきかして入れて置いて呉れたものと早合點し、其好意を感謝しつゝ、鎭海彌災兒童吊慰祭に赴き、名刺入を出したが御自分のは赤皮なのに黑皮になつてゐるので、ハテ面妖なと中を見れば『山口銀行田口耕平』、先生アッとばかり……。之が縮尻の三つ。

京城雜筆

黎明

山本吉久（南大門小學校）

盜人は多く夜陰に横行する、亂痴氣騒ぎも多くは夜中である。こんなに暗い所には不正不淨の行爲が發生して世の中の平安を破壞するのである、夜が明けると盜人だつて晝春婦だつて口を拭いて素知らぬ半兵衛さんを氣取つて人間並の生活體を裝ふて來る。明るいといふ事は餘程恐い事だと思はれる

人間の生活には常に我慾執念が離れないから、綺麗な着物を纏つて居ても、或は地位名譽を有つて居ても、往々不正不淨の行爲をなすものである。その生活が嵩ずると之を惡人といつてその惡人の多い世界が百鬼夜行の暗黑社會である。此の社會は警鐘の亂打、卽ち一大センセーションを與ふるでないなら明るい世の中に立て直すことは出來ぬであらふ。

我國現今の世相はどうである、國民生活の基調は政治を以て本とするのに一國の顯官、一黨の領袖が暗黑の生活を辿つて聖明を蔽ふたではないか。魚心あれば水心のかの政商が夜陰の生活を學んではないか。政治は公明を缺いで正義は頽れ、思想は荒み社會の諸問題頻發して民心の歸趨を誤らんとしてゐるではないか。此の危現象的世相！之を誰か暗黑社會でないといひ得るであらふか。

昨年來の新聞紙は疑獄事件の報道機關の觀があつた、その疑獄の惡質と多量には國民皆唖然たらざるを得なかつたのである。然るに檢事の果斷よく前例なき檢擧に檢擧を重ねて暗黑面を暴露し、その不正不淨を拂拭せんと努力せられてゐるのは黎明への道程として曉鐘の亂打だと思ふと、悲觀の中に一道の光明を認められぬでもないやふな氣がする。

前內閣の書記官長鳩山氏の言だと新聞紙はいふ、『敗軍の將兵を語らざるも、民政黨が政友は大盜人、民政は小盜人、どちらの盜人に入れるか、といつて廻つたのには困つた』と。その困つた所に反省がなければならぬと思ふ。國民が大盜人を惡んだ所に民政の絕對多數が生れたのであらふ。

濱口首相は吾人の政治は百パーセント公明でなくてはならぬといつて居る、自畫自讚の百パーセントは如何かと思はれんでもないが今迄よりも公明だらふとは其人格に照して信ぜられぬ事もない。國民も夜明けが近いたのではあるまいか。選擧に當つて身賣前代議士の落選や起訴候補の排斥、さては中立議員の不問等、よりよき方向に進んでゐるやふに思はれる。政治は國民生活の根本である、政治家の生活は國民生活の代表でなくてはならぬ。政界の一角に黎明の光を認める事が出來たら、陰鬱暗黑の社會もやがては明けはるゝ日が來るであらふ。

◈老女將の話

北漢山人

【六〇】

○もう二十年近くも置屋をやつてゐるといふ或る老女將の話。

○人間は、運と……もう一ツは自信でせうネ。藝妓なんテものは賣れないからといつて、グヨ〳〵してゐると、猶ほ賣れなくなります。先づ人並には賣れると、斯う自信をつけて、氣をよくして、戰線へ立つと、その中には、キツと運が向いて來ます。ですから私達は、叱らずに、本人が氣をよくするやう仕向けてやります。賣れないからツて、當り散らすやうな置屋さんは、マダ青いんですよ。

○人間は、實におかしな運を持つてゐますネ。しみ〳〵不思議に思ひます。私とこで、愈賣れないと決まつて、たとへば、××さんへ一寸席を替へる。スルトどうでせう、全く同じ環境なのに、メキ〳〵賣り出して來る。中には、商賣名を變へただけで、運の風の變つて來るのもある。ですからドンナに不景氣な妓でも、三年は、ヂツと抱えてゐてやる。それ〳〵の工夫をしてやる。多年の經驗で、一通り芽の出ないといふ妓は、まアありません。つ〳〵天道樣の至公至慈なことを感じます。

○面がよくても、割に賣れん妓才がハヂけても、も一ツ人氣のパツとせぬ妓。それと反對に、アノお多やん（お多福の事）何處がよくて……と思ふ位賣れる妓共もあります。藝妓なぞも、畢竟は『人德』の問題に歸します。心榮えがふつくらと出來てゐると、運の方がついて廻ります。

スグ判つた。しかし秀思の意吾だ
陽げざるものあつて、正純には、
の御上使に壓倒されるやうな悲壽
劇は、まづ今の世にはあるまい。

ひとり言

永樂町人

御上使の話

徳川家康は、『理』であつたといはれる。

その『理』に、もう一ッ『古狐』の智慧才覺までも、吹き込んだのは、本多佐渡であらう。

この兩人は、いつも帷幕の中にヒソ〳〵談合をなし、用意周到の軍令、及び政令を出した。

徳川家の諸將は、何んだか主人の外に、もう一人主人があるやうに思ひ。佐渡の僧上?を、不快に感ぜぬものはなかつた。

本多は、モトよりこれを知るが故に、幾たび恩命があつても、五萬石以上の大身にならうとはしなかつた。

ところが、嗣子正純に至つて、父の遺旨を忘れた。彼は、上命あるが儘に、遂に野州宇都宮十五萬石を領するに至つた。實に元和七年三月のことである。

翌けて、八年四月、將軍秀忠は日光に詣參するにつき、その往返兩回、宇都宮城に駐泊することゝなつた。

この時突發したのが、例の『釣天井』事件である。正純は、弑逆の意あり。天井に仕掛をつくりて將軍假泊の夜、事を行はんとしてゐるといふのである。老中以下色を失ひ、行程は、急變せられ。秀忠は、その夜這々の體で、川越城に入つた。

『釣天井』の虛構であることはスグ判つた。しかし秀忠の意甚だ釋けざるものあつて、正純には、『當分出仕に及ばず』といふ嚴命があつた。

越へて九月のことである。幕府は、正純に出羽山形城主最上義俊（五十七萬石）の城池を沒收するにつき、その使者として、出向すべしとの命を傳へた。ソコで、正純は、副使永井直勝、伊丹康勝、高木正次等と共に、出羽に赴き。上命を傳ふると共に、完全に官沒の手續を濟ました。スルトその場を變へず。副使永井直勝は、俄かに威儀を正し、『上意なり。正純殿……謹んで承られよ』と來た。正純は、呆然とした。ッイ先刻最上氏に對し、それをやつた……その舌根未だ乾かず。今度は、自分の添へ役から、それをやられる……。開いた口が塞がらぬのであるしかもその口上は、

其方儀御奉公の仕方上意に應せざるに付、今度宇都宮の城池を召上げられ、出羽國由利に於て新知五萬石を賜はるもの也

三斗の酸を滿喫させられた正純は一時死せるか如く緘默してゐたが屹と意を決し

上意の趣、謹んで承知仕る。但し新知五萬石との儀は、固く御辭退申上ぐる。御前よしなに御取次を願ひたい。

今度は、直勝が當惑した。役儀が違せられぬ。個人として、いろ〳〵なだめるが、どうしても聽かぬ。遂に乎馬を立てゝ、江戸へ伺ひ。結局正純を秋田城主佐竹修理へ『永のお預け』といふことで、一件落着した。

首をお上へ預けるものゝ果敢なさは、昔も、今も變らぬが、しかし御上使が、その場を去らず、別の御上使に壓倒されるやうな悲喜劇は、まづ今の世にはあるまい。

むす女の罪

正德年間の出來事である。

武州川越在駒林村といふところに、甚五兵衛といふ百姓があつた娘の『むす』は、伊兵衛といふものに嫁し、當時江戸に住んでゐた

ところが、或る時伊兵衛は、舅を訪はんとて、駒林村に到つた儘行衛不明となり。だん〳〵捜索する中、死體となつて、河中に浮んでるのを發見した。

ソコで、『むす』は、これを官に訴へた。役人がだん〳〵詮議して見ると、下手人は、餘人でなく『むす』の實父甚五兵衛、並に兄四郎兵衛であることが判り、忽ち捕へられた。

ソコで、川越藩主秋元但馬守はこの『むす』の處分を、いかにすべきかに思ひ惑ひ。幕府に對して指揮を仰いだ。といふのは、むすの行爲は、闘爭律にある『告祖父母父母者絞』――即ち尊屬を訴ふるものに當るらしいからである。

ところで、幕府でも、この回答には、大にひるんだらしく、時の儒官林大學頭（信篤）並に新井筑後守（白石）に諮問に及んだ。ところが、大學頭は、『死罪然るべし』と答申をなし、筑後守は『お構なく、赦免せらるべし』といふ復申をした。

兩人の意見書を見ると、いづれも堂々たるもので、儒學、史學の蘊奥を傾け、博引旁證、何さま骨の折れたことだらうと思はれる。だが、概括していふと、大學頭のは、論語『葉子語孔子曰、吾黨有直躬者、其父攘羊而子證之。孔子曰、我黨直者異於是、父爲子隱子、

爲父隱、直在其中』を根據とし、死罪當然なりといふのに過ぎぬ。これに反して、筑後守のは、支那の喪服制を引用し、夫の喪は『斬衰三年』最も重いものである。從つて夫のために訴へ。これに依つて父兄が、刑禍に當るも、また己むを得ぬことである。婦人は、既嫁したる上は、夫を以て『所天』とせねばならぬ。況んや『むす』の場合は、知らずしてこれを訴へ捕へられて始めて父兄たることが判つたのであるから、これを罪することは、大に當らないといふのである。

幕府有司が、筑後守の意見を採用したのは、いふまでもない。そして秋元但馬守の名に依つて、どういふ判決を下したかといふと、

【六二】

むす

右は夫伊兵衛川中に死し有之を見出し、訴へ出で候處、父甚五兵衛兄四郎兵衛兩人にて殺し候儀露堺致し親兄共に解死人として死罪に罷成り候、夫殺され親兄死罪に罷成候上は、其身も尼に致させ、鎌倉松ケ岡東慶寺へ差遣候

卯十月二十七日　秋元但馬守

今日では、殆んど問題にならぬことを、問題にしたのである。しかし幕府といへども――當時の諸侯といへども――裁判には、相當愼重であつたことは判る。

東京へ御越しの際は
是非御立寄りの程を

東京芝
泰明軒

西洋料理
支那料理

花の日比谷に近く
議院には一足です
丸の内へ御用の際
お晝は此處に限ります
一度御ためしの程を

スプリング
既製品　十二圓より三十二圓まで
合服
既製品　十六圓より三十二圓まで
京城府鐘路一丁目
濱洋服店
電話光化門二四四

二十年来
おなじみの
最上醤油

香味
佳絶
ホシ大ソース

お上品な
料理には
淡口醤油

最上醤油　淡口醤油

永登浦
大塚醸

内科
婦人科

今本醫院

（京城旭町一丁目）

院長　今本義胤

主筆　大浦貫道

月刊　心の友

京城南米倉町
心の友發行所

社長　福田有造

木浦新報
光州日報

（紙面全く一新）

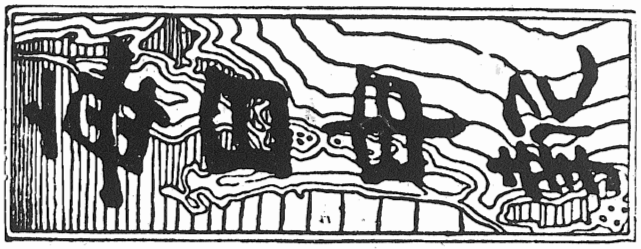
昭和四年二月廿五日印刷
昭和五年三月一日發行

本誌定價
一ヶ月（一部）四十五錢
半年分　二圓六十錢
一年分　五圓

京城府和泉町一七〇
發行兼編輯人　松本武正
印刷人　石川利夫
印刷所　京城日報社

京城府和泉町一七〇
發行所　京城雜筆社
電話光化門三〇六番

拾遺四編


拾遺四編

櫻咲く四月

お買物は三越

流行と實用の良品揃ふ

花笑ふ長閑な春がまゐりました。
三越にも清新の香にみちた今春の
流行品や實用品等が、百花と艶を
競つて陳列いたして御座います。
春の御買物は三越へ御用命のほど
偏に御願ひ申し上げます。

地方よりの御註文は御手紙にて通信販賣係へ御用命を
賜れば早速御送附申上げます。　振替口座東京七七番

三越

京城

京城雜筆（第百三十四號）

大正十二年一月二十九日　（第三種郵便物認可）
昭和五年四月一日發行　（毎月一回一日發行）